

# 川柳塔

昭和十四年一月九日 第三種郵便物認可  
平成十六年六月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通卷九二五号



● 山川協加盟

No. 925

六月号

## 予 告

# 川柳塔創刊八十周年記念川柳大会 第十回 川柳塔まつり

とき 10月10日(日)  
ところ アウイーナ大阪

◎詳細は後日お知らせいたします。恒例によって  
同人総会・各賞表彰・記念句会・懇親会を開催  
しますのでふるってご参加下さい。

## 残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を募集いたします。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、よろしくお願い申し上げます。

★個人 一口 二、〇〇〇円

(氏名・住所・電話番号など掲載)

★団体 次の四種といたします。

① 1/4頁 六、〇〇〇円 ③ 3/4頁 一二、〇〇〇円

② 半頁 九、〇〇〇円 ④ 一頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 6月23日

〒565006 大阪市阿倍野区三木町一―一〇―一六

ウエムラ第2ビル202号室

川柳塔社

## 鶴彬顕彰 全国誌上川柳大会

### 趣 旨

鶴彬の不屈の業績を顕彰し、イラクへ自衛隊が派遣された今、反戦平和と社会風刺の精神を現代に生かす川柳を募集する。優秀作品を表彰するとともに、入選句集を発行・送付

### 選 者

石川 重尾 川柳研究わたらの会主宰  
佐藤 岳俊 川柳人社主宰  
塩満 敏 あかつき川柳会代表  
島村美津子 川柳大学創立会員  
田中 正坊 川柳塔社参与

### 参加費

1000円(投句料・句集代)  
賞 あかつき大賞 3万円

準賞 1万円(2点) 佳作 記念

品(5点) 入選句100点を句集

に掲載して配布する。

### 申込み

① 所定の投句用紙に、未発表の作品  
2句、氏名・住所・電話番号を楷書  
で記入し、参加費を添えて左記へ  
② 締切 6月30日(水)  
③ 発表 8月15日(日)

〒536-0024 大阪市城東区中浜1―1―27

川端一步方 あかつき川柳会

主催 日川協加盟 あかつき川柳会

# 「礼」

## 河内 天笑

古くとも僕には仁義礼智信 路郎

明治の気骨が凛と伝わる路郎の路郎たらんとする名句です。昭和四十六年秋、生駒の葎乃先生宅を訪ねた折に頒けて頂いた五作品の内の一つで、平成十年に森下愛論さんに表装して頂き、わが家の家宝となっております。

大相撲夏場所が中盤にさしかかりました。今場所は何と言っても横綱朝青龍がどこまで連勝記録を伸ばすかが注目されている中、前半戦の五日間を勝ちつつ放しの力士は朝青龍、北勝力、時津海、金開山と普天王の五人。中でも西前頭筆頭の北勝力は、立ち合いから一気の押しで初日に魁皇を倒して勢い

にのり、武双山、千代大海と三大関をなぎ倒しその勢いは止まりません。そして六日目、横綱との対決です。これまで四回顔が合って朝青龍の四勝と一方的ですが、今場所の北勝力には勢いがある、「もしかして」という希望を持たせてくれます。

制限時間一杯。挑戦者が二回も突っかけ、この一番への緊張ぶりが窺えました。両者立ち上って横綱の鋭い突きに一旦わずかに後退しましたが、ぐつとくい止めるや否や間髪を入れずに突き返し、右のど輪攻めで一気に横綱を土俵の外へ押し倒しました。この瞬間、朝青龍の連勝は三十五でストップ。あちこちで座布団が舞いました。この胸のすく勝利へテレビ機数から惜しみない拍手を送り、普段はコップ一杯の冷酒を二杯も飲んで祝福しました。

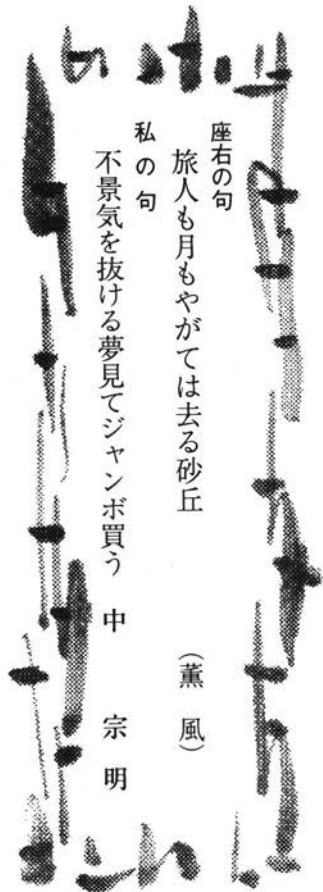
私が大相撲ファンになったのは昭和三十二年で、初代若乃花と栃錦が全勝同士の千秋楽対決を心齋橋の喫茶店でテレビ観戦して以来です。そして五十

年近くもファンでありながら機数席で観戦したのはただの一回です。それは平成元年の春場所で、大変迫力があつた記憶があります。

大相撲の良さの一つに規律正しい「礼」があります。支度部屋から入場して土俵に一礼を拝し、東西の席につきます。退場の際もこの一礼を欠かしません。神聖な土俵に対する礼は日本の伝統国技への畏敬の念を見せてくれます。

「グランドにゼニが落ちてるんや」という鶴岡一人監督の言葉は有名です。ヤクルトから巨人、そして阪神と三つの球団で優勝を経験した広沢NHK野球解説者が、嘗て外人選手から「何で日本人はグラウンドに礼をするの」と訊ねられたそうです。

川柳の句会場も神聖な場所の一つです。川柳の会や運営を支えて下さっているスタッフのご苦労に、たのしい仲間達に、そしてこの神聖なる川柳の会場に「礼」を心がけたいものです。



座右の句

旅人も月もやがては去る砂丘

(薰風)

私の句

不景気を抜ける夢見てジャンボ買う

中 宗 明

## 川柳塔 六月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 礼	河内 天笑	(1)
フットバッグ	新家 完司	(2)
川柳塔 (同人吟)	河内 天笑	(4)
自選集		(54)
水煙抄	板尾 岳人	(59)
麻生路郎物語 (30)	東野 大八	(79)
愛染帖	波多野 五葉庵	(82)
誹風柳多留二四篇研究		67
茴香の花	藤田 泰子	(88)

### フットバッグ

新家 完司

通販のカタログがおもしろい。頭を使う必要がないので、ベッドでばらばらめくるのにちょうど良い。世界の珍品や珍味、日用雑貨に衣料品、そして、草花や庭木など等、きれいな写真を見ているだけで楽しい世界が広がる。たまには購入することもあるので、通販会社には「お得意さま」とインプリントされているのか、様々なカタログが送られてくる。

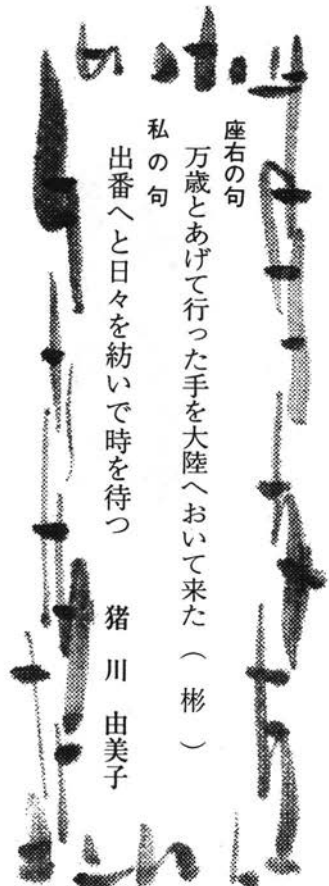
自宅から一歩も出ずに買物が出来るとは、便利な世の中になったもので、百貨店や専門店がない田舎町に住む私にはありがたい。地域の商店が苦戦しているのは、消費者の買い控えばかりではなく、テレビショッピングや通販の普及もかなり影響しているだろう。

カタログショッピングでは、繰り返しカタログを見て思案するので衝動買いは少ないが、インターネットによるネットショッピングは、検討する時間を充分に取らず、テキパキ手配して失敗することが多い。

ある日、テレビのスイッチを入れると、足だけのお手玉をやっている人がいた。「フットバッグ」という新しいスポーツなのだという。見てみると、お手玉(フットバッグ)が



「愛」	門谷たず子選	90
一路集「いも」	古川奮水選	90
「洩れる」	津村志華子選	91
初歩教室「介護」	三宅保州	92
■柳論 川柳の味の一つに毒の味	仁部四郎	94
秀句鑑賞	同人吟	96
水煙抄	榎原公子	104
■エッセー 夜光虫	高瀬霜石	98
五月本社句会	米田恭昌	105
梅田宣司さんを悼む	米田恭昌	105
各地柳壇（佳句地十選／岡本花匠）	米田恭昌	106
柳界展望	米田恭昌	121
六月各地句会案内	米田恭昌	122
■編集後記	楓葉・希久子	124



座右の句  
 万歳とあげて行った手を大陸へおいて来た（彬）  
 私の句

出番へと日々を紡いで時を待つ  
 猪川 由美子

目にも止まらぬ速さで、右足の甲からくるぶしへ、そして左足へ、さらに、ぱっと頭上を越えてまた足へ、と、まるで鮮やかな手品のよう。「これは身体機能と反射神経を鍛えるのにぴったりだ」「隠し芸でやったらカラオケより受ける」と思ってしまった。

すぐネットで「フットバッグ」を検索。リンク先に「フットバッグ」を扱っている販売会社を発見。間髪を入れずに、初心者向けの解説ビデオとフットバッグ二個（こていねいに二個も！）を発注。合計金額八千四百円。なんと、「フットバッグ」というものを知ってから二日後に現物が到着した。

フットバッグはお手玉より少し小さ目で、表はスエード、中にはプラスチックの玉（砂のこともある）が入っている。早速、ビデオを見ながらやってみた。先ず、足の甲に乗せたバッグをポンと上げて、くるぶしで受けるのが基本動作。「こんなもの楽勝！」とやってみたが、かすりもしない。頭からの指令と足の動きに時間差があり、加えて、足首の位置が頭の指令から外れているようで、何度やっても乗っからない。「楽勝！」から「こんなはずでは？」になり、ついに「無理なものは無理」とあきらめるまで悪戦苦闘一時間。

今、フットバッグと解説ビデオは本棚の隅で眠っている。

# 川柳塔

## 河内天笑選

広島県 藤 解 静 風

うきうきと指の先までさくらいろ

口下手な花は黙って実になつた

ひといろに燃えて短いいのちなり

よいしょして貰うと老いにでる元氣

いい川といい森がある先祖の地

低音の父のポツリが解りかけ

鳥取市 徳 田 ひろこ

表札の中で生きてる明治の絵

ひとかどの職人氣質曳くおとこ

棘のある言葉を食べた春の森

端正な寺を包んでいる香氣

母衣すつかり脱いで華になる

スカート裾が校門から出ない

砂川市 大 橋 政 良

どの顔も一泡吹かせたい羅漢

方円の水と遊んでいる蛙

ほうふらが踊る天水桶の中

フラッシュに馴れてまばたきせぬ男

盃に欲が浮いたり沈んだり

終点へ先に来ていた影法師

藤井寺市 高 田 美代子

平凡に飽きて悪戯を思いつく

傷ついたわたしに桜降りしきる

曖昧にしとくと自分まで汚れ

女対女で火花散り易い

不機嫌を眉根辺りに溜めている

それとなく愛想尽かしを言うておく

河内長野市 加 島 由 一

平和っていいな妻の手温かい

膝枕吐息のかかる耳掃除

春雨に恋は消えたり生まれたり

抱きしめて一緒に泣いてあげるだけ

花の下 男無心になり切れず

ほろ酔いの妻に背広を買う話

河内長野市 村上直樹

一滴の水から命躍り出る  
百薬の長か毒かと五十年  
あれ以来妻の秘書兼運転士  
飽食に習慣病という報い  
八つ目の癖やつこらさどっこいしょ  
今に見ろ妻をジルバで振り回す

広島県 福島万年

リハビリの妻の痛みに添うばかり  
ひとびとが乾く悪魔が火を放つ  
寝ていても妻は畑のことを言う  
草いきれ男根不意に隆々と  
戦とはこんなものよと首脳たち  
抱かれて時計に走る女の目

和歌山市 川上大輪

ほとほりが冷めると腹が減ってくる  
不在伝票ばかりが溜まる負の時間  
わたくしの鮮度が少しずつ落ちる  
男一匹洗濯物が溜まりだす  
雲行きが怪しくなってきたカルテ  
拝啓も前略も無く請求書

大阪市 西出楓楽

少し意志薄弱気味で好かれてる  
亡夫似の息子けむたい時もある  
旅の虫むっくり起こす花時計

通販にすぐに飛びつく悪い癖  
デパートを歩き煩惱募らせる  
三枚目賢い人に違いない

鳥取県 新家完司

お日さまが鎮めてくれる冬の海  
冬用のタイヤ外せという黄砂  
しけた街いろどる桜ユキヤナギ  
いい天気カラスも犬も嬉しそう  
よたよたと赤提灯にたどり着く  
にんげんに疲れて犬と戯れる

鳥取市 岸本宏章

毎日がチャレンジねじを巻き直す  
ハルウララ日本人は乗りやすい  
おみくじに凶があるから買ってみる  
吹抜けの無駄がリッチにしてくれる  
右下がり文字も景気も縮まらない  
首都移転ドドンと花火上げただけ

愛知県 早川盛夫

叱られているまだ期待されている  
貧乏は父の代から馴れている  
雑草のままでしぶとく生きてやる  
狼も羊もみんな仲間  
本当の自分に戻るおみおつけ  
欠点の一つ二つは人間味

松江市 三島 松丘

K点の少し手前で吐く弱音  
体力が落ちて悪知恵湧えてくる  
あれこれと蕾のままの夢を持つ  
折返し地点で歩幅狭くする  
再就職あせたネクタイ締め直す

松江市 川本 畔

足許が若さを少し遠ざける  
人間に生まれかすかな哀を持つ  
玄関のチャイムを鳴らす餡こ餅  
取り入れた洗濯物が笑い出す  
恋少し絡めて味を深くする

松江市 銭山 昌枝

脱皮してドキドキ夜明け待っている  
饒舌な雑草黙らせる軍手  
身が軽くなるまで欲を捨てている  
塩分を控え口数減ってきた  
極楽へ提げてく花を育てている

松江市 小川 注湖

保育器に愛しい命気張ってる  
大正のロマンを掴む夢二展  
バレンタインチョコの笑顔に躍る夢  
耐えている苦しみの先夢ひとつ  
人形は故郷訛り語り出す

松江市 津川 紫晃

太陽へ甘いしずくの傘を干す  
もつともつと歩け歩けと風が押す  
反逆の形で軍手干してある  
喜劇から学ぶ夫婦の倫理学  
しっかりと結んだ糸のゆるむ春

松江市 安食 友子

四六時中若しや若しやもゼロだった  
温厚も鬼と仏のふたごころ  
リーダーもたまゆらこくりしたいもの  
日が射すとクローズアップしだす塵  
べっぴんちゃん日ごと曾孫に浴びせてる

松江市 佐野木 みえ

仁和寺の桜今年もあでやかに  
娘を誘い行ってみたいね風の盆  
開店のそば賞めている高架下  
騙された積りで乗った大気球  
芝ざくらに座って春を満悦す

松江市 松本 知恵子

若葉さらさら期待するポプラの木  
食卓に春ざわざわと春キャベツ  
春霞パチンと弾く山椒の芽  
猫と見る窓に明るい春の月  
ネクタイに縁がないまま作業服

出雲市 富田蘭水

感謝する物に囲まれ日が暮れる  
価値観の違い命ののびちぢみ  
一役を終え安心のボランティア  
幸せのプランコ孫と揺れてみる  
鶯の声で目覚めるここ別荘

出雲市 岡あきら

保健婦の笑いましようにワツハツハ  
行くあてのない日碁盤が睨まれる  
句読点打って一息つくとする  
咲きぐあい確かめようと言うシユーズ  
満開へふたり座れるゴザ提げて

出雲市 吉岡きみえ

昼の酒ジンスクス通りよく回る  
幸せは今日の予定をクリアする  
好奇心あふれメダカの学校に  
正面を向いて陰ぐちきいている  
青虫がただいま脱皮するところ

出雲市 多久和敬子

経験が時には狂うさじ加減  
ちゃん付けで呼び合い昔喋り出す  
髪薄くなって昆布を食べている  
記憶力落ちて老後の不安抱く  
親の癖しつかり継いで子の巢立ち

出雲市 久谷まこと

花便りうろろしてる寒気団  
重ね着も一枚脱いで花の下  
数かずと命を守る薬づけ  
見通しですべて知ってる母の胸  
倅せも人並らしい笑い声

出雲市 岸桂子

赤い服着てもどっこいしょと座る  
三差路で方向音痴また迷う  
散る花も咲く花もあり季は巡る  
エレベーターブザーへ私降りる破目  
言い訳はしないでおこう嘘になる

出雲市 石倉芙佐子

身の内の雨は狂想曲になる  
イベントがまた一つ増え花の里  
満月に今宵限りの花吹雪  
戦場にはかなくも咲くほととぎす  
風に散る花の化身か男と女

出雲市 板垣夢酔

ちぐはぐな夫婦も独りよりはまし  
どのように料理するかとにらむ鯛  
病室のベッドで食事とるむくい  
ハイはいと言えばバツから丸になる  
売り声に魚も跳ねて勇ましい



出雲市 園山 多賀子

麦畑こっそり私の巣をつくる  
和む輪に妥協してくる出雲弁  
あるがまま生きて卒寿のロスタイム  
花言葉ボエジーがあり気を許す  
散りぬるを我が世の常とさくら舞う

出雲市 小白金 房子

伝統を生かす能面春を舞う  
純白のドレス装う雪やなぎ  
出逢いあり別れかなしむ花の駅  
久しぶり友の放談聞く日和  
起床ラッパ吹けど動かぬ子がひとり

出雲市 青山 久子

塩まいてひとりの城を守りきる  
傷ついた小鳥を両の手で包む  
引き出しの奥にしまった内緒ごと  
てのひらに荒波越えたあとがある  
煩惱が消えてまあるくなつた影

出雲市 伊藤 玲子

新芽吹き裸体に春を着せていく  
開けられたら困る二番目の抽斗  
タンポポの綿毛伝言届けたか  
隙のある蓋から内緒零れだす  
死に際の手紙いろいろ考える

出雲市 小玉 満江

感謝して日蓮拝む佐渡の旅  
十二時間バスにゆられて新潟港  
もう二度とお参り出来ぬ佐渡の旅  
花の下ジャンケンポンで鬼ごっこ  
さくら咲くやがて毛虫は木に登る

出雲市 城多喜

亡夫の忌終えて女の顔になる (三十三回忌)  
よくもまあ今日まで生きて来たもんだ  
雨の中ポストまでへの十五分  
泥くさい話おにぎり食べながら  
初対面一步も二歩も引いておく

島根県 伊藤 寿美

久し振りメンデルスゾーン聴いて春  
温い手を握れば指に胼胝があり  
歳月や十四歳の罪と罰  
先走る影を飾にかけておく  
ふと亡夫かと思う落葉の歩く音

島根県 榊原 秀子

顔上げて見せぬ水仙たちの群れ  
目ぐすりと仲よしごっこ鬼ごっこ  
としよりに昔話はいい菜  
人形展ゆく約束へ指を折る (高橋まゆみ展)  
とびついて買うふるさとの写真集

島根県 持田 多輝子

倉敷市 小野 克枝

お茶席でキラリと光る葉指

境遇が似た者同士お茶に呼ぶ

気がねなく大の字に寝る里帰り

そう言えばあの日の謎は深い闇

さわやかな友の来る日を待ちわびる

島根県 森 茂 美

倉敷市 井上 富子

一億光年そんな昔を見る鏡

ウイルスの疑いもたれ殺された

声高く派兵反対言える幸

十五から飲んだお酒が効いてきた

火葬場の沈黙破る缶ビール

島根県 多々納 テル子

岡山県 大石 あすなろ

四温には五臓六腑も日干しする

お互いに枝を伸ばして咲く垣根

久しぶり皮靴はいた病み上り

のほほんと噂が集う日なたほこ

金婚も間近だヨ―シ頑張ろう

岡山市 井上 柳五郎

岡山県 国 米 きくゑ

お祝いの重なり春の酔いつづき

歯科治療歯磨き一步から習い

先生の目に良い子悪い子普通の子

人柄をすっかり変えた玉の輿

頑張った過去偲ぶ日を生きている

真実を見たく心に窓を置く

疑うて信じて破片丸くなる

どしゃ降りへ無口な父の傘が開く

言い訳の泥をかぶってくれた友

過ぎ去った時間と笑い話する

倉敷市 井上 富子

女房のナビで操る平和丸

停年が来ても咲かない銭の花

ある時は男になつて乳房

人生の半ばで迷う人の道

安酒場芋焼酎に絡まれる

岡山県 大石 あすなろ

深呼吸して大地のエキス貰い受け

石段の高さに足を試される

広がり過ぎて困るわたしの守備範囲

胸をうつつスピーチさすが苦勞人

欲望を捨てると老いがしのび寄る

岡山県 国 米 きくゑ

予定などない日豊かに酔うている

傷口をえぐる質問する他人

琴線を揺らす心の叫び声

ライバルを亡くし静かに惚けていく

不器用な手だが握るとあつたかい

岡山県 福原悦子

欠点も愛も包んだ老い二人  
ピカピカの鍋ストレスが消えました  
欠札の葉書溜息ばかり出る  
おじいさんはトツプ我が家の知恵袋  
ライバルの一言光る生き字引

岡山県 山本玉恵

恋の熱ふつつ切れたらしよく食べる  
苦勞した父の背中にある自信  
生きて来た苦勞は言わぬ足の裏  
頼る人もなく限界の命抱く  
巡り逢いの愛を奏でる春の雨

岡山県 福嶋智恵子

巡拝の観音様に笑み貰う  
振り向いてみる余裕なく古希すぎる  
激動の都会馴染めぬ母の背な  
母が逝く何時まで続く白いページ  
川が涸れお伽話も消えてゆく

岡山県 小林妻子

俯いているのは不賛成らしい  
曲折に耐え表札は凜とある  
悪友の名で核心に触れたがる  
傾いた屋根にも満ちている笑い  
川柳塔と恥ずかしながら同い年

広島市 森田文

十八歳のストライカーに大拍手  
勝負どころ心得ている名エース  
ある面でわたしに似てるハルウララ  
しっかりと個性を持っていた枯葉  
手拍子が揃いさくらが散りはじめ

竹原市 小島蘭幸

良寛さんの書は手本にはなりません  
総理大臣たくましい胃をもっている  
ひとりにはもつたいたいね大画面  
暗証番号忘れたまままでいる夕陽  
なんにもないことはいいいことなんですね

竹原市 石原淑子

稜線をほんのり染めて今日が明け  
日々新たな燃やしつづける五十八  
青い鳥つかむ手許をすりぬける  
ヘルペスの痛み生きてる証だな  
慕い来る孫の重みを受け止める

竹原市 岩本笑子

桜見るゆとりがほしい春だもの  
引力と別に椿は風に舞う  
春の畦おや一列にツクシ達  
ふかふかのソファー誰かを待っている  
何咲いていてもよろしとにぎり飯

竹原市 正畑半覚

美祿市 安平次弘道

あの世とはいとこらしい行つたまま  
親馬鹿を誇りに生きていくつもり

ぼろぼろの地図にも夢がありました  
無為徒食妻との喧嘩ならよそう

いつまでも離れたくないくらい好き

行く当てはないがきっちり髭はそり

満月の想いを雲に隠される

文学碑を見つけそれからのめり込み

地獄への道か極楽への道か

まだ寿命あつて徒食をくりかえし

竹原市 森井菁居

熊本市 永田俊子

肩すかし食い自惚れを戒める

手鏡が私の顔にそっぽ向く

貧乏くじ進んで引いてみるも良し

顔ひとつ義理と情けに責められる

毎日が元氣毎日する祈り

相合傘したことがないカスミ草

懐しきかな参道にある昔

誰も踏まぬスカート少し淋しいな

土壇場になつたら知恵が浮かびそう

パソコン不得手 信玄袋の中の知恵

竹原市 時広一路

熊本市 岩切康子

題の無いドラマ始まるいい目覚め

能に花うつとり春に満足す

鈍行の窓から温かさを貰う

様変わる街に記憶が追いつかず

宇宙人居るかも知れぬ空の青

情熱の持ちようで変わる私生活

順番へ謀反おこすな生命線

風雨に閉ざされ思い広げてる

味気なく同じ薬を日に三度

希望をも小さめにして生きている

宇部市 平田実男

熊本県 高野宵草

賞味期限切れる頃から味が出る

陽を恋うて媚を売ってる胡蝶蘭

愛してると言わないままに共白髪

美味しいと言ってる顔でないテレビ

念願の同居いい事悪い事

公平に花も枯らした除草剤

万引きを見てない振りをする動悸

認めたくないが控訴に貧富の差

神様も絵馬に書きたいことがある

買ってもせず当たってほしい宝くじ

唐津市 宗 水 笑

念仏も座禅も同行遍路旅

ほんとうのよだれを垂れる春の牛

兄弟で行く先違ふ海と山

不審者と思われそうな通学路

不器用な老いを余所目の電子音

唐津市 市丸 晴 翠

二人して探そうストレス逃がす道

苛立った私を笑う臙月

玩具箱 電池の切れた顔ばかり

地球病み水も空気も銭が要る

回転ドア入る気合の深呼吸

唐津市 井上 勝 視

春ですネ海も日増しに軽い色

不安です太字のメモが離せない

鈴を振り神にメールを入れている

親離れせぬ子の罪は誰にある

ホロ酔うて長生きの意義問う傘寿

唐津市 樋口 輝 夫

白内障 札束だけはちゃんと見え

大声で言うから正論なんだろう

激論に机上の水が震えてる

義理チョコに義理立てをする律義者

元職がまだ反り返る古希の会

唐津市 久保 正 剣

ロボットに金属疲労という寿命

止まり木の客の視線にドアが開く

酒癖の女と区切りをつける酒

鉢合わせして合鍵を見比べる

年金で頭脳道楽して幸

唐津市 山口 高 明

暗殺の恐怖に耐える脱北者

兵役のない列島を謳歌する

週末はハイカー群れる登山駅

叱られた息子は祖父の膝へ逃げ

好きだから男一匹飼ひ殺し

東かがわ市 神 保 坊 太 郎

さかしらを言つて返り血を浴びる

ここからは先に歩けよ影法師

何もかも満足をして呆けはじめ

ためらいが追伸で書く火の思い

恋最中 恋に停年などはない

東かがわ市 瀧 井 勝

歳月に感情枯れて仲直り

苗植える土に陽射しも暖かい

出る幕が未だあるらしい招待状

胸奥に秘めて汚れない慕情

最悪の場合ばかりを言う主治医



東かがわ市 原 賢

不義理して言い訳少し嘘も交ぜ

そして春冬の話はもうよそう

風ぬるみ微笑み見える道祖神

三月二十日サリン イラクと我が誕生日

歳かさね瘦せた我が身がおもくなり

東かがわ市 池内 かおり

泥つきを貰って無二の親友に

無人駅の猫と座布団分かち合い

いただきます言ってくださる人と居る

とぼつちり受けそうだから押し黙る

横車押してる人も崖つぶち

東かがわ市 川崎 ひかり

赤ちゃんは泣いて大人を引きつける

孫抱けば腰が悲鳴をあげてくる

ゆつくりと春が顔出す植木鉢

口下手が赤面しながら言うお世辞

ケイタイを持った否 否 持たされた

東かがわ市 伊勢 八重子

花曇り墨絵流しに暮れ初める

都合良い時だけ人は寄ってくる

子の電話一瞬オレオレかと思ひ

旧姓で呼ばれ昔の顔に逢ひ

荷にならぬ心のこやしなら欲しい

東かがわ市 清川 玲子

雑草の緑に萌える無人駅

こだわりの土に匠の技が冴え

合掌のかたちで新芽顔を出す

野山より追いついてられて塾通ひ

野の花は可憐な顔で風に耐え

松山市 古手川 光

声かけるとこの頃子供とんで逃げ

老いるほどもっと知りたい事が増え

当然のように三食たべている

ケセラセラ五月病には罹らない

納豆のような人にはかなわない

松山市 高橋 宏臣

高齢化迎え撃つ気の赤いシャツ

聞いてやるだけで喜ぶ老いの愚痴

もの忘れしても笑って生きている

イラクから読めない風が吹きまくる

血生臭いニュースの中で桜咲き

松山市 丹下 美津子

嫁ぐ娘を連れて最後の花むしる

満開の桜の下で野球拳

血圧が上がらばなし一点差(甲子園)

麦藁帽ひと目でわかる里の父

探査機が火星の謎を少しずつ

松山市 宮尾みのり

葬送の煙が消えてジ エンド

悪たれを言う本心は人を恋い

疲れ過ぎ荒野さまよう夢ばかり

ご近所と兼合いをとる生き上手

マイペース少し変り者にされ

愛媛県 中居善信

酒ばかり飲んでる芸の無いことで

のびのびとしてる田舎の子の根気

自己主張しているだけの杉花粉

木の芽和え山家のくらし老い二人

隙を見せたら妻に尻尾を掴まれる

高知市 小川てるみ

ピンぼけの写真の方が美しい

せせらぎの音に貰ったアルファー波

ハッピーな今日に続いて欲しい明日

隠してもタンス預金が騒がしい

いろいろな風に出合った人間味

高知市 北川竹萌

月並に故里思い出の九十路

もじゃもじゃがとても嫌いな性分で

早朝の散歩は鳩に囲まれて

藪柑子 祠の側で呼んでいる

若い日に故里の向上考えた

高知県 赤川菊野

孤の部屋で浄土の暮しなど思う

青春の嗜着はモンペ下駄ばきで

ニーハオと黄砂が春をつれてくる

一言が心の傷をまたえぐる

負けて勝つやる気をくれたハルウララ

高知県 小澤幸泉

じつくりと聞ける話が少なすぎ

タレントのうわさ話がギヤラに化け

裸一貫ぶつけてギヤラを競い合う

愛情と愚痴の詰まったダンボール

竹筒の酒しみとおる初歩き

弘前市 高瀬霜石

冷凍庫に入りきらないマニフェスト

眼を入れた途端汚れてゆく達磨

同級生みんな薬を飲んでる

鉄筋のお寺法話はエンドレス

まだ青春立ち食い蕎麦を立って食う

弘前市 高橋岳水

コーヒートをブラックで飲む二日酔い

売名の弔花が肩をいからせる

柏手が心の霧を追い払う

冒険が好きで未知数抱く男

妻の愚痴サプリメントと思いたし

弘前市 櫻庭順風

創造の大峽谷に佇つ恐怖  
ひしひしと恐怖が迫る防護柵  
目の限り大溪谷が我が浄土  
こつこつと巨億の地層積み上げる  
陥没と隆起が喉でからみあい

弘前市 岡本花匠

春もみじ優しく匂いひと和む  
発芽米に梅干添えて梅雨に耐え  
愛憎の凭れあう橋夢を織る  
草を抜く麦わら帽の母達者  
父の歳二十年越え偲ぶ恩

弘前市 相馬銀波

聞かれても持病を知らぬ木偶の日々  
先の先読まれ煙草の火を借りる  
迷惑は覚悟新聞音読し  
樹齢来て買手を知らぬ杉の山  
古傷が湯治に誘う春の風

弘前市 須郷井蛙

一升ピン毎日減つて父達者  
鶏に建ててあげたい供養塔  
子がみんな育ち二人の広い家  
混浴をさける妻がまだ女  
母が来てビタミン剤を撒いて行く

弘前市 福士慕情

体調は好いけど雨が降り止まぬ  
ワントンポ遅れて影を踏んでいる  
カキ氷さくさく夏をかき混ぜる  
待合わせ場所を動けぬにわか雨  
心太 穴の数だけ押し出され

弘前市 一戸ツネ

温暖化わたしの嘘が溶けてくる  
狂うてケモノ生きて人間曲り角  
塞翁にとてもととも茶碗酒  
生きのびて土の匂いの葱を剥く  
妥協する母は好みの熱燗で

弘前市 今愁女

冬の緞帳おろして山が踊りだす  
早蕨が萌えて拳がひらきだす  
ぜんまいが綿に包まれ初々し  
覚えては忘れる花のカタカナ語  
バラは刺馬酔木の花は毒をもつ

弘前市 小枝ふさゑ

散歩道子の幻とすれ違ふ  
先人の努力崩れて行く農地  
その先は言うな仏が袖を引く  
悲しみを癒してくれるのもお酒  
米を研ぐことは忘れぬ健忘症

弘前市 宮崎 ヒサ子

季節外れの雪に出鼻をくじかれる

散歩道 春高らかに聞こえます

一日を大事にしようガラス拭く

無理のない範囲で一寸足のばす

ブローチは小振りの方に付け替える

黒石市 相馬 一花

麗人に尾を振る癖が治らない

有り金をむしり取られる保証印

人並みに酒を飲みたい下戸の肚

気骨あるママにも少しある悩み

裏技がもう通じない定休日

十和田市 阿部 進

もう一度貴男に逢つて抱かれない

妻という支柱をなくしてから狂い

孫の顔見ればファイト湧いてくる

心をつなぎ暮らしを守る古希夫婦

年老いて五体のねじがさしみ出し

青森県 小寺 花峯

煮こごりが溶けて青春期に別れ

勢いの届く範囲で石を投げ

未知数の児等の向日葵青くなる

地球儀を回すと飛んでくる涙

咽喉もとをつるつる落ちる善のそば

富山市 舟渡 杏花

たしかめる間もなく消えた虹の彩

ざわめきを残し女が消えた椅子

春雷が耳をつんざく一つの死

うつつらと埃をためる新刊書

生きるとはこんなに重い手弁当

富山市 島 ひかる

どの曲を聞かそう花のひらくまで

根腐れに気付かず水をやってる

狂牛病などは知らない草を食む

一服の墨絵に出合う峠道

緊張の国にのどかな日を願う

佐倉市 岡井 やすお

地球戦白か赤かの二極化に

亜細亜こわい皆日本をねらつてる

改革は善か悪かの諸刃剣

血管がされて人生観変わり

いちご狩りこの世の風と菜の花と

静岡市 安本 晃 授

ひと目見て親子とわかる顔と顔

振り出しに戻ると聞ける母の私語

うますぎる話尻尾が見えかくれ

春の海さらさら人を呑んで吐く

春蘭の薫りコントに染みわたる

静岡県 田 猿 杏

不揃いに育ち子育て面白い  
立ち向かう悪路に強いスプリング  
春光にみかんの味がほけてくる  
オベ終り医者笑顔にほっとする  
流水が一夜で去った北便り

大津市 中 宗 明

グループのドンとかつがれまじめ役  
恨んでも元に戻らぬ冷めた仲  
現代の娘気質に追いつけぬ  
デパートで活気あふれる地下一一二  
耳うちし総会無事に済ます腕

京都市 都 倉 求 芽

隔靴搔痒 凍りついている北の国  
大いなる平和だ惑星の軌道  
インターネットが情報のダム壊す  
ウィルスや組み替え遺伝子 食の乱  
重心はもとから低い短足で

京都市 高 島 啓 子

何回も掌を洗っては生きている  
赤ん坊泣いてる女性専用車  
自然食品店は不便なところにある  
雑用をする片付く家の中  
ロボットに第六感はないのなり

亀岡市 井 上 森 生

里山の鶏やカラスもほっとする  
辞めてから宇宙泳いでいるような  
熟年も浮かれたくなる選択肢  
宅配で活きハマグリ春便り  
だんだんと好きになります仏さま

京都府 丹 後 屋 肇

格子戸からむ柳の京町屋  
花吹雪浴びて最徐行する車列  
フェロモンが利いて小皺が伸びてくる  
待ち時間尻の据らぬ診療所  
焦躁感メール未だに届かない

京都府 稲 葉 冬 葉

申年某日確かにここに置いた傘  
二束三文にされても悪びれず  
好奇心ばかりで終りのないドラマ  
ライバル意識はとっくに消えている  
植樹した吉野桜が早咲いた

さいたま市 八 田 敏

骨折のリハビリ老化に追い越され  
気が付けば駅の階段手摺り持ち  
健気にも梅ベランダで実をつける  
花冷えと陽気桜も迷うだろ  
あと幾度花見出来るか二人して



八王子市 播本 充子

事務局をドギマギさせるラブレター

春風が助手を運んできてくれた

ほめられてオーバーヒートしてしまふ

愛がある証拠上手に嘘をつく

ぬくぬくと子供のまま歳をとる

東京都 後藤 早智

きな臭いのろしが透けて見える地図

神様の采配効かぬ土地が燃え

無神論者が迷い込む道がない

楼閣が軋む一つの謀り事

さくら花みんな包んで昇華する

東京都 岸野 あやめ

公園でトラのベストを着てる犬

生き甲斐は切手で繋ぐくらしです

ふるさとの天気予報はあした雨

北からの雲が晴れない日本海

すげなく別れて今生の悔い

東京都 清原 悦子

ほろほろの心を救う澄んだ空

本心が心の奥でゆらゆらと

弾まない心に水をまいておく

この先が分からぬままに春が来る

アテネまで熱い声援届けられ

横浜市 小野 句多留

騙される要素にあつた好奇心

痴話喧嘩先に逃げたの逃げないの

己が歳果鴨あたりがお似合いか

詐称罪問われ落ち込むのも男

カラオケに高い月謝の跡がある

横浜市 菊地 政勝

極楽を褒美としたい善を積み

歳重ね次第に消えてゆく野心

幸せなりズムが狂う妻の留守

デジカメの内緒を妻に覗かれる

長年の美食が造る血糖値

大阪市 前 たもつ

孫卒業 今年の桜早く咲き

卒業証書B29の音がする

酒卒業未練はないと言うておく

振り向けば中途半端なことばかり

生きざまを試す終焉楽しまん

大阪市 川原 章久

来ぬ女に開けてテーブル前の席

乏しい財布だから忘れぬ貸した金

悪事にも遣える金が憎らしい

兎と亀相手がいない蝸牛

春の陽にヒラヒラしてるデカパンツ

大阪市 岩崎公誠

軽い嘘砂に埋めて波が消す  
切り札を手にした妻に睨まれる  
棒読みの代理祝辞が長すぎる  
フリー切符朝昼夜と乗りまくり  
幸運の福耳持って弱音吐き

大阪市 川端一步

参拝に違憲ゆつくりと陽は昇る  
目の悪い亡母恋しくて春の海  
酒飲みの父にだんだん似てしまふ  
憲法の月綱引きは負けられぬ  
すみません言えぬ自分を笑う風

大阪市 神夏磯典子

梅雨前線そろそろ菌の出番です  
熟睡に優る満足感は無し  
退屈な猫に毎夜を起こされる  
肥ったら皺がしぜんに消えていた  
整骨医で固い心もほぐされる

大阪市 本間満津子

底にある悲しさはなに世が変わり  
何くそと思えど老化強い奴  
思い出を抱いて遥かな人憶い  
八十路坂心の友が一休み  
五目寿司 落に竹の子うちの味

大阪市 川久保睦子

いいことも無いが夕日が美しい  
咲く花も散りゆく花も春の花  
ああでなし こうでもなしと酔うほどに  
良い事に出逢うつもりで爪を切る  
不器用に生きてひとりの膳につく

大阪市 小糸昭子

これからは川の流れに逆らわぬ  
うちの娘の大雑把なのはDNA  
春です髪を切ろうよ外へ出ようよ  
知らなくて良い事知らないままでいい  
カレー好きちよつと顔まで色着いて

大阪市 津村志華子

セッセッセと学資保険に夢をかけ  
風みどり山路を縫うてゆく札所  
点滴をじつと見ている夕茜  
まだ女ほんのりシャネル匂わせて  
ひと刺しの言葉に深い傷を負う

大阪市 安達はじめ

なごやかに鍋を囲んだ笑い声  
おだやかさ酒一本の膳の中  
上役のカラオケ耳栓はめて聞き  
門限を過ぎれば母の胸騒ぐ  
骨っばい意見の光る投書欄

大阪市 渡部 さと美

ゆつたりと出来ない人も歳を取り  
座禪草雪盛り上げて永平寺  
エスカレーターお寺にほしいお年寄り  
難聴の友とのメールいそがしい  
遠いイラクいろいろあつて近くなり

大阪市 板東 倫子

春の陽が染みこむような日向ほこ  
武ジョッキー乗せてはにかむハルウララ  
有難う ごめんなさいが何故言えぬ  
名城の夜桜の宴を月覗く  
それぞれに歩幅の違う息子たち

大阪市 中田 あい子

やせたくて努力した日は遠くなり  
ルールないモラルが人の和をつなぐ  
八十路来て充実の日のまれなこと  
修身の時間がきえてモラル消え  
橋を行く舞妓のすそがちらちらと

大阪市 中村 叡子

内風呂が寒いと夫銭湯へ  
ピカピカに磨いた愛車黄砂塵  
歴史にも残る時代を生きている  
若者の花見もうもうパーベキュー  
ちんまりと椅子に正座の母花見

大阪市 小泉 ひさ乃

笹舟はなんにも言わず流れ行く  
合格のうれしい顔に逢いにいく  
友のためなら無の一字守り抜く  
止むを得ず握手した手に縛られる  
なるようになる娘の言葉気にかかり

大阪市 杉澤 汀

律儀にもあの帯留をしめてくる  
半分の半分ずつを老いと老  
老眼鏡とりかえつこの老いと老  
分別も盛りも枯れて老いと老  
勝ち負けも朝青龍とハルウララ

大阪市 奥村 五月

廃車まで大事に走るなわ電車  
憎い人だったが仏憎まれず  
雪サクラ紅葉と酒に縁があり  
医療費は増え年金は減るばかり  
居酒屋のムードを上げる紺がすり

大阪市 大川 桃花

神獣鏡これなら皺は映るまい  
疑えば紐も鎌首立ててくる  
顔バックしてストローで飲むビール  
長男の嫁と仲良くする打算  
負け馬の記事より小さい手術ミス

大阪市 野田栄呼

老人会はやや若いと役につき

今日は過去今を大事に古希の坂

気にせず高血圧の朝万歩

変りばえしない暮しに入れるメス

主婦業に給料あれば長者かも

大阪市 町田達子

花の顔見公園へ通つて

根気よく豆むいている人の顔

騒がしい世に不自然が面白い

突然の爆音飛行機低く飛ぶ

素知らぬ顔で噴水高くてかく伸び

大阪市 古今堂蕉子

咲かぬまま散るぞ私の知恵袋

原点は日本大阪河内八尾

はしばしをキチンと生きろとしんしばり

風邪引いて不協和音の心抱く

放し飼いだう徘徊しています

大阪市 松尾柳右子

家中の掃除すませて旨いお茶

終い風呂掃除してから上がり

趣味問えば小指を立てる客もあり

昔むかし大掃除の日がありました

ウォーキング花々眺め食進み

大阪市 津守柳神

ひと言のジョークへ映える老いの紅

過去よりも未来へジャンル切り変える

花便りタイムスリップするところ

寝て一帖起きて半帖にある悟り

花芽ニヨキニヨキ三鉢里子に出した蘭

大阪市 津守なぎさ

ダイエット中国黒酢飲んでます

満月に思わず見とれ歩を止める

対岸の火事で済まない自衛隊

がらくたを積み悪知恵が湧き出した

診療まち遠慮を知らぬ大欠伸

大阪市 玉置英子

烏カア病気かやさしすぎる声

花冷えもよろし見頃が長くなる

美容院鏡の顔と御挨拶

誰も見ていない今だと椿落ち

赤銀黄みんな緑になる新芽

大阪市 清水絹子

はした金だけど子の汗食事代

京は京古代を誇る奈良の駅

長居して十二時打って大あわて

健診の良を支える朝歩き

雛飾り見たさ一念名古屋駅(徳川美術館)

大阪市 西川 更紗

母の忌に母の想い出たぐり寄せ  
春雷に攫われそんなギャルの群れ  
風邪癒えた母と味わう根深汁  
騒がしいニュースに不安付きまとう  
太陽に向かってカーテン開け放つ

大阪市 榎本 舞夢

梅一輪備前鶴首よく似合う  
車椅子のお方と前後美術展  
おくすりをおやつのように探してる  
お守りのつもり保険が役に立ち  
長生きのおかげ楽しい出会い増え

大阪市 榎本 日の出

時どきは呆けて長寿を楽しまん  
裏表見ていただいて輪に溶ける  
円満も誰かがじっと耐えている  
脱線の理由も聞いて欲しかった  
いい時もあつたと今をなぐさめる

大阪市 中澤 伽羅

無口だと友が心配してくれる  
山を見て雲見て癒す目の疲れ  
好きだけで入門苦勞しています  
素直には飛行機怖いとは言わず  
金無いがいのちあるので戸締りし

大阪市 熊代 菜月

着メロをかえて待つていい便り  
お水取り火の粉が舞って春を呼ぶ  
おみくじになつてるティッシュ鼻かめず  
神仏困った時だけ思い出し  
富士山が日本一の顔をみせ

大阪市 伊藤 博仁

どう見ても様にならない昼の月  
まだこない返事に期待するポスト  
育毛剤伸びない髪にまだ期待  
残業のほすのあの娘が闇にきえ  
オベ代が三十万の犬を撫で

大阪市 星野 きらり

健やかに田芹の伸びて春匂う  
花咲けば仏に留守を頼む日々  
大の字に寝て花唄う回想譜  
ありがとう言わない日なし ありがとう  
聞き役に回ると頭冴えてくる

大阪市 鶴田 遠野

故郷帰り元気な生命取り戻す  
出血は気にせぬ恋の向こう傷  
女性車輛堂々と乗る日曜日  
いただけるものはいただく神の愛  
友情にけじめをつけてプロポーズ



大阪府 羽山 隆盛

六月が腰の痛みを連れてくる  
趣味の会小さな絆から栄え  
勝ち組の列を探して席につく  
ミスターも同じ病とうれしがり  
漆黒の喪服が放つおんなの香

大阪府 桑田 ゆきの

砂浜で拾った愛の奇跡です  
ほろ酔うて饒舌になる花の下  
裏話洩れて本道歩いてる  
年金の下がる話に息詰まる  
耳かした内緒話に扉開く

大阪府 米澤 俣子

お蔭さま楽をいただく全自動  
老い先を見ぬ若者はフリーター  
言霊の国に外来語が溢れ  
半分は貴方のための命です  
子ら巣立ち気楽になればたそがれる

大阪府 澤田 和重

僕だけの秘密にしている紙オムツ  
人いちばい恵まれました子沢山  
いい目覚め職のあるのがありがたい  
頬杖で顔の長さを受け止める  
うれしくて自分で噂ふくらます

泉佐野市 山本 蛙城

その若さなんて煽てにや乗らないよ  
おめでたいはずだ眉毛が伸びている  
春の夢だった窓際なま殺し  
オレオレも嘘請求も縁がない  
娘さんテレビでエッチ言うなんて

和泉市 西岡 洛醉

亡き母の教えが生きる素直さよ  
息災に一病かこつ老いの坂  
五十年妻と絆を温め合う  
突風に押されよろけぬ意地があり  
今日という旅を進めて善の足

和泉市 中川 楓

減塩の枷をレモンに助けられ  
妥協して自分の彩がうすくなり  
午後の茶のほっと一息桜餅  
ヒマだからメールで時間つぶしてる  
登下校見守っている立ち話

池田市 栗田 久子

わたしは女自分にかけておく暗示  
少しだけ貸しを作っておく相手  
挨拶は抜きとの挨拶がこわい  
暮らすのはあなたの香り届く位置  
強いものしか頼れない頼らない

茨木市 藤井正雄

定年の愚痴バラ色の過去ばかり

禁酒禁煙夫に二重丸あげる

初恋のその始末記を妻が聞く

うしろ前老いの兆しを笑うシヤツ

ジパングが遊べ遊べと時刻表

大阪狭山市 矢野 梓

ありがとう散りゆく花に礼を言う

来年の花見の予約しておこう

たんぼぼのわたの彼方に逝きし友

原産地確かめて買う魚野菜

迷いふつきれさわやかな朝となる

河内長野市 水谷 正子

鶏警報解放されて親子丼

二月堂幸多かれと火の粉飛ぶ

桜観て梅干漬けて盆が来る

ディフェンスは夫婦ちよほちよほ仲がよい

お向かいのちよつと気になる未亡人

河内長野市 石堂 潤子

春うらら猫の欠伸に誘われる

気がつけば腰を庇っている歩幅

マンシヨンは背高のつば風光る

声を聞く限りばあちゃんまだ若い

いいじゃない笑って増える皺ぐらい

河内長野市 山岡 富美子

ちよつとずつ譲ると温い絵が描ける

目鼻立ち美女とはちよつと違うだけ

ちよつとした段差に老いを試される

バス停のベンチを濡らす花の雨

屋台酒ちよつとですまぬ臙月

河内長野市 植村 喜代

今日ばかりみんな真面目な顔並ぶ(長さんが逝く)

その人の人生を見るお葬式

五十年添い遂げるって難しい

静かに咲いた桜へがやがやかと呑み

コーヒーに載せられて行く噂話

河内長野市 井上 喜 醉

祝鯛きようは主役で膳に乗る

孫の絵を貼った我が家の冷蔵庫庫

大変な時代落ちたら登れない

牛井の面倒を豚引き受ける

丸投げでゆうゆう居座る古狸

岸和田市 井伊 東 吉

カアカアと鳴いた鳥が命断つ

菜の花とコントラストの桃の花

シア派もスンニ派もないイラクの子

車での来院ダメと言う眼医者

ケータイをかけたつ若葉マーク行く

岸和田市 原 さよ子

嫁ぐ娘の父母に感謝の置き封書  
新葉にかえて不安な副作用  
寝たきりの母に朗報先ず聞かせ  
隋いのおにぎりうまい遍路旅  
京の舞い古都のロマンを秘めている

岸和田市 岩 佐 ダン吉

笛ひとつ地車走る山となる  
反逆の思いを抱いて流れてる  
九条を全ての神に読ませたい  
えらい目に遭ってだんだん人になる  
不意をつかれつい善人の顔になる

岸和田市 亀 井 皎 月

風水論まんざら嘘でなさそうな  
電話機に頭を下げて礼を述べ  
列の中パトカーが居るとは知らず  
常設のスピード検拳機が睨む  
もう飽きた三百六十五連休

岸和田市 土 橋 房 枝

人間を歯切れの良さで計る癖  
今時はOしにある呑み仲間  
自己満足で生きている呑気者  
つめたいねロボット犬じゃ癒えません  
ライバルの背が輝いて見える朝

岸和田市 木 村 正 剛

春場所も勝負持ち越す府知事賞  
いつまでも昭和引き摺る座り胼胝  
真つ白い下着だ安心して飲める  
削除キー触るとほくが消えている  
先達のいない五合目からの闇

岸和田市 雪 本 珠 子

古い二人主語ない会話で明け暮れる  
日の温み背中にためて草を引く  
お酒より貴方に酔っている私  
ほろ苦い思い出風が呼び起す  
旅先は照れずに夫婦手をつなぐ

交野市 山 川 日 出 子

ボランティアの善意を壊すテロリスト  
カメラ付き災害援助ロボット君  
初ロボは茶運び人形江戸時代  
ロボットが手術の助手をしています  
初恋を冬のソナタで思い出す

交野市 田 岡 九 好

空き家に人が居るよに沈丁花  
いいことのやって来そうな花明かり  
花吹雪われ劇中の人となる  
原点を忘れ漂流しています  
三本の橋で四国は道だらけ

交野市 森 本 弘 風

今年こそ酒を止めると四月馬鹿  
困われて星しか見えぬ露天風呂  
ど忘れと言えぬ武器持つ歳となり  
ターミナル桜吹雪が車内まで  
春四月油断の風邪に寝込む妻

柏原市 永 浜 加津子

白い雲追いつける眼に邪心ない  
始まりはコーヒー豆を挽く香り  
やさしさと儂さ残し散るさくら  
この辺で老々介護自覚する  
お花見の人で賑わう墓地公園

堺市 山 本 半 銭

つばひろの帽子ふわりと夏の街  
カラフルなビタミン剤に支えられ  
点眼は他人さまには見せられぬ  
無駄のない職人の技壁を塗る  
ある不安量販店で買う薬

堺市 宮 本 かりん

うちの人をこの頃騙せなくなつた  
冗談にしとこ笑うてすませとこ  
視野広しこだわりひとつ捨ててから  
うしろ髪引かれて越えてきた坂だ  
何げない顔だが凶星さしたらし

堺市 志 田 千 代

一人旅するには歳をとりすぎた  
難波より先の梅田は旅気分  
きつちりと半分にして不公平  
うしろ手に隠し持つてるプレゼント  
ガラクタを仰山残し死ぬつもり

堺市 和 田 つづや

苛立ちが丸い器に納まらず  
団栗の中だからこそ野心秘め  
物凄い美人と妻を間違える  
争いがまたぶり返す花の冷え  
無視されるよりもと苦情聞いている

堺市 源 田 八千代

幸先よい燕巣づくり軒の下  
ジューンブライド チャペルで浴びるシャボン玉  
レストランで人前婚と様変わり  
娘よの歌くり返す式前夜  
出来ちゃった婚のカップルもう離婚

堺市 西 村 りつえ

前向きも翳んでいます花粉症  
連敗にグズで返すハルウララ  
明け方も午後も眠たい台所  
ほどほどの運噛みしめるのど仏  
悪知恵で辻褃合わす家計簿

堺市 國見 蘭香

四條暖市 吉岡 修

風塵に染まぬ白さの雪柳  
良く寝たな小鳥の声に起こされる  
寝付かれぬ花を叩いて強い雨  
春風が持病に会いにやつて来た  
父の背を涙で偲ぶ初任給

堺市 柿花 和夫

古い師桜咲く日も同じ顔  
不粋とは桜の下のパーベキユー  
桜前線追いかける旅いつの日か  
人波が好きで今年も通り抜け  
車椅子に桜吹雪よもつと降れ

堺市 神原 文

雑踏の亡夫の声にハツとする  
大切なことかも知れぬ遊び好き  
胸底の灰汁を流して出直そう  
世の矛盾花もあきれて吹雪き出し  
人の振り見ては反省ばかりして

堺市 村上 玄也

芸無しで取り柄は酒が強いだけ  
警官の犯罪まさかよりまたか  
先に好き言うてしもうて敷かれてる  
女房は娘の彼氏知っている  
オレ流を個性的だと囃し立て

もの心ついた頃には臍曲り  
道半ばそろそろ手綱締めるころ  
もう来ぬと思つた恋がノックする  
酔うたふりこれもだいたい宮仕え  
殿中で悪玉同士助け合う

吹田市 太田 昭

温泉でつい入れ墨を見てしまふ  
近道を覚えてからは遅くなり  
正論を吐いて仲間がまた離れ  
洗濯の出来ぬ日の丸捨て切れず  
刃こぼれの中に人間らしき顔

吹田市 大谷 篤子

長所だけ見える眼鏡に買い替える  
神様の差しのべた手に救われる  
円周を駆けまわつてる悩みごと  
満月に向かい無心に歩き出す  
母の忌にひととき母の着物着る

吹田市 瀬戸 まさよ

いつのまに若葉 花ゆれ蝶は舞う  
分厚すぎ敬遠される父の本  
お返しもチケットにする法要忌  
現代と変らぬ知恵の考古学  
歯科治療こわばる弱さも余す

吹田市 山本 希久子

トンネルを抜けゆつくりと生き直す

九十五歳の母を励ます褒め言葉

トランプの相手を探す外は雨

花屋には大きな恩がある二人

アイディアが湧いてくるまで寝ています

吹田市 早川 棲世

日展へ書の弟子動員されて来る

文例集ある通知簿の指導欄

資本主義へバット一本立ち向かう

一生いつも もうちよっとだけほしい金

夫への鬼深層に飼って妻

吹田市 岩屋 美明

三つ編みで素顔のままのいい女

春風にひとり歩きをする心

キリトリ線の向こうの人にされました

反省をするにはちよっと足らぬ酒

出番までゆつくりガムを噛んで待つ

吹田市 野下 之男

愛想ないガイド美人で許される

万華鏡おどろおどろの世が見える

愛される健気な馬に遠い春

名門に経済欄の寒い風

桜かて年に一度は浮かれたい

吹田市 穴吹 尚士

褒められて煽てに乗ってから落ち目

謙遜の皮を被っている自慢

後からはどうでも言える結果論

人生の妥協かさねた顔の皺

粹人と呼ばれるまでが高くつき

大東市 南原 正和

先客に一声かける露天風呂

部屋一杯産声あげる赤ん坊

犬欠伸主人同士の長話

病室に朝日射し込む長い夜

美味一番造るか焼こか氷見の魚

大東市 児玉 蛙

美辞麗句本心が未だつかめない

約束がうまく行きそう青い空

躓いて弾みをもらう風にあう

二股をかけて逃した青い鳥

生きてればいい事あると気を入れる

高石市 浅野 房子

可哀想がられてはもうおしまいだ

母が逝き今頃効いてきたくすり

生きて行くそれがノルマになってきた

後味の悪い電話は要りません

言い切つて勝つたつもりでいるらしい

高槻市 乙 倉 武 史

手加減と知らず相手を甘く見る  
混沌のイラクとテロに気も滅入る  
種苗屋の前でペランダ農悩む  
パツと散るサクラは僕の性に合う  
健康と長寿を頼むお賽銭

高槻市 左右田 泰 雄

着メロに甘い雰囲気こわされる  
久々の出会い楽しむ喫茶店  
二人してほのほの囲む春炬燵  
ケイタイで風の噂を確かめる  
許す気になれない深い溝がある

高槻市 西 谷 治三郎

料亭で馬鹿騒ぎした頃が華  
ボケ封じ参った寺をもう忘れ  
車間距離 子供部屋にもノックいる  
負けた旗先頭にまた戦車行く  
金出して広告買うてる新聞紙

高槻市 田 中 千莞子

花は葉に人は齢をまたひとつ  
割れガラス瓦礫の中でまるくなる  
やり逃げた男が荷物また作る  
義理チョコがダイヤに化けてゴール・イン  
庭に来る野鳥が怖くなるニュース

高槻市 傍 島 克 治

老いの身を時代遅れにメカニズム  
よく聞けば怒ったことが恥ずかしい  
悲劇とは喜劇の中にあるを知る  
楽々と吊橋渡る地元の子  
行きつ戻りつ人生迷路出口見ゆ

高槻市 江 原 秀 夫

どこまでが演技か同じ屋根の下  
子離れで夫婦のきずな太くなる  
若くはないんだ僕の部品がストライキ  
改革をくるくる回す族の風  
手のひらから情報さらさら落ちてゆく

高槻市 生 田 義 一

混浴にときめきもなし喜寿の宿  
三世代雑魚寝楽しい旅の宿  
病癒え一夜の旅に自信湧く  
漬物に亡き母の味生きており  
靖国をめぐる総理の理論芥え

高槻市 井 上 照 子

長生きに感謝と不安いりまじる  
春が来た歩ける内に外へ出る  
誘われて生きる糧なる輪に入る  
モラルなど頼れぬ世相気にはせぬ  
コケコッコ玉子あんなに生んだのに

豊中市 吉田 あずき

アメリカのルールブックで動く国  
加熱した頭で買った不要品  
光ってる間はいらぬ飾りもの  
月おぼろ花もおぼろの無重力  
花びら一枚心の奥へ舞い落ちる

豊中市 水野 黒 兎

ふるりの山記憶では高いもの  
古の夢追い奈良の七曲り  
化けないで欲しい素肌の少女たち  
予約した愛の配達まだ来ない  
新人の笑顔が街の春の風

豊中市 安藤 寿美子

日本語しか話せないから大切に  
おすもじと言った祖母の寿司の味  
手土産はいつも塩昆布をくれる  
親介護至らず尽くさずやりました  
山の端に大きな月があらわれる

豊中市 岸田 知香子

うさぎ小屋抜け出したくて四苦八苦  
肩書きが取れても続くお節介  
帰省の子おふくろの味待つ家路  
旅立ちの若人祝う花吹雪  
こぼし咲きマンション街に春の色

豊中市 檜谷 郁子

八十路来て今年も会えた桜花  
花の下貴方偲んで歩を止める  
桜はらはら亡夫の墓前を装いぬ  
春告げる釘煮の味も三世代  
ITを学び疑問符増えて来る

豊中市 江見 見 清

卒論を書いた下宿が消えていた  
他愛ない話も用意する見舞い  
時計見ることのない旅してみたい  
勇み足したことにして本音いう  
毛筆の手紙に返事とどこおり

豊中市 山門 夕 美

振袖が重たいしだれ桜かな  
あたたかい花見にはずむ車椅子  
昨日見てよかった桜今日は雨  
夕映えのしだれ桜に心うつ  
ああ無情鶏はだまって死にました

富田林市 中崎 深 雪

新緑のバラエティーに絵の具は無力  
旧姓がつい出てしまう同期会  
なぜかしら貧乏クジに愛される  
グルメツアー終えて少し自己嫌悪  
シンプルに暮らすと体シャンとする



富田林市 片岡 智恵子

世の変わりか次々スター逝くニユース  
また値上げされそうバスが空いている  
目薬より青葉目にしむ目のくすり  
二日出て三日疲れる旅帰り  
どの部屋にも老眼鏡のあるわが家

富田林市 藤田 泰子

うれしい日のために涙を溜めておく  
外敵が来ると夫婦の息が合う  
喫煙室で肩身の狭い仲間達  
たっぶりの愛とゆったり暮らして居る  
宮仕え毒まんじゅうも食べました

富田林市 中井 アキ

春帽子おいでおいでと誘われる  
ひとときをほんやり出来る人と居る  
約束の小指が疼く赤ワイン  
婦唱夫随笑い袋は大きめに  
関わりを持った指から膿んでいる

富田林市 大橋 鐘造

LSIが降りて動いたエレベーター  
まかせとけ叩いた胸が悔いている  
戒名を付けて極楽予約する  
少しづつ神に返していく命  
紫の袱紗に包む義理と見栄

寝屋川市 富山 ルイ子

新しい技術弱者はおきざりに  
効率を優先 人は軽視され  
何時か何時か助けを借りる時が来る  
いのちある限り幸せ追いかける  
信頼をしてた人からマル秘洩れ

寝屋川市 籠島 恵子

傷口にきつい冗談かけられる  
ひとときの平和ファミリーストラン  
友達のリボンの方が光っている  
揺れているのはきつと私の欲の皮  
泥棒が掘った筈もろてくる

寝屋川市 堀江 光子

桃の花土産うれしい帰り道  
花早い年は別れも早くなり  
美しい指から貰うさくらんぼ  
梅香る庭持つ友を羨む日  
花百句までは行かぬが増す句帳

寝屋川市 高田 博泉

薬つけお医者まかせの長寿国  
携帯を持たせて悔む親のエゴ  
合併にしても若者故郷を出る  
桜咲く日本中が動き出す  
みの虫をみつめて帰る散歩道

寝屋川市 坂上高栄

野仏に杖をあずけて対話する

支援の灯広げよテロのない世界

物質欲底なし沼に悪あがき

盲導犬真実一路の見本です

キナクサイ イー琼斯艦が配備され

寝屋川市 森 茜

満艦飾してお相撲を観る女将

肩書きがずらりざらざらした名刺

百匹の鬼ふところに飼ういびき

方言で解かされてくるわだかまり

楽天家になりたい青い海目指す

寝屋川市 江口 度

歩道を歩くタイヤにも気をつけて

父さんはもっぱら酒を飲む花見

好きならばお食べなさいと見放され

辻で会う時計のような顔見知り

九条の原点ぼやかさないように

寝屋川市 平松 かすみ

もしかして僕の先祖は火星人

根っからの悪か導師の黙秘術

睡蓮と一体となり雨蛙

楚々とした画布へ一筆足した艶

涙あり艶あり上げる視聴率

寝屋川市 太田とし子

すぐに泣くおもしろい男もいたもんだ

継ぎ足したお世辞にクシヤミついて出る

一日の思い残した花吹雪

絵日傘をくるりと回す団子鼻

突風に行こか戻るか自衛隊

羽曳野市 徳山 みつこ

一週間へ欲張っているプラン(次男一家米日五旬)

無国籍料理九人のバイキング

おはようもグッモーニンもまじりあい

関空で少うし泣いたおばあさん

シート干す飛行機雲を追いつながら

羽曳野市 酒井 一 壺

親子して見果てぬ夢を孫に賭け

翼など持てば大きな怪我をする

イヤリング翼のように揺れている

ゆつくりと虫干したい一人旅

その時はアドリブで行く度胸あり

羽曳野市 三好 専 平

好きだから好きだと言って嫌われる

好きだからするのではない自爆テロ

好きなこととしている人は歳とらず

断りもなしにわたしを撮るカメラ

入植という侵略に目をつぶり

羽曳野市 安芸田 泰子

花便り行きつもどりつ春の冷え

いい人と言われた日から角がとれ

カルチャーの先生孫と伺い年

喜寿米寿ちゃん付けて呼ぶ従兄妹会

五月晴れ女系家族の柏餅

羽曳野市 吉川 寿美

フライパン蹴ってノラにはなれもせず

春嵐 鬼には鬼の哀しみが

女のずるさすぐに涙を武器にする

男のずるさ別れはキミのためと言う

修正液昨日も今日も雨続き

東大阪市 指 宿 千枝子

首を出し手も出し亀の日向ほこ

赤黄色咲いて孫待つチューリップ

心洗う雑巾洗う春の水

芹を摘む小川の水も春謳う

誕生日薄紅色のバラ届く

東大阪市 安 永 春

満腹になった乳児のその寝顔

せがまれて夢路へさそう絵本読む

散り急ぐ花の絨緞踏みしめて

ジェスチャーを入れてブギウギ賑やかに

姑にも優しいこころちらと見る

東大阪市 中岡 妙

公園は我が家の庭と春の宴

尼寺もちよつと華やく甘茶の日

花の首切つてご先祖さまどうぞ

あとでなら言えぬ深夜にメール打つ

アフガンにイラク伝染するのかな

東大阪市 笠井 欣子

ウイルスに居心地よいと長居され

子等は皆私を頼らないと言う

放うつてはおけない本音聞かされる

子離れはしたが夫に手がかかる

調子よい時はドレミの唄が出る

東大阪市 谷口 義

気のきかんだの女でございます

長いことかかり阿呆なこと覚え

真っ白い日傘をさして古希の人

環境が悪いと猫も思ってる

コロナボとポアロの好きな亡母でした

枚方市 寺川 弘一

眼で語るボキヤブラリーは無限大

根性を出せと言われて汗を出す

夫婦です互いに顔はもう見ない

生前葬自分でけじめつけておく

悪人じゃない私でも嘘を吐く

枚方市 二宮山久

とりえなどないが元氣だけとりえ

イラクにはいつ来る日本は春爛漫

不景氣も慣れたが老いは身にしみる

我が身老う分だけ孫は成長す

我元氣妻よ安心するが良い

枚方市 宮川珠笑

蝶が来る造花に生きた花添える

にわたりの生命が動く目玉焼き

骨折で無い診断が歩かせる

孫が来るたびにひめくり直される

妻を呼ぶ診断よほど悪いらし

枚方市 海老池洋

父の日へ蝶タイつけたナポレオン

人生に卒業はない新刊書

贈られた塩だんだんと苦くなる

傘を出て世間の風に耐えさせれ

極楽行きと地獄行きとを乗り違え

枚方市 森本節子

気まぐれの氣候に惑うさくら花

去年今年齋場の桜見る羽目に

疲れた目休めるために昼寝する

タラの芽にモンゴルの塩添え出され

終着駅よく知りながら遠まわり

枚方市 鈴木政子

強風に干し傘飛び込み恐がる犬

鶯の初鳴き聞けなんだ今年

名を聞けば切れたオレオレの電話

双生児成長すれば個性別

個室持たせ親子の絆遠くなり

枚方市 安達忠央

ランドセル東大卒をもうめざし

旅で病み一緒の妻がやさしすぎ

おにぎりを食べる鄙びた旅が好き

旅のよさ二度と会えない人と飲み

花咲けば地酒も欲しい春の旅

松原市 小池しげお

三日月が尖り気をつけて帰る

初がつお貰い真直ぐ帰るなり

転がらぬようにふんばる夫婦箸

逃げ口上酒も煙草もやめている

ライバルと飲めば大きな声になる

藤井寺市 楠昭子

食卓にバラ一本の誕生日

原点をたどれば猿につき当る

わたしも女傑河内に棲みついて

余り物で足りるわたしのお弁当

腰病んで杖にたよってばかりいる

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

鼻歌でいるとき話しかけぬこと

合鍵の鈴が聞こえて夢覚める

思惑があつてサングラスをかける

何回も消しゴム使う正念場

ばかばかと上着を脱ぐと忙しい

藤井寺市 太 田 扶美代

手応えはまだない軽く引いてみる

錯覚をいっばい詰めた化粧箱

ぶつきらばうだけどこやらあたたかい

詰めるのも開くのも好き宅急便

ひたひたひた定年という足の音

藤井寺市 中 島 志 洋

一文字結んだ口に見る決意

うちの子に限つてと言う親心

目で合図 居留守を使う電話口

化けの皮剥げた名士の裏の顔

ささやかな好意がいつか恋になり

守口市 結 城 君 子

春風とあなどつていた軽い怪我

久々の田舎の夜空スピカ追う

人の世はあれも勉強これも勉強

知事さんも食べて下さる卵です

考えた末また人間に生まれまし

守口市 井 上 桂 作

五輪年アテネアテネとなびく風

秘書給与妻の口座に入れてます

麻原の妄想やがて己が身に

七光しだいに後光いろ褪せる

話すより相槌うまい利口者

箕面市 出 口 セツ子

わたし印だけで生きぬくのも度胸

笑つても泣いてもテレビ無反応

ジョーカーを見せずにいつも負けている

つながりが薄くてメール依存症

魂の虫干しもする衣替え

箕面市 岩 津 ようじ

立ち帰る寒さ弥生の置炬燵

この寒さ河豚も蟹また旨きかな

年金で食う河豚の味この寒さ

病院の隣葬儀屋店開き

恐ろしやなんと動脈切った医者

八尾市 長谷川 春 蘭

日の光どさつと落ちし春の雪

桜散るといふにまだ雪降る便り

恵方向き巻すし二人で丸かぶり

郷愁の一刻土筆手にありて

芽ぐむ樹のさだかならねど力充つ

八尾市 吉村 一風

雑踏で妻にはぐれてうろたえる  
自己主張減ってきたなと老いを知る  
まだ元気ですかと不意にハガキくる  
泥かぶる気になり元氣湧いてくる  
いい汗をかくと輝やく顔の艶

八尾市 神原 まさと

病院が奇麗になって良くはやり  
ウイルスに負けぬ我が家の軒すずめ  
桜咲く牛鯉鶏も治まって  
夜桜を見る懐にホッカイロ  
桜散る迷惑そうに泳ぐ鯉

八尾市 宮西 弥生

花散らし雨も無情の涙かも  
ジーンズで多彩な春をたべている  
ユニクロにはまっています高級車  
タミナルそれぞれ花になるカッブル  
迷うたら桜の下で待つてよう

八尾市 生嶋 ますみ

筍のググッと伸びて菜種梅雨  
見舞うたび忘れずに言うありがとう  
公平に神様チャンスあたえてね  
たこやきの味で迎えるキタミナミ  
もの言わぬ一番恐い妻の武器

八尾市 山本 宏至

家族みな笑い袋を持っている  
電話聞く相手で変わる妻の声  
マンガ本読んで努めるポケ防止  
ガラクタも理由があつて棄てられず  
メロンパン初恋に似た味がする

八尾市 井尻 民

シヤクナゲの気品静かなひるさがり  
あれこれと迷った末の神だのみ  
底冷えにめぐり忘れのカレンダー  
叶う夢叶わぬ夢を追いかける  
封印をとけば過ぎた日ころげ出す

八尾市 内海 幸生

愛いっぱい責任いらぬ曾孫抱く  
似ているが去年と同じ花でない  
声援がすこし重荷のハルウララ  
ケセラセラ無責任とも知恵だとも  
次に待つ人に急ぐか霊樞車

八尾市 宮崎 シマ子

共稼ぎバタバタバタとしあわせに  
一本のバラで落つきとり戻し  
男の許へ行くなら放す親の紐  
もしもと思う日は花も買うてくる  
太陽に顔向けできぬ傷を持つ

八尾市 高杉 千歩

神戸市 山口 美穂

演技ではない名優の計がつづく  
百連敗ひたすら駆けるハルウララ

こんなところでもっこりこぼれ種芽生え  
花吹雪川面を白うして下る

お浄土の人へ呑み屋からハガキ

思いがけない出会い共に老けていた

箸持って待っていたのにカレーとは

ここだけの話を犬がきいている

スキンスリップ従いていけない古いの足

命を無駄にしないでイラク パレスチナ

八尾市 村上 ミツ子

神戸市 池田 善守

合祀墓甘茶いただき回向祭

色々なマルの日がある日記帳

説教にそうと頷くことばかり

このズボンはけた日もある衣替え

虐待の闇へ届かぬ助け船

忍耐と我慢と感謝老い二人

調子よく飲んで支払い人任せ

携帯のおはようの声つい返事

恥重ね開き直って生きている

窓全開部屋中に満つ春の風

神戸市 山口 光久

神戸市 伊勢田 毅

大海を我が物顔の雑魚でいる

古希過ぎてまだ直球を投げたがる

一歩ずつ尺取虫に負けぬよう

日帰りのツアー土産が多過ぎる

キャンパスに二人で描く未来像

年金はどこ吹く風とフリーター

絡まった鎖は無理に解かない

裏の裏読んで墓穴を掘っている

耐えて後 芽吹いた草の強靱さ

長寿国今日も保険のコマーシャル

神戸市 木村 貴代子

相生市 中塚 礎石

濃淡のみどり緑のお出迎え(ニュージールランドを旅して)

大自然ドライブ四時間店一軒

髭面がよく似合うてる菜っ葉服

枝先も苔むす雨林太古より

正直に生きて火傷も怪我もした

一万年酸素を吐いてきた雨林

風呂敷をするするほどく女の手

サザンクロス銀河にかび旅おわる

これからも凡人でいる無位無冠  
手術後の生命線が伸びたよう

芦屋市 黒田能子

贈られたり贈つたりしている絆  
懐しのメロディーあの日のあのわたし  
いいなりの旅のツアーについて行く  
マイウェイ自分を好きになり暮す  
親と子の卒業だろうウエディング

尼崎市 田辺鹿太

俺らしくない俺がいる美術展  
恋文の代筆をしたことがある  
母の来た日は包丁がいそがしい  
双六の上がりのように逝つた友  
石段の途中で歳を考える(金月比羅宮)

尼崎市 林昭三

新緑の下大人びた恋がゆく  
ひとごとと思えぬことが多すぎる  
有明の貝の屍政治テロ  
午後は晴れ傘を振り振り子が帰る  
今日二度目オートロックに締め出され

尼崎市 軸丸勝巳

散る桜待て待てとくる花の冷え  
花の下箸が行き交う莫塵二枚  
優勝額国技淋しい国技館  
百寺巡礼百の仏に百の貌  
波の音量に沁みる魁夷展

尼崎市 山田耕治

子の前で買わぬ理由を芝居する  
義母さんは楽しておれという孤独  
初恋の人が抱いてる孫の顔  
単身ヘモーニングコールして眠る  
さあこれで終りですよと散る桜

尼崎市 春城年代

整理下手まだ隠居にはしてくれぬ  
非常食 賞味期限は過ぎたまま  
今更に邪魔になる家具持て余し  
庵住居に憧れている水の音  
窓を開けると春のリズムが飛び込んだ

尼崎市 春城 武庫坊

試行錯誤が次々続く老いの坂  
遠親をしても八十路は気忙しい  
杖止めた妻の歩みに春風が  
散る桜顔に貼りつけ地蔵笑む  
湯舟あふれて今日の元気が甦る

尼崎市 長浜美籠

これしきの事にも賛否相半ば  
カタカナのマンション続く散歩道  
真実を知る人二人居れば良い  
月一度逢える仲間が居て嬉し  
とほける気さらさら無いがこれも老い



尼崎市 内田 美也子

野辺の道蝶がついたり放れたり  
おみくじの逆を願つて神頼み  
鈍行でさくらさくらへのひとり旅  
意外さを見てから心底惚れ直し  
雰囲気を取取りしては苦勞性

伊丹市 山崎 君子

ビルの町お昼を告げる寺の鐘  
お茶うけにいずこもくぎ煮里の春  
世の不安しはし忘れて通り抜け  
老医師の言葉優しく春を呼ぶ  
あじさい忌もう七年の遠い人

川西市 米原 雪子

好奇心に輝く幼児阻むドア  
卒業式袴姿の今昔  
バスで行く桜トンネル一人旅  
ウォーキング疲れ忘れる好奇心  
咲き誇る花が蜂さんご招待

川西市 西内 朋月

梅酒瓶蓋に日付が書いてある  
梅入りの焼酎飲んで日が変わる  
桃咲いて春だ春だと過疎の村  
碁仇の訃報に箸をとり落とす  
奥さんを真つ直ぐ見れぬ通夜の席

三田市 北野 哲男

角封筒大抵お金要る知らせ  
極楽の敷金にする寄付が来る  
孫が来て鶯の声聞きそびれ  
一年分五日で喋り桜散る  
忘れても忘れられてもまだ達者

三田市 久保田 千代

一瞬の春爛漫を捕まえる  
満開は次週嬉しい誤算です  
伸びてくる爪にも明日の夢がある  
ポケットの石をころりと忘れてた  
テレビ欄見て一日を組み立てる

西宮市 西口 いわゑ

年毎に桜に思い深くなる  
風の中人は泣いたり笑つたり  
ひらひらと花びら風の子になつた  
人間のさわぎをよそに花は散る  
ハルウララ浮世はうららとはいかぬ

西宮市 門谷 たず子

不確かなものばかり抱き生きている  
長嘆息風も答えをしてくれぬ  
花冷えに腰の謀反をなだめてる  
墓碑建立 一寸お先と夫が入り  
他人だから言える言葉を聞いている

西宮市 牧 測 富喜子

それとなく言われた事がいきてくる  
格式がなんぼのもんや桜散る  
宥めなだめてまた日常へもぐり込む  
自己主張し出す眉じり上がり出す  
何もかもひとときだった花の下

西宮市 亀 岡 哲 子

ビルの谷間でお好み焼の葱育つ  
面食いの犬で僕にはなつかない  
見渡すと百円の品満つる家  
戦中戦後庭の鶏より幸貰う  
宙ぶらりん国もわたしも宙ぶらりん

西宮市 井 上 松 煙

卒業証書 教育ママの宝もの  
子育てを卒業し さあカルチャーへ  
散歩道追越されても気にしない  
雑踏に托鉢僧の立つ孤独  
古寺巡り仏だんだんお近くに

西宮市 緒 方 美津子

木の芽のび筍も出て新酒待つ  
本好きの夫の背中眩しくて  
ネクタイをはずせば甘くなる男  
眠くなる自慢話がなすぎる  
父の日は迷わなくても酒でよい

西宮市 秋 元 てる

年金の減額に勝つ足がある  
一食も手抜き許さぬ八十五歳  
ものさしは他人から借りるものでない  
草の手を止めて聞けよとホーホケキョウ  
ビル完成日照権を跳ね返し

西宮市 山 本 義 子

年金をいただけるだけ良しとする  
夏が来る魂ゆるする恋などを  
ゆらゆらと生きて点滴まだ知らぬ  
ご町内さま静かに暮らしたいのです  
四捨五入の線上よろけ歩いてる

西宮市 菊 池 トミエ

夏の夜は星と話そう屋上で  
山が見え海も広がるビルの街  
カチカチと牛乳瓶の届く朝  
パチンコに賭けて負けても止められぬ  
ゆるやかな春の小川に燕とぶ

西宮市 長谷川 淳

無理をして義理果たしてる万歩計  
お八つを半分あげてお友達  
ざーますが衣裳見せ合う棧敷席  
駄目なのか主治医の顔に胸騒ぎ  
オレオレの声に騙され億の金

西宮市 坪井孝一

打楽器が弾んでバラは生き返る  
直したい顔に出て来るいらだちを  
フルートの女性はなぜか端正で  
小さな灯破れた恋の喫茶店  
シャンソンの柔らかい思慕讃歌かも

姫路市 古川奮水

モーニング日課に決めた喫茶店  
歳なんぞ嘘混せている角砂糖  
ドライブに妻のカーナビよく喋る  
すき焼きが佳境に入りビール抜く  
注ぎたしの苦味にビールまた注がれ

兵庫県 大谷幸次郎

良薬と思ひ苦言を嘯みしめる  
苦虫も嘯んで人間太くなる  
哀しさに挨拶絶句して終わる  
口よりも目と目で交わすご挨拶  
慌てるなやりくりのプロ妻がいる

奈良市 天正千梢

桜花ふぶけ吹雪けと杯に受け  
遍路バス春の渦潮窓覗き  
流れ作業の病院で順を待ち  
孫のよな医者にすっかり甘えこみ  
ただ祈る事しか出来ず見送って

奈良市 米田恭昌

やつとこさ下駄履かされて大卒に  
丁度いい具合に妬いて仲が良  
反抗期の娘を待つ母の長い夜  
花冷えに今また友が一人逝き(友急逝)  
俗化された又兵衛桜の疲れよう

生駒市 飛永ふりこ

網戸からやもりひよっこり春の宵  
ほろ酔いの加減気に入り地酒買う  
うきうきと真つ白な夢抱く新芽  
やんわりと根回しまるい風になる  
真夜中に明日の仮面を入念に

香芝市 大内朝子

お誘いの欲しいハートの待ちぼうけ  
孫のない共通点をぬくめあう  
しようもない事に意地張るまだ元気  
またやつた後の祭りの多い日日  
しゃあないなあ わたしはわたし人は人

橿原市 安土理恵

やましさが少しあります昼の酒  
試されるように注がれる苦い水  
訊かないでわたしにだって自負がある  
酔狂で男に踏絵さすものか  
しみじみと手酌逢いたい人がいる

檀原市 居谷 真理子

儲からぬ話に一言居士ばかり

諦めるたびに表皮が厚くなる

名も知らぬ人と並んで露天風呂

豆を炊くお豆さんへとなる匂い

呱呱の声穢土には穢土の生さる甲斐

大和郡山市 坊農 柳弘

菜の花に昔話をしています

ひとときの戯れに酔う揚げ雲雀

天平の甕が語る東大寺

糠床を反して母の仕舞風呂

蟻塚を崩せば初夏の音がする

奈良県 渡辺 富子

花いかだ恋しい人へたどり着く

殺し文句さらりと言えた花の下

きつと咲くオンリーワンの花として

目に触れるところに置いた自戒の書

修羅越えて枯淡の色に染むふたり

和歌山市 福本 英子

赤めだか春が来たから嫁にゆく

ほらごらん初志貫徹のハルウララ

後くされないから好きな四月馬鹿

何も彼も拡大コピーして届く

愛冷めて見えた心の裏表

和歌山市 牛尾 緑良

鶴千羽 願いが声になつてくる

ふるさとの自慢は酒と師と友と

藤棚の下へ点滴台を押す

税金も国保も納めてる庶民

職歴のひとつにしがみついている

和歌山市 西山 幸

もの忘れひとり芝居を何としよう

幾山河おんなを歩く土踏まず

雑巾がぞうきんになる自己主張

尼寺へ行けとは誰も言わないが

女一人の贅かな 花見団子かな

和歌山市 細川 稚代

省エネへぼんぼり淋しい花見酒

卒園式孫も立派な小紳士

ヘルパーの心くばりに手を合わす

回転ずし満員御礼つづく春

鳥影がうつるいいことありそう

和歌山市 桜井 千秀

鍵かけて叩く表戸待ち侘びる

お手並みを拝見若さ嫉妬する

壁にピンで止めて置きたい運ひとつ

難題に遭うたび性根捻くれる

成り行きその後気になる好奇心

和歌山市 木本朱夏

正座して神の答を待っている

蓮根も竹輪も穴が自己主張

洪皮を剥いてすっぴん美人です

切り札のように煮込んでいるカレー

クスリより癒してくれた仏たち

和歌山市 木村初子

まだ夢がいつばいあつて歌うたう

おらが春しだけ桜と車椅子

時にわびしい時に嬉しい母と娘と

夢はまだ捨てぬつもりの中のペンを持ち

夕映えの天にトンビが丸を描く

和歌山市 田中みね

何も死ぬ事なかったなどと言う他人

そこは他人白い歯を出す通夜の席

ラブラブの夫婦を親に子の素直

ばたばたと柳友が倒れる淋しいよ

適材適所わたしに似合う小間使い

和歌山市 堀畑靖子

海に棲む仲間も恋の季節とか

わたくしを救ってくれた本がある

のどから手が出るほど欲しい愛だった

一輪の花に心をうばわれる

お料理が冷たくなった御挨拶

和歌山市 古久保和子

粒あんこし餡主張は曲げぬ友ばかり

切り抜きを集めて知恵を補充する

禁煙一年 他人の紫煙にまだ未練

本当は人間好きのサングラス

場所取りの花見の座でする読書

和歌山市 楠見章子

旅に出る出ると若葉が照り返す

私もヨットも青い風を待ち

世界旅行思い描いてストレッツチ

マスコミをいち度疑う癖がつき

年金の方程式をといている

和歌山市 武本碧

アンケート幾千積んで山動く

言い訳をする唇が塞がらぬ

味方から蛇が出てくる秘書疑惑

充電をしよう酸欠軽い内

半眼で生きて凧いでいる夫婦

和歌山市 山口三千子

腹決めて行けばかあるくあしらわれ

同じ轍踏まされ続く白い闇

不都合になれば私の所為にする

疑えば友人さえも信じれず

ややこしくなりそう口を閉じておく

和歌山市 玉置 当代

不景気を飛ばせ列島花ざかり  
年金の暮らし義理欠くことばかり  
病んでいる娘に気休めの声送る  
楽と苦の背中合わせのもどかしさ  
歯の治療指の先まで硬くなる

和歌山市 上地 登美代

酒飲めば苦労話が転げだす  
足腰の痛い話のクラス会  
おだやかな口調で曲げぬ母の説  
味方だと信じて腹を見せた犬  
善人で生きてても病氣ばかりする

和歌山市 松尾 和香

人生のけじめもつけている余生  
ふるさとの母が待つてるさんま寿司  
母介護父のまごころ子に繋ぐ  
巢立ちゆく若手の力試される  
人生の修羅やとと越え自然体

和歌山市 宮本 三喜夫

金減らし長生きされて国慌て  
様変わり公衆電話姿消す  
化粧品事業統合するそうな  
広げすぎ元の仕事に戻ります  
人任せ よい結果出ずやり直す

海南市 三宅 保州

ご尊顔と言われるほどの顔でない  
おまえさんとはあつしのことでごさんすか  
逢いたい人が夢になかなか出てこない  
色合いでどここのチラシかわかります  
とある町で丸いポストに逢いました

海南市 谷口 義男

子のために下げる頭は苦にならぬ  
愚痴聞いて仲間入りする老いの耳  
婦唱夫随して年金で暮らす老い  
嘘付かぬ鏡に老いを知らされる  
バレない限り悪い事とは意識せぬ

海南市 堂上 泰女

同窓会ズンドコ節で盛り上げる  
プラトニックラブを命のある限り  
携帯で息子への愛忘れない  
老樹にも滾る命や枝萌える  
寝てる間に活躍させる洗濯機

和歌山県 中後 清史

美しく老いたいからの教養書  
すこやかな笑顔が円い風を呼び  
健診を受けて注文つけられる  
身勝手な患者ナースの手を焼かせ  
痴話喧嘩してほどほどに仲が良い

鳥取市 山宮愛恵

わたくしに何が起きても陽は昇る  
何んだなんだ生きろ生きろと脈が打つ  
古希からが勝負だ躊躇しておれぬ  
葉わさびの辛味に脳が奮い立つ  
腐葉土にしようわたしの古い皮

鳥取市 植田一京

ほどほどの暮らしに金が足りませぬ  
咲く花に心癒やされ生きてゆく  
カラオケにいつとき心癒やされる  
今日は晴れ落ち込むころ干しに出る  
夢いっぱい抱いて余生が忙しい

鳥取市 美田旋風

傘寿への道は険しいドッコイショ  
目の保養ラインダンスで若返る  
歳とも写真写りが悪くなる  
体調がいいとき本音ばかり出る  
車やめゆつくり傘寿へと歩く

鳥取市 宮脇道子

年下の訃報我が身が痛みます  
花びらは心冷たく散っている  
整骨医患者あふれて姥桜  
残り灯に許す幅もち友と会う  
どっこいしょ ばあちゃんがいって曾孫の目

鳥取市 中村金祥

間欠ワイパーみたいな議員さん  
高橋を欠いてアテネの火が寒い  
何で俺ここに居るかと自問する  
雑踏に可憐な花が咲きたがる  
自転車で転び自分の歳を知る

鳥取市 富山檳榔樹

六根清浄過去の苦汁を洗心す  
若い子は老人負担好まない  
ライバルに勝つぞと燃える棒グラフ  
ほどほどの望み伸び伸び子は育つ  
洗心の絞り紫陽花今日も咲く

鳥取市 山本益子

永久にQちゃんの金光つてる  
ホームレスさん孤独のテント引き上げよ  
ほどほどの晩酌ならば糧となる  
女房役決して楽な位置でない  
彼の岸へ招く不吉な曼珠沙華

鳥取市 岸本孝子

旧友の頼みだけけれど金は別  
やりくりは後に回して先に買う  
くたびれた家の化粧に金かける  
苦い酒何度も飲んだ宮仕え  
辛口の忠告もらう友を持つ

鳥取市 福田登美

楽でない暮らしにごみは多く出る

病む夫の年金当てに感謝する

お茶漬けに馴れた留守居の味気なさ

いい顔のつもり辛さを見抜かれる

年輪にプラス思考の紅を引く

鳥取市 永原昌鼓

札束のだしには多分神も酔う

師の鞭がまだまだ熱い脈はある

孫と笑む針を止めたいこの至福

ロボ犬に淋しい心見透かされ

しつかりと人の心を覗く犬

鳥取市 西村黙光

思い出を一気に呷る縄ノレン

宇宙旅行時々させる縄ノレン

くつろいで仮面をはがす縄ノレン

社交術習いに通う縄ノレン

均等法濃霧立ち込む縄ノレン

鳥取市 夏目一粹

あつあつの仲に解熱剤贈る

飄々としてるトップは慕われる

ガラス張りみんな仮面をかぶりだす

針使い繕う主婦を見かけない

この指紋世界に一つ飾つとく

鳥取市 有沢せつ子

日展を出て花びらのシャワー受け

地元よりいざ大阪の通り抜け

遺伝子め孫も車に酔うという

猛暑にも負けない花の種を蒔く

断りの電話多弁になつてゐる

鳥取市 倉益一瑤

尺玉が埋めてあります父の庭

いらだつとききれいな花は咲きません

赤ちゃんが寝てます指がものを言う

人間のころろを犬は読んでゐる

ライバルへ赤いころろは隠しとく

鳥取市 近藤佳子

連翹の鮮やかな黄へ退院す

春の陽よ母笑み給う如くなり

叫んでも還らぬ人よ花嵐

乱舞する蛍ぐつたことがある

鮮明な記憶のなかの好きなしと

鳥取市 杉本孝男

幸せの夢見る切符なら買おう

溺れてはならぬ情けの渦が巻く

長生きのメニユーに少し金不足

年寄りをからかうでない罰あたり

例えはを口火に母娘ぐるになる



鳥取市 録 沢 風 花

倉吉市 山 本 玲 子

薫風を入れて午睡の小宇宙

十三夜 菜の花匂う里惚ぶ

新緑の日本イラクは命がけ

春雨も氷雨も肩に降りそそぐ

花時計恋のゆくえが気にかかる

鳥取市 加 藤 茶 人

いつ見ても投手打たれるハイライイト

泣き笑いあれが倅せかも知れぬ

人生の賭けは女房との出合い

失意の日軽いジョークが刺になる

産む産まぬ神から見れば罰当り

倉吉市 猪 川 由 美 子

場所取りで点数稼ぐ花見どき

駆け引きや本音建前ややこしい

幼時から本物の味覚えさせ

医療ミス医師訴える勇氣ない

ヤバイよね流行り言葉にヤムカツクぜえ

倉吉市 森 川 あ ら た

他人の目気になるほどに浴びてない

霊と目が何度も合っている わたし

胸さわぎするとき霊のお告げです

飼い犬は唇奪うのがうまい

他人より目立つと野次が飛んでくる

お互いに犬褒め合ってから

日に一度郵便受けを覗きます

ウインドー見惚れています我が姿

新聞の上で分け合う路の塵

日に一度大きな声でアイウエオ

倉吉市 野 口 節 子

家中が明るいママの上機嫌

元氣かい ほろりとさせる電話口

フルムーン机上プランで旅終える

ひと泡を吹かすつもりの懐手

プライドを捨てると軽い身のこなし

倉吉市 最 上 和 枝

嘴で愛の絆を繕っている

舗装路を割る春の草芽のパワー

立板に水饒舌が止まらない

凶のくじ引いて特賞大当たり

一周忌標札外す手が重い

倉吉市 牧 野 芳 光

年金が次の世代に手を合わす

成功をしなくてもいい一本気

日向ぼっこしているように狸の死

貴公子のように番犬正座する

恥ずかしくなるほど金は貯めてない

倉吉市 米田 幸子

無医村へ医者卵は追いやられ  
記念日へせめて感謝の赤いばら  
かみさんを質に入れても酒は飲む  
飲むほどに大風呂敷がためない  
薄情のようだが金は貸さぬ主義

倉吉市 山中 康子

酔いしれた桜が人を恋しがる  
人の心配慮しすぎて不整脈  
腹の虫おさまる米を食べなさい  
深情け財布の紐はややくつく  
程合いの距離で絆をほころばす

倉吉市 松本 よしえ

赤い舌ペロリいつでも裏返る  
蓮華田も楽しビカピカランドセル  
マドンナもくしゃみ鼻水花粉症  
縄とびはひとりでもつまらない  
ライバルのパフォーマンスが過剰きみ

米子市 青戸 田鶴

仏飯へいつも仏と語り合う  
谷染めてかたくりの花つつましい  
咲きつづけ連翹はまだ休めない  
寂のある声が流れる謡の日  
カリスマの艶は本物とは言えぬ

米子市 中井 ゆき

ありがとう言つて足どりかるくなる  
私にもあつた大きな青い空  
夕ぐれに泣いていた子は私です  
仏壇に飾るシヤシヤをまだ迷う  
時々大きな空をみることだ

米子市 澤田 千春

情けをうけて毬はまたもやはずみ出す  
いたずらな風に埋れ火災えあがる  
泣いて舞う染井吉野を見てあかず  
五百羅漢に亡父を探して日が暮れる  
窓全開心も散歩させてやる

米子市 木村 富美子

衣食住ごみも一緒に買わされる  
木の芽摘む春の薫りがあるがたい  
つやのある声百歳と思わせず  
化粧すると孫が行き先聞いて来る  
幾山河越えてやがてを待っている

米子市 野坂 なみ

球場の熱気ゆつたり鶯がまう  
線のない縄張りだからややこしい  
摩周湖の藍は誰にも追わせない  
仰ぐもの心に持つて迷わない  
泥池の蓮はまわりに問いかける

米子市 政岡 日枝子

わけあつて藤棚みんな壊される  
自滅する前に椅子から降りておく  
神の国 神の訛の尊さよ

若い芽と競う科学の差で負ける  
萎縮せぬように新調する背広

米子市 光井 玲子

ハイテクが進み昔の味恋し  
こぼれ種 風の指図にさからえぬ  
うる覚え記憶の底が疼き出す  
残り時間に祈りが深くなるばかり  
危険信号食事にぐつと気を遣う

米子市 白根 ふみ

春休み瞳が合つて今日は  
大山も開通ころも薄くなる  
葬式を伴侶が出して幸せな  
クルージング終えボランティアがしたくなる  
疑い深くて表札じつと見る

米子市 永井 三津子

ユーターン胸に重荷をたんと背負い  
母が病む急におうちが暗くなる  
悲しみを忘れるお酒買いに行く  
冥土からお呼びか亡夫の夢ばかり  
飽食に欲の芽ばかり伸びてゆく

米子市 林 瑞枝

杭が一本羽根を休める古都の初夏  
慈雨しとど歓喜の声で倅が降る  
生きることを教える大樹の顔仰ぐ  
とつておきの神話煌めく青い海  
大山の四季の表情を生き甲斐に

米子市 門脇 晶子

土と炎の虜になつて職を退き  
やがて咲く牡丹へ水をたやさない  
台湾の飛行機米子に着くへえー  
思い出に老母連れて行く雪まつり  
花の絵が皆魅了さすモネ ゴッホ

鳥取県 岩崎 みさ江

幼な児と絆強めて見るアニメ  
足音を待つてくれている犬がいる  
しあわせは名水の湧く里に住む  
水の無い星には神も在さない  
ふるさとの雪にも地球温暖化

鳥取県 盛田 夢路

好きなどと一度も言わず側にいる  
天秤じゃ計れぬ事が多すぎる  
息止めて孫と見ている春の虫  
大胆に生きろと天に怒鳴られる  
何くわぬ顔の目玉は遊び好き

鳥取県 太田 幸枝

結婚を急いでくずをつかまされ  
いざれ行く浄土だ急ぐ事はない  
困り事あつて仏を思い出す  
ランドセルいじめ知らずに門くぐる  
おれおれの電話に急ぐ事はない

鳥取県 澤 裕子

お百度を踏んでも脳は錆びてくる  
棒グラフ ノルマ果たすとバラが咲く  
節くれた指に無言の自負がある  
仲間から生きるヒントを見て学ぶ  
待つよりも誘う勇気を出してみる

鳥取県 吉田 孔美子

なおさらに改まらない朝寝坊  
水飲んで急ごうフリーマーケット  
住居より子づくりの方が急がねば  
行くの待った梨の受粉の方が急ぐ  
農繁期他人の世話になる葬儀

鳥取県 近藤 春恵

カラオケで唸る二人の息が合い  
満天に煌めく星の露を浴び  
夫逝つたシヨックようやく立ち直り  
シヨックから立ち直れない花が散る  
よろめいた言い訳酒のせいにする

鳥取県 前坂 なお美

運命に逆らうことはやめにする  
人様のことに深入りしない主義  
子に残すもの何もない親である  
階段が君とわたしの邪魔をする  
本当は犬より猫の方が好き

鳥取県 土橋 はるお

いつまでも子供じゃないと言う子供  
釘踏んでは散歩が怖くなる  
毎日の薫りが違う散歩道  
あやまらぬ男のドラマ可愛いな  
歳よりも女は若く薫るもの

鳥取県 土橋 睦子

地下茎を辿ると母の海に出る  
家という大きな傘に守られる  
父よりも大きな靴を履いた孫  
ありがとう婦唱夫随に慣らされる  
どの指も私にとって宝物

鳥取県 西川 和子

気の焦るとこまで父とそっくりに  
終点の見える所で落ち着かぬ  
欲の皮仏ごころにまだなれぬ  
朝昼晩くすりに老化助けられ  
まごころを一ぱい詰めた一行詩

鳥取県 谷口次男

官邸が画に描いた餅投げてみせ

鳥哀れ元氣な鳥は焼き鳥に

あいさつも絵文字のような若者だ

宗教が戦争おこす人の道

格好とみっともなさがいがみ合う

鳥取県 平尾菜美

耳うちにやきもきしてる蚊屋の外

とんだ恥かいて了見広くなる

ブランドを脱ぎ捨て好きな服を着る

犬かきをしながら的をさがしてる

人間を奏でて森が深くなる

鳥取県 細田裕花

化粧水叩き込んでる深い皺

満ち足りていても欲望渦を巻き

感動の余熱が風を求めてる

ありがとう家族あつての私です

なめるように品定めして茶碗買う

鳥取県 乾喜与志

白寿までくると頭も古うなり

昼寝から起きて楽しい唄になる

老いてなお歌に未練のある頭

欠点の気性も忘れ歌うたう

数珠を手に西方の空拝むなり

鳥取県 上田俊路

鳥取のたかが竹輪と言うなかれ

豆腐竹輪食えば背中は隙だらけ

ダイエツト旬の味覚にまたも負け

彼岸すぎてから咲き揃う黄水仙

一枚の写真平和の幻か

鳥取県 山本正光

目鼻から水が止まらぬ花粉症

蝉の声四六時耳の中で鳴く

酒たばこくたばるまでは無一の友

まだ元氣だけど戒名いただいた

母という浮輪頼った悔いのこる

鳥取県 下田茂登子

裏の顔知っているのは身内だけ

嫉妬の角生えて来ました古希の坂

家族の和切れて風船飛んだきり

半世紀添うて夫婦の歩が乱れ

孫一人取り合っている情けなさ

鳥取県 国森武子

急ぐけどあと帰りして戸じまりし

仁王様私だけをにらんでる

校門はいつもひらいてあるべきだ

巻物も年に一度は虫干しし

故郷はいつも心にそつとすむ

鳥取県 奥谷彩子

昇る陽に生きる喜び嘔みしめる  
平等に分けても余る母の愛  
何気ないなぐさめ貰い癒やされる  
順風で見落としていた落とし穴  
薬包紙生命あずけた鶴が舞う

鳥取県 田村きみ子

バランスをとつて男は振り向かぬ  
メンバーに笑わない女ひとり居る  
都合が悪いことは斑に聞き流す  
ごちゃごちゃと口を挟んで叱られる  
体調に伺いながら遊びます

鳥取県 平井栄翁

花束にならぬすみれを撫でておく  
値切る妻離れ横目で北叟笑む  
高下駄の音にすし屋の忙しさ  
此処だけの話春風乗り替える  
働いてうまい番茶の縁の先

鳥取県 小谷孝美

彼という時間精神安定剤  
気がねなく付き合う友のいる安堵  
病院のはしごやりくりして元氣  
情熱の炎は消さぬ風よ吹け  
使っただけ使いやりくりとは無縁

鳥取県 鳥羽直市

遠くから目立つ風車で村おこし  
支え合いさらにもころを広くする  
ありがたい手軽な旅で黻のばす  
コンピニの明かりが街を引きたてる  
ひな祭りビンゴゲームで子に戻る

鳥取県 鳥羽玲子

朝起きの徳をゆつくり今日も積む  
学校の跡地栄えて文化産む  
ゆつくりと歩いたおかげまだ元氣  
寒暖を案じて旅の予定立て  
操縦士に命あずけて肝据る

鳥取県 林露杖

目覚め朝五体の動き確かめる  
遠きひとの佛過ぎる花の下  
春愁や間違ひ電話また無言  
回転ドア呼吸整え通り抜け  
少子化の悲劇息子も娶らざり

鳥取県 奥田保子

何よりも笑顔素敵な君が好き  
六十路今子どもに教え請うている  
旅半ば家のわんこが気にかかり  
トップの座降りて人間らしく生き  
出番待つ私ドキドキしっぱなし

鳥取県 西原 艶子

抱っこして頬ずりしてと猫が寄る  
殻割って羽ばたく雛にある未来  
神社仏閣立派な家を建てたがり  
皺の数消して自画像描き直す  
桜のようにまだひと花は咲かせそう

鳥取県 小谷 はるみ

無言劇ケンカのために長くなる  
大胆な試行錯誤が実を結ぶ  
余命表あればやりくりなどしない  
還暦へ赤い車を買に行く  
自分探し恋のひとつも拾いませよ

鳥取県 蔵本 悦子

猿真似が増えて日本が消えて行く  
お言葉に甘えどんどん酒を飲む  
春が来た僕にもちよつと芽が出そう  
自惚れも春は許してくれそうだ  
脳天で神がいろいろ惑わせる

鳥取県 石谷 美恵子

上品な女性にネチネチ値切られる  
友達以上恋人未満うまく逃げ  
ひとつまみ指三本にある目盛り  
雌誘う雄のダンスがいじらしい  
欠員の時だけ都合よく呼ばれ

鳥取県 山下 節子

魂胆が見えかくれする芝居です  
パソコンのレッスン孫の手解きで  
ライバルの悩み建前だけで聞く  
百歳を囲む家族の温い顔  
何もかも踏まえた上の決断だ

鳥取県 佐伯 やえ

花の章ひとり芝居の幕あける  
ごんた君おいで君のしゅんらん咲いてるよ  
仏の御加護花植えかえて雨三日  
だいじな人生省略しては勿体ない  
蝶番のはずれなおした春の風

## 原稿募集

### — 旅あれこれ —

8月号掲載の同人の原稿を募ります。

これまでで一番心に残った旅、旅の失敗談、  
旅先での人々とのふれあい、これから行って  
みたい旅など、旅にまつわる思いを題材にした  
エッセーのご応募をお待ちしています。

締切 6月15日

四百字詰原稿用紙一枚半〜二枚(600字〜800字)  
本社事務所宛

ただし、原稿の採否、添削は編集部に一任  
して下さい。

編集部

# 自選集

橘 高 薫 風

アフガンの復興へ象さんも蟻さんも

平成の生類憐みの令に候(狂牛病・鶏インフルエンザ)

八十の携帯に序破急がある

富士百態わたしの富士は紺一色

竹久夢二の闇につらなる銀の雨

野 村 太茂津

花の季が過ぎれば好きな青若葉

戦友は医者で病名明からさま

加齢性病いなおらぬバラノイア

君と呼ぶから僕と応じておいた俺

一見紳士ボルノ雑誌に読み耽る

波多野 五楽庵

フーツと灯をともし螢がいてくれる

駅からはバラの記憶が消えていた

綾取りの指が日暮れを待っている

黒枠に収まりきれぬ未練皺

女の嘘は女の本音雨の道

藤 村 女

すらすらと関西弁が笑わせる  
決意した筆がすらすら噂書く

紙つぶてあの娘が憎いわけでない

辻易者ホク口を指して喋る運

良妻の仮面外してはればれす

芳 地 狸 村

荒山の梅の林に酔っている

紅白の梅が照れてる二人連れ

いろいろの梅の名札にある誇り

白梅の香り茶の味引き立てる

句碑の文字なぞり読みする梅の下

宮 口 笛 生

百薬の長を信じてうまい酒

酒うまい うまいまだまだ元気です

百までを生きる根性持ちつつけ

病院行き日課に淋し余生です

通院で余生のいのちつないです

森 下 愛 論

煩惱を塗り潰しての跡辿る

欠け茶碗溢れる水へ無為無策

優しさの輪廻ゆくまま花いかだ

百罪を抱え浮世の渡り鳥

電線の糸切れ風がよく喋る



八木千代

島の牡丹に今年も逢える恙なき  
島は島橋があろうとなかろうと  
渚には島に生まれた貝の殻  
旅人も島に渡れば島の人  
島に生まれわたしの庭に咲く牡丹

八十田洞庵

繩のれん昔野心を持った顔  
眉動くはずだ美人が寄ってくる  
電線にとまる鳥の内緒ごと  
点滴の床で株式欄を見る  
竹光にだまされ続けてきたわたし

両川洋々

青田刈り稲もうすうす気付いてた  
旗色を読んでいる間に幕が降り  
標本にしたいと思う美女に逢う  
土に生きる扁平足は恥でない  
心の眼開くと君の嘘が見え

阿萬萬的

小うるさい妻とツアーのフルムーン  
他人さまのことでストレス溜める妻  
家族の中で妻だけ通じない駄洒落  
お月さまがきれい旅の庭に出る  
平々凡々だんだんうとくなる世間

石川侃流洞

武豊の腕でも勝てぬハルウララ  
鬼社長なぜか奥様には弱い  
上げ膳据え膳勿体なくて出る涙  
隠居所は平和燕が子を育て  
イラクの目に味方と見える日本人

板尾岳人

土砂降りへ逢いに行かねば罪になる  
碌でなし雨が振っても傘がない  
恋人にとてもやさしい男梅雨  
赤い服とつても似合う雨の街  
恋人の肩にやさしい小糠雨

奥田みつ子

独りにもみんなと同じ日が昇る  
人生のつけか老後のあれやこれ  
短所は長所 気楽に生きることにする  
憎んでも憎みきれないのも愛か  
逆回りの時計が欲しい昨日今日

河井庸佑

なまじつか知った秘密に悩まされ  
気分転換 山頂目指す道替える  
冗談の通じぬ人で馴染めない  
写経して山門あとに軽い足  
意見対立折衷案で顔を立て

川島 諷云児

脇役を演じ続けて来たいのち  
振り返る愚かさ過去は悔いばかり  
七転び八起きに耐えた男傘  
ふる里へ帰ると訛るサシスセソ  
検診でまた精検という不安

木村 あきら

古寺詣で昼の暗さへ蚊が攻める  
断崖の雨は下から降ってくる  
防潮林 松は雄々しく村守る  
米櫃は戦争の飢え知っている  
年老いて虎もだんだん猫になる

工藤 吟笑

ふる里に梵鐘ひびく性福寺  
貧乏クジ引いたと夫婦仲がよい  
こっそりと帰って来ましたご前様  
先代の家が過疎地で眠りこけ  
ウワツハツハそんな笑いがしてみたい

黒川 紫香

散る桜惜しみ弁当空になり  
果敢ないと思う一生振りかえる  
眼帯を外さぬ彼女美しい  
古井戸に顔を映して見る田舎  
車窓から見える桜は皆綺麗

小西 雄々

午後三時コーヒー館で蝶を待つ  
十本の指でプラスを掴みたい  
民宿の人魚の余韻酔いの中  
源流に焦る心をとがめられ  
愛情へ歪む月までついて来た

小林 由多香

気がつけば平均寿命越えている  
やっと春辛い思い出溶けてゆく  
収集日待つ連休のごみあふれ  
長生きへ年金ぼつりぼつり減り  
スケジュール体が二つでも足りぬ

斉藤 焔

教えたり教えられたりして親子  
心地よいドライブだった空気圧  
校門を巣立つ子の背の眩しさよ  
荒れた手は見せずこけしに目を入れる  
生き方を問うには丁度よい石だ

田口 虹汀

女には出来ぬ男の手が欲しい  
祥月になつたら行くぞ墓磨き  
母さんが大好きだった墓掃除  
椰子を切り敵機が近うやって来る  
ラバウルの詩はいいけど暑かつた

竹内紫鏑

遠山可住

診察の番だ待つてた噎れ声  
そりやーないヨの不服も察しアナの声  
留学で孫のカラオケ 幅が出来  
屋上写真のビルは消えたり父たちも  
兄弟の年譜を亡父に捧げたい

田中正坊

土橋螢

今にして思う老いとは病とは  
分からぬという結論もあつてよし  
カレンダーきつちりと書く休肝日  
見つめると少しも進まない時計  
イラク戦どこまで続くぬかるみぞ

玉置重人

西田柳宏子

まだ男髭は毎日剃ってます  
鈍くさくなつたと思ふ靴すべり  
下り坂仮面はみんな捨てました  
さくらさくら古いカメラでVサイン  
補聴器を忘れさくらとたわむれる

恒松町紅

西村早苗

うどん屋で男が愚痴を曝け出す  
人間のエゴを笑つて花が咲く  
だましやすすいのは婆さんの仏顔  
もう古い恩を憶えていてくれる  
また今日も案じて覗く親ごころ

二年ほどパン食べに行くバスポート  
メイド イン フランス勝つたなと思う  
カタログの蟹から桜旅を繰る  
カタログのわたしも欲しい杖がある  
口コミのソバへ立寄る途中下車  
こころの底に恩という借りがある  
生きざまを教えてくれる涅槃ねはん西風  
そのときは地獄を飛んでお浄土へ  
法名をもらつて釈迦の弟子になる  
ひとを愛する天地人の巻  
花冷えが身に浸みわたる歳と知る  
他人事でないぞと老友の死寒く聞く  
テレビ見るカニ三味のコマーシャル  
もう誰も信じられない二枚舌  
世間には世間の風が支配する  
ありがとうこれも人情おすそ分け  
目標は一年さざみの余生です  
踏むことをとがめるような春の雪  
春たちて悲しみ少し風に乗せ  
聞き流すことを覚えた右の耳

## 第23回 夜市川柳募集

題	選者	締切
①「焼酎」	新家 完司	6月末
②「問う」	木本 朱夏	7月末
③「まぐれ」	板野 美子	8月末
④「弱味」	三宅 保州	9月末
⑤「激しい」	玉置 重人	10月末
⑥「遅れる」	中田たつお	11月末
⑦「怠ける」	西出 楓楽	12月末
⑧「感じる」	田頭 良子	1月末
⑨「信号」	天根 夢草	2月末
⑩「苦い」	泉 比呂史	3月末
⑪「ひびく」	大野 風柳	4月末
⑫「童」	小島 蘭幸	5月20日

先生も先生の真似からでした  
よくできた真似をしつかりほめられる  
金もうけの真似も約束事はある  
アメリカの真似か兵隊ごっこ好き  
結局は独りで越える真似の壁  
顔腫れてますなときついご挨拶  
その町の市場訪ねる旅日記  
有明の月におどろく旅の駅  
大雨が降った日にする溝そうじ  
飛び出してさまよい歩く白日夢

河内天笑 仁部四郎

## 第10回記念 五呂八川柳祭 全国誌上大会

題と選者 (共選・各題2句)

「絵」	播本 充子 (東京都)
	佐藤 岳俊 (岩手県)
	前田夕起子 (滋賀県)
	浪越 靖政 (北海道)
「雑詠」	樋口 仁 (三重県)
	松本佐知子 (東京都)
	天根 夢草 (大阪府)
	青葉テイ子 (北海道)

投句料 1000円 (発表誌呈)

投句 規定用紙または便箋に、郵便番号・住所・氏名(雅号)電話番号を明記

投句締切 7月31日 (消印有効)

賞 10位まで・10回記念特選賞

投句先 〒047-0021 小樽市入船2-23-3  
齋藤はる香宛

TEL・FAX 0134-25-5468

北海道川柳連盟・五呂八川柳祭運営委員会

## 第4回 すみさか未来館誌上大会

課題 (各題新作2句ずつ4句1組)

「空」 (表現自由)	北海道 齋藤 大雄 選
	神奈川 大木 俊秀 選
	秋田 北野 邦生 選
	兵庫 泉 比呂史 選
「自由吟」	広島 小島 蘭幸 選
	愛知 鴻巣 光二 選
	和歌山 野村太茂津 選
	福岡 橋本 天吞 選
	茨城 太田紀伊子 選
	長野 中澤 恵生 選

用紙 便箋・またはB5用紙

投句料 1組2000円 (作品に同封)

締切 7月25日

発表 10月初旬 (発表誌呈)

賞 大賞副賞・準大賞(共にトロフィー)  
天位賞(選者楯)・十単位賞・合  
点25位まで

投句先 〒382 須坂郵便局私書箱18号  
すみさか川柳社宛

主催 すみさか川柳社

後援 全日本川柳協会・長野県川柳連盟



板尾岳人選

出雲市 小豆沢 歌子

鳥取県 福西 茶子

気まぐれな風だったのか躓きぬ  
着ぶかれてやさしい言葉聞き洩らす

笑ったり泣いたりエプロンの帯

種播いて土と約束して帰る

せいっぱい咲いて未練のない辛夷

唐津市 坂本 兵八郎

絹の道の起点で西へ手をかざす

楊貴妃の風呂を覗けば浮かぶ四肢

楊貴妃の墓をとにかく撫でてみる

文革の波で仏像首がない

西安の市場漢字が渦を巻く

愛媛県 黒田 茂代

春爛漫いま幸せの花結び

精いっぱい明日へ伸びる豆の蔓

甘過ぎた見込みを笑う麦の種

やさしくて想い豊かなみすゞの詩

今日の友明日もきつと友だろう

若さゆえ許せぬ事もある倫理

燃え尽きた脳に新種のタネを蒔く

泥棒は来ぬと信じているタンス

あれその話もずれて遠い耳

老い二人牛の歩みを楽しもう

横浜市 布山 嘉信

売られ行く牛惜別に振り返る

毀誉褒貶俗を見下ろす山桜

親と子の絆結んだ麦の飯

シクラメン桜に嫉妬乱れ咲く

名門の桜賢い貌で咲く

島根県 福岡 博利

無人駅用もないのになつかしい

ひとのこと笑った腰が笑い出し

消しゴムがこんな役にと気がつかず

順調にゆけばいったで苦労性

居酒屋の前素通りが多くなり

島根県 武 島 ちよえ

前向きに生きる時計に教えられ  
現実には負けないように夢を追う  
連れ糸解けて脳味噌ひと休み  
出た杭だせつかくだから利用する  
乞われても辞退してます名無し草

岡山県 矢 谷 富士野

暇つぶし老いにも開く自動ドア  
こだわりを捨てると風も丸くなり  
苦も楽も日記に綴じて来た余生  
みどり児の握りこぶしにある未来  
若い頃美人だったと雛をなぜ

府中市 馬 場 利 子

迷いから抜け出る明日の絵が描けぬ  
ゆとりある雨がわたしを呼びに来る  
孤独から抜けきれなくて石を積む  
音符からはみ出しそうになく蛙  
生き下手で他人の仮面借りて来る

北九州市 岡 田 幸 生

凝り性のわりに持たないライセンス  
妻に風邪うつしてゴルフ行く勝手  
父はもう靴光らせること忘れ  
連休のプランも妻がリードする  
神の目に洩れて哀しい絵馬の数

東かがわ市 向 山 治 延

白寿まで生きねば父を追越せぬ  
百歳の夢は八十路で捨てられぬ  
銀行へはずして入るサンングラス  
白寿でも忘れて居らぬ子守唄  
日記帳に書いて置けない事もある

今治市 塩 路 よしみ

てにははに迷ってばかり四面楚歌  
ついてくる月がわたしに柔かい  
詩ごろ欲しいと思う夕渚  
ちっぼけな幸せでよい野のすみれ  
無器用な男結びに嘘はない

愛媛県 安 野 かか志

満開の花を被って遍路笠  
石段を杖に縋って南無大師  
線香の煙に噎せる般若経  
花もよし葉桜もよし酒二合  
手鏡の中に老女が見え隠れ

愛媛県 花 岡 順 子

他人なら許せることが許せない  
冷めた目の他人自分の中に居る  
玉葱の中身を知らぬ猿である  
茅葺きの屋根が自慢をして困る  
リストラへ山菜取りをして生きる

愛媛県 宮本末子

定食の量で通うた縄のれん  
ごっそりと嫁にゆずった主導権  
ほんのりと愛を匂わすチヨコレート  
薄紙を破れば見えてくる浄土  
うさうさと春の噂に乗るこだま

高知県 近森功

免許更新未だ八十の春を翔ぶ  
ラッキョウと太刀合わせする老いの箸  
愚問です先生たばこ吸いますか  
時効待ち癌細胞と鬼ごっこ  
終着駅見えて信号赤となり

高知県 百田幸

少しだけ引つ込み思案の妻がよい  
松の愚痴 昔は平和だったのに  
語り継ぐほどの美談もない家系  
聞かぬふりして聞いていた妻の愚痴  
母親をコピーしたよな娘が一人

札幌市 三浦強一

脇役の演技過剰は疎まれる  
美辞麗句駆使ライバルを褒め殺す  
七人の敵に後輩まで混じり  
割り勘にハンデが欲しいウーロン茶  
子供生むよりロボットが面白い得

愛知県 金子美千代

手ぶらでと念を押されたご招待  
草萌える還暦なんて言わせない  
二人ならもっと楽しい花の下  
遠すぎも近すぎもせぬ夢ひとつ  
デッサンがこんなに違う男の目

大阪市 升成好

まずいとは言わぬ試食の爪楊枝  
拝啓と書いて季節の色探す  
聞く耳をもつから正座くずせない  
イヤリング揺らしまぎれもなく男  
ここだけの話に乗った日の誤算

大阪市 三浦千津子

朱を足して老いの入口賑やかに  
殺破る音がしている子の育ち  
世の歪み人の心を鬼にする  
火消し壺私の不満埋めてある  
最後には亀のペースで勝つつもり

泉佐野市 稲葉洋

過ぎ去った昔探しの若作り  
ぬるま湯という環境が抜け出せぬ  
悪態をついて盃交わす仲  
成行きは返事次第と下駄預け  
喝采を受けぬ黒衣も無事楽日

河内長野市 大西文次

花盛り自分一人の上にとぎり

そんなはずないと言うたらどんなはず

百歳で百万くれる胸騒ぎ

道草に慣れて世渡り楽になる

フルムーン主人むつつり妻はしやぎ

羽曳野市 福田悦子

母さんの迎え嬉しい梅雨の傘

梅漬けて土用の暑さ待っている

見において紫陽花メール送りつけ

梅雨のない北海道にあるドーム

タイガース勝つたら行こうピアガーデン

羽曳野市 吉村久仁雄

人間を穿てば風がきな臭い

人間の声聞きたくて縄のれん

反戦へ声なき声は僕の声

長酒のクセが深める人生論

口開けて性善説で妻眠る

藤井寺市 西村栄一

洗濯に妻の幸せ生きている

夫も子もまとめて洗う日曜日

バカがつくほど正直で肥えている

しみじみと歳だとわかる酒の量

スーパ一の目玉にペダル加速する

藤井寺市 若松雅枝

泣き笑い今日も一日無事終わる

仲直りチャンスをつくれた子の電話

愛あれば心豊かに生きられる

古里の情に惹かれて土に生き

托鉢の僧も見とれる花の舞

吹田市 二宮栄子

冷蔵庫娘が空にして帰る

お散歩をいやがる足に油さす

独り居のノルマ重たい古希の春

ちっぽけな運をつかんだ宝くじ

譲られた席がむずむずこそばゆい

八尾市 松葉君江

曲り角勇気を貰う村地藏

一か八角をとらせて歩で王手

手抜きしてテレビに子守りしてもらう

誤字脱字読めない絵馬にはやく神

川遊びしつこい鬱を丸洗い

神戸市 木村忠義

忘れ物取りに来たよう寒もどり

人生の大事なことを病んで知る

造花ではなく本物と触れて知る

上品な味は静かにして食べる

まだ席を譲ってくれたことがない



神戸市 山田 婦美子

微酔の花の下ではみな美人

花の中天女が降りてくる予感

一たす一が一になるよな夫婦仲

目が覚めれば違う明日に出会えそう

終焉の色鮮やかに落椿

神戸市 両川 無限

息抜きのとつても下手な母の指

盲点を突いて裏切り者になる

十本の指で掴んでいる明日

点滴のようにときどきありがとう

アホになる多分私の生きる道

尼崎市 河津 正治

失恋を悪酔いと母なぐさめる

梅の香を賞でて桜の話など

愛情を拗ねた仕草で確かめる

おしゃべりの梢が春を待ちわびる

愛らしく老いよと人は無理を言う

奈良市 田中 賢治

人の裏書かねば売れぬ週刊誌

お迎えを忘れさすよに写経する

相談に乗れないほどのニュース増え

四分六の相談なので受けて置く

遺言も書いてすつきり夢描く

檀原市 藤永 実千代

優しさの手本にいつも母がいる

春うらら米寿の母の声弾む

美しく映る鏡の方で見る

雑草も花の盛りは抜き難い

近代化やたら階段多くなり

鳥取県 竹森 富久江

加齢から日ごと喜劇が多くなり

ぎこちなさ無限に見せるメダカの子

草と格闘する農よ無限だな

太陽と語り続けている喜劇

また今日も化粧落している無事に

鳥取県 鈴木 一弘

居心地のいい中ほどの座がほしい

順調に年齢を重ねた自己管理

約束のない約束は美しい

戦跡を訪ね老残兵静か

これからは一人で行くと背を押され

鳥取県 毎田 信翁

高らかに愛の讃歌に胸躍る

大宇宙またたく星のメッセージ

顔だけは特に磨いて令夫人

卒寿近しまだ不完全燃焼中

初夏の風窓一杯に受入れる

反省の石の蹟き貰う知恵

出雲市 加藤 スズコ

風よやさしく心痛める森の杉  
和やかにうどんを啜るお付き合ひ  
陽を受けて花影揺れる春障子

出雲市 川 島 和歌子

草に寝て宇宙の中に一人居る  
紅さして鏡を覗く老いの意地  
蓋取つて風を入れたい脳のかび  
じつくりと煮込んだ鍋の落し蓋

島根県 毛利 幸

いい便り胸にしまつて読み返す  
リラックス妻の小言が邪魔をする  
遊び好きいつも不在で母子家庭  
新鮮な野菜健康連れてくる

島根県 菅 田 かつ子

新しい靴に踵を噛みつかれ  
出生地 念をおされているたまご  
おしゃれしてさてさて何処へ行こうかな  
楽しくて今日一日の早いこと

申間市 高 畑 滝

妻の背が丸くなったと言いつらい  
普通とか平均とかを酒嫌う  
本当は鍵などいらぬ村に住む  
包丁を研げばまな板若返る

やりくりで工面をつけるのし袋  
美しい嘘なら神も目をつむる

今治市 野村 清美

全身のネジがゆるんだ風呂上がりに  
早く寝る夢で逢いたい亡母を待つ

高知県 桑名 孝雄

プラマイが零で魅力に欠けている  
句読点いくつもつけておくけじめ  
ホラ吹きが気宇壮大にしてくれる  
ハルウララ似たよなもんだ僕だって

日高市 根岸 方子

彼岸会の法話血圧下げてくれ  
移り目はやはり心にキズを持ち  
エゴだとは知りつつ夫に耳を貸す  
いやがらせ見ざる聞かざる風になる

シドニー 坂上 のり子

人は死を何度受け止めれば悟る  
燦燦と降る天の恵みは忘れがち  
何故独りが寂しいだろうと決めるのさ  
外人に問われ恥ずかし読めない書

メルボルン 藤原 ポン吉

デフレでも値上り続くおれの腹  
コアラ似ね言われてちよつと考える  
花卉がいつも足りない僕の恋  
さよならと言われ初めて好きになる

秋田県 湊 修水

赤を着る少し勇氣は要ったけど(九十三歳に)

鼻唄を乗せて田植機動き出す

誕生日雑草抜いて無事すごす

どの絵馬にサクらの花が咲いたやら

草加市 飯土井 健翁

若い気で居ても足から駄々を控ね

バイク乗る卒寿颯爽若く生き

氣迫ではまだ負けられぬ明治の譜

読んで書き歩いて百の坂登る

日立市 加藤 権悟

添削のたびに私の貌がない

苦勞したことはない触れぬ土踏まず

先場所のテツは踏まない土俵際

鎌を打つ父にユーロなど無縁

東京都 小川 賀世子

誰知らぬ街で夢追い人となる

東京も結構楽し渡り鳥

東京で翔ぶ彩模索する六十路

DNAしつかり継いで子も酒豪

横浜市 石原 三郎

飲みすぎて桜が笑う軒かき

足に合う靴を見付けて若返る

探してる物を忘れる八十路越え

鍵かけず寝られた頃が懐かしい

岐阜市 平野 あずま

人はみな群れて生くもの曼珠沙華

包丁も辞書も握って主婦の椅子

美味札賛ペランダ産のミニトマト

名野手のクラブへ球が寄つて来る

犬山市 吉田 幸子

寄せ植えの花も氣遣いみせて咲き

旅カバン作句スイッチ押さぬまま

呼ぶ鳥へ羽根を磨いてから出掛け

犠牲者は金でつられた自爆テロ

草津市 久保 和友

夫婦著わたしは赤いほうがよい

春愁にまぶしき発禁週刊誌

貝殻を拾う少女に戻りたい

里山の水さらさらと花びらも

京都市 清水 英旺

自分史のマル秘部分を伏せ字する

春の夢むさぼりながら花筏

ウメ サクラ サツキが順に咲く小径

さばさばと恋の別れは空つ風

京都市 三宅 満子

ナイターを肴に進む妻の酌

阪神が勝つと我が家は丸くいく

終焉は桜ひとひら舞うように

行き先を知らずに急ぐ花筏

長岡京市 山田 葉子

それぞれの思いたたんでお茶にする  
はじらいをかなぐり捨ててザク口割れ  
姑となつてコメディーおりられず  
母かけた魔法がずっときいている

大阪市 平井 露芳

外れ券誰も捨てないハルウララ  
今日だけはウソは止めとこ四月馬鹿  
鶏に散歩禁止のオフレ出し  
市民マラソン キューチャン走り憂さばらし

大阪市 木村 青生

人の良さもう無理を聞く顔になり  
糸切れたようにおだてに乗っては  
夕立で駆け込んだのが縁らしい  
ブランドの水ガソリンよりも高くなり

大阪市 伏見 雅明

我ひとり乗りそびれたか宝船  
臍練りを妻に見つかり皿洗う  
アスリート首の鎖が邪魔になる  
老いの海あすを信じて船出する

大阪市 中村 トミノ

山椒紫蘇ビルの谷間でお百姓  
食べるより花が好きだと茄子を植え  
音楽とガーデニングで癒される  
花いっぱいビルの谷間も春爛漫

大阪市 池上 清治

旅プラン妻は行き先決めるだけ  
にわとりもタイヤも届け出し遅れ  
雛壇を飾れる丈に娘が育ち  
支払いは旦那 女房の長電話

大阪市 尾崎 黄紅

戦忘れても軍歌は忘れない  
大臣に国民と言われたくない  
日の丸の赤は狙われやすい的  
敵になり味方になって生きてます

大阪市 井丸 昌紀

取りあえずビール酒ではないらしい  
青鬼は赤鬼よりはやさしそう  
梅に桃後でゆっくり咲く桜  
桜の木 根元掘ってはなりませぬ

大阪市 吉田 富美

探してた眼鏡頭で笑ってる  
紫木蓮いのちを花に極めたる  
一握の幸か土筆のはかま取る  
一輪のたんぽぽ咲いて石たたみ

大阪狭山市 羽田野 洋介

同窓会声が記憶を呼び覚ます  
こっそりと期待を込めるランドセル  
長老とおだてておいて棚に上げ  
親離れ子離れしてもまだ夫婦

池田市 多田 契子

すんなりと白旗あげぬ春の風邪  
申告をすんなり済ませ花になる  
花びらを浮かべて酒が艶っぽい  
今日の空何か隠して寄ってくる

和泉市 横山 捷也

うれしさを半分残し嫁に行く  
返杯に少し濃い目のグチを添え  
平凡なぐらし日記に余白あり  
お茶漬けを出して長居を追いかえず

河内長野市 坂上 淳司

ひとり旅ローカル線でよく喋る  
鈍行の旅をリッチがけなるがり  
蜜飲ませ花粉預ける花の術  
街道もあるのに二人獣道

河内長野市 木太久 正一

一年生喜ぶ孫の遠い声  
鶯が元気を告げに庭の梅  
満開の桜が誘いかけてくる  
蕾六つ牡丹元気に育つ庭

岸和田市 坂口 英雄

いい事もときどきあって生きられる  
花便り蝶になりたい時もあり  
はやばやと友達できたランドセル  
ほどほどが歳を忘れて二日酔い

岸和田市 森元 ふみよ

花柄の派手な封筒男文字  
べたほめに後が怖いと逃げて行く  
磨耗した曲がった手足休暇中  
亡母さんの同じ小言をもう一度

岸和田市 堤 権代

封筒をときめきながら開けた青春  
べたほめでやっともらった嫁なのに  
ねぎらいの言葉奉仕の苦を忘れ  
曲がってるネクタイ直す人がいる

堺市 荻野 像山

願わくば延命よりも安楽死  
化けて出て来んように置く墓の石  
強引なお尻隙間を見分けてる  
遺言書死んでなお我を通したい

堺市 奥 時雄

だいそれた企み耳にした不運  
悪筆に神の御手のキーボード  
相談は金以外なら聞いてやる  
そんなことわざわざ言いにきたんかい

堺市 大久保 伸子

うちの凧切れてどこまでいったやら  
知らなくてよかったことが多すぎる  
四月馬鹿 恋の話が実を結び  
あの人も産湯使ったことがある

吹田市 木下敏子

大名になった気分では花の下  
下手ながら花の絵添えて春の詩  
深呼吸朝の光をひとり占め  
お互いに支えていると言う梯子

吹田市 須磨活恵

雑草の私語も楽しい万歩計  
倅せも愛もほどほどさくら草  
トンネルも橋も渡った夫婦杖  
夜が来て静かに外す鬼の面

高槻市 安田忠子

若者に道教えても言葉なし  
日の匂い布団の匂い平和です  
陽のあたる庭の砂利ふみ深呼吸  
亡き父の剣舞の写真見た法事

豊中市 藤井則彦

何もかも知っていそうな鳩時計  
お茶漬を吸る音にも品がある  
秒針にどこか似ているサラリーマン  
お辞儀する角度が同じチェーン店

富田林市 古田千華

平成の大和撫子イラク入り  
やんわりと詰め寄ってくる別の貌  
箱入りで育ち多少気侷です  
背の君によりそいてゆく通り抜け

羽曳野市 森下一知  
どん底を知っているから動じない  
天秤は妻に傾く言い逃がれ  
親友を信じて背負う保証印  
検診の答えが揺する不摂生

大阪府 神野千恵子

はっきりと穴を残して客帰り  
赤ちゃんの目の中にある小宇宙  
遺伝子を納得させる親子連れ  
モノクロが想像力を掻き立てる

大阪府 畑中節子

手水鉢水が華やぐ散り椿  
雨しとど母の繰り言聞いている  
朝掘りの笥夕餉の顔となり  
夜桜に忘れられてるおぼろ月

大阪府 高木道子

愛しいと思う雑草の燥ぎよう  
春うらら八十年の幕を閉じ(松坂屋)  
春風に触れてさらさら水の音  
急に腰低くなつたな選挙前

東大阪市 今岡真人

生きること死ぬこと花に教わりぬ  
古希すぎたなお踏み迷う道ばかり  
起死回生リングは赤く熟れている  
賞味期限切れた余生に火を通す

東大阪市 米田 志津子

休みあけ土筆はとられもういない

花の下生きる証の盃重ね

猪が下りて筍掘って行く

アルプスの名水ボトルに有難う

藤井寺市 鈴木 いさお

極楽へ行けるかどうかやや不安

極楽もいいが娑婆にもまだ未練

度忘れの名前を夢で思い出す

親の言う事を聞かない自立心

藤井寺市 吉田 喜代子

雛遊び昔むかしに誘われ

病室で今年も桜会えました

梅雨近し忘れるために傘買いに

ダイエット出来たが深い顔のしわ

藤井寺市 俣野 登志子

カレー三日辛抱強い夫です

聞き上手を話し上手が離さない

食卓で命ふたたび落椿

ため息の訳は鏡にお見透し

箕面市 中山 春代

花冷えに亡母の匂いのちゃんちゃんこ

マリアかも知れぬ地蔵のよだれ掛け

木蓮の白が眩しい帰り道

幸せをてんこ盛りした宮参り

寝屋川市 岡本 勲

神様の顔をおがみに出雲まで

この顔で四十年を持ちこたえ

割れ鍋にとじぶた夫婦仲がいい

使い捨て口ポットみたいサラリーマン

八尾市 田邊 浩三

頭から気にしないのは年の功

税金で生かしてもらう歳となり

急がずにゆっくり来いと亡父の声

策尽きたあとはお前が考えろ

八尾市 脇 俊子

はけ口の無い儘ゆれる紙風船

はんなりの言葉を添える誕生日

ピンピンと張った糸にも余白いる

急いでも日は西からは昇らない

八尾市 西川 義明

亡き母が座っているよな姉の背な

祝い事祖母の生きてる知恵袋

温もりの遅いひとりの置炬燵

ビンラディン先祖はもしか忍者かも

八尾市 寺川 はじむ

相談を持ちかけられて背伸びする

打たれても直球勝負する勝気

綴じ込みの神祕が買わす週刊誌

いい返事来そうで今日も靴磨く

八尾市 赤木 妙子

ちよつぴりのグチを日記にしのをばせる  
親の癖子が真似いつか孫が真似  
歩け歩け歩いて老いを追い越そう  
大仏の胡座しびれが気にかかる

八尾市 笹倉 ひろし

春動く気配に乗って旅に出る  
そよ風に乗って花びら春の舞い  
憧れの君はセピアの霧の中  
春風に乗って吉報舞い降りる

神戸市 田中 章子

うぐいすに起される日の寝起きよさ  
のぞかれる楽しみもあるガーデング  
今日は今日 明日には明日に合う歩幅  
いいことがありそう桜追いかける

伊丹市 延寿庵 野鶴

躓いた石に弱音を見透かされ  
一本の根から学んだ処世術  
どの花も色と匂いで自己主張  
腹八分ほどよく噛んで喜寿の膳

川西市 井本 清山

ナツメロを呟き庭の草むしり  
子に期待できずに自立する老後  
手も足も出ないメニユーを見てうどん  
茶柱が立って朝から軽い足

三田市 石原 歳子

踏まれても自立して咲く野辺の花  
澆刺の気分を若い芽に貰う  
言いなりになって平和な家の中  
今日の汗血圧上がるかも知れぬ

三田市 堀 正和

羊羹が厚い大事な客らしい  
無農薬野菜にしては器量よし  
そのうちに と金になるといふ誤算  
善人と信じてしまふ丸い鼻

西宮市 片山 忠

アイディアを貰い一杯奢つとく  
精巧な仮面で涙こぼれない  
うそ泣きに返してくれぬ金を貸す  
わだかまり解ければなんだそんなこと

西脇市 七反田 順子

占いは迷う心を引き付ける  
昼の月優しい母に見えてくる  
凜として生きてる母は眩しくて  
嬉しい日猫にまで言うありがとう

兵庫県 安達 厚

絵手紙が故郷の花つれてくる  
ご先祖の苦勞の道を聞く彼岸  
春はまだ早いが鎌を研いでおく  
一分二分三分や四分と咲く桜



奈良市 乾 春雄

昇進のたびに孤独がつきまとう  
失敗して未練と見栄が渦を巻く  
背のびしていつも孤独を強いられる  
喧騒の街で孤独な人の群れ

奈良県 江波 正純

余ってる金はないかとダイレクト  
春うらら両手に余る菜をもらう  
ハイウェイはずれ故郷の春に遇う  
急かんでもエエと自分に言い聞かせ

和歌山市 根田 よしこ

辛口のジョーク通じる友がいる  
盆栽のお花見ちよつと物足りず  
わが願ひ一杯飲めて口達者  
のほほんと生きてくことの難しさ

和歌山市 坂部 かずみ

やさしさにすがっていたいクモの糸  
花吹雪別れ別れのワルツかも  
一枚に書けない旅の報告書  
春風に心が先に靴をはく

和歌山市 喜田 准一

夢でなく欲捨ててから楽になり  
条件を先に並べて聞く意見  
フエイントをかけた答が見抜かれる  
三文の記事にも欲しいのが品位

和歌山県 森下 順子

整列で迎えてくれる葱坊主  
母さんの笑顔で自信つけてくる  
老いの坂頑固と意地に支えられ  
仏さまへ私の好きなおまんじゅう

和歌山県 辻内 次根

よく見ると昨日の顔でない鏡  
安心を貰って医院から帰る  
消費者のひとり暗示にすぐかかる  
吐く息に吸う息今日も恙無し

和歌山県 村中 悦男

人様に言えぬ山坂越えて喜寿  
体調は医師より私よくわかる  
ひとことが長く気になる歳となる  
電話では不十分です会いましょう

鳥取市 近藤 秋星

去年来たおんなじ場所で飲む桜  
刑務所の桜も今が見頃なり  
あばら家を忘れず帰って来た燕  
九十に近い老婆はまだおんな

倉吉市 酒井 芙美子

舵取りが危つかしい孫の舟  
夢で逢い覚めて切ない恋心  
夢の中逢って別れた恋だった  
黄泉の国ちよつと覗いてみたくなる

味付は舌を頼りに二十年

澄んだ月見ながらひとり歌うたう

澄む月を見ながら入るしまい風呂

あとすこしかゆい背中に届かない

倉吉市 青 砥 菊 枝

沈丁花香りが先に呼びに来る

喉元で止まる小さい金のこと

銀行の笑顔も曇る低金利

傷心の目に温かいさくら道

米子市 猪 森 スミエ

やりくりのコツは井戸端会議から

やりくりの振り回されてまだ呆けず

百点は遠いが笑顔満点だ

お化粧の分だけ遅刻したデート

米子市 足 立 由美子

本物の艶は決して裏切らぬ

花道を去る想像もしてる首

手放した先から記憶消えている

あの謎がみるみるうちに解けてきた

米子市 小 塩 智加恵

花見酒とろりと甘いぬるい爛

ざりざりに帳尻合った祝う春

朝昼晩時計の腹は真面目です

一人子でよかった財産一人占め

倉吉市 大 下 智 子

三月の雪にあわてる春の彩

母の恋賞味期限を忘れさせ

春うらら胸の振り子が弾んでる

四月バカ可愛い嘘をついてみる

鳥取県 橋 谷 静 江

初出勤孫のネクタイ締めてやり

旧姓で呼ぶ友達は忘れない

良い花を付けた大木夢を追う

欠点と言わず長所と誉める姑

鳥取県 竹 信 照 彦

風が吹く花散る音を消すように

白魚の透けて儂き命追う

草の花可憐に飛ばす種無限

山菜とり足を鍛えるのも兼ねる

鳥取県 平 木 公 子

よく笑いしゃべって脳を活性化

もうだめと知っても奇跡信じたい

欠点も見方変えれば長所です

貝になり七十五日待っている

倉敷市 撰 喜 子

石頭わかりあえない修羅の声

腕力に負けても自信あった口

年金の暮しに合った酒に酔う

信号のたびにメークができあがる

鳥取県 山 岡 紀 子

松江市 山根邦代

唐津市 岩崎 實

善人のように振る舞う黄水仙  
ふるさとは噂話が良く通る  
大地から恵み受けてるありがたさ

松江市 松浦登志子

宮崎市 串間安子

役付きの夫に文句言うは妻  
竹の子が教えてくれた実直さ  
頷いて間のとり方を知る四月

出雲市 荒木英子

今治市 渡邊伊津志

朝霧に活力貰う散歩道  
散りかける桜花びら手に収め  
世知辛い花よりダンゴ春の宵

安来市 原 煩惱児

白旗へ意地ありテロもアメリカも  
幸せは明日の米がある限り  
またしてもピンハネ議員バッジ捨て

府中市 岩本雅代

五年日記私を詰める糧にする  
黄水仙胸の痛みをいやされる  
過去の傷水に流した再生紙

宇部市 高山清子

折り上げて命吹き込む紙のひな  
無視すれば済むと思つていた誤算  
ほろ苦さ賞でる早春路のとう

戦争と平和体験したからだ  
手間ひまをかけて咲かせて花作り  
一動作一息いれる妻となり  
鼻歌もとびだす春の車椅子  
百歳にあやかりたいね手の温み  
仏足にそつとそわせて軽い足  
興行きは気にせぬ強い墨彩画  
雑音を笑つて過ごす歳となり  
噂撒く人が悪口言いに来る  
行く春に心は未だ冬景色  
童謡も唱歌も未だある日本  
防犯ブザー持たす世にしたのは大人

高知市 伊野部和江

シドニー 三谷 たん吉

恐いもの見たさ戦地へ旅気分  
イラク人みんなサツカー好きだった  
馬刺し食い明日の競馬は自信なし

東京都 井上 つよし

決断の度胸を付けたワンカップ  
年金で低空飛行板につき  
収集車月の砂漠の歌で来る

横浜市 金 森 徳 三

反省はトイレの中の独り言

瘦せている妻の悩みは太りたい

座蒲団が一枚欲しい今朝の洒落

佐渡市 高 野 不 二

赤を着て一日若くなつて見る

年金の範囲で健康維持してる

先生と警察今日も記事になり

静岡市 中 西 雅

名騎手も手こずる馬よハルウララ

歌の会いつの間にやら愚痴の会

卒寿過ぎ私の顔に亡母がいる

尾張旭市 三 浦 き ぬ

浄土色私好みの青であれ

マニキュアを知らぬ両手の爪を切る

もうたくさん いやもう少し生きてたい

大阪市 吉 内 タカ子

彼岸入り花の開花が早過ぎる

足ならし犬の散歩で気もほぐれ

前向きに明日から夢追いかける

大阪市 寺 井 弘 子

見舞客途切れ病の日の長さ

商魂が消費税込み便乗す

留守電に気取った声が吹き込まれ

大阪市 近 藤 正

ハルウララ武豊こそ名を挙げた

失業者今は流行りのフリーター

バンザイをしても武富士ボロ儲け

大阪市 中 村 忠 敬

定年後でも六時には起きるくせ

伸びる芽を摘むな大人のエゴイズム

子ばなれが出来ずついてくハネムーン

泉佐野市 備 後 三代子

子等集い果報味わう窓灯り

深夜まで娘と語り合う夫の留守

冬帽子捨てるに惜しい温かさ

柏原市 伴 洋 子

満開の校庭惜しむ春休み

夜桜の狂気見ている臙月

人間の欲はとどまること知らぬ

門真市 矢 阪 英 雄

宮島の風に平家の香りする

潮満ちて朱塗りの鳥居腰構え

桜咲き紅葉饅頭お土産に

河内長野市 印 藤 智 子

元氣そう言われて愚痴を引っ込める

つねつねと言ってる夢が大当り

身を削り亡母は至福の一生と

河内長野市 内海綾乃

菜の花が寒さに堪えて春を待つ  
朝露で草がダイヤに見えてます  
桜並木雨にうたれてしんどそう

堺市 河盛龍三

旅の宿いびき寝言が子守歌

見た目捨てて心で見ると見えて来る

舗装路を割って広げる木の根っ子

高槻市 大崎侑子

ワンマンも介護される身丸くなり

顔ぶれを見てお色気の出し惜しみ

良いことの予感きれいな虹を見る

高槻市 瀧本きよし

移転通知もう逢えないねアルゼンチン

コーヒーが味噌汁になる母の家

気に入った家は駅から遠くあり

高槻市 執行稲子

越して来た犬も一緒に御挨拶

霧囲気で下戸も梯子にうきうきと

無我夢中炎そろそろ消すことに

豊中市 源田けい生

片づけた机の前は落ち付かず

ケアハウス昔闘士の好々爺

歩くというなんと他愛のないことが

寝屋川市 中川恵香

春風散ってまた咲く花いかだ  
愛犬が逝って哀しきデイスタンス  
還暦の夫としばしティータイム

羽曳野市 永田章司

他人の目つい気にしての見栄をはり

おちおちと桜も愛でず通り抜け

自然との共生学ぶ二十四気

枚方市 二宮紫鳳

花冷えに心の傷が疼く夜

夜桜を見てほんのりと嫁姑

満腹に夢ふくらませ鯉泳ぐ

枚方市 小川良吉

イラクの地琴で癒そう春の海

人生の四季いま老いの春うらら

負け馬が人を癒したハルウララ

枚方市 大昇隆広

自然の香さえもお金を求む町

胸深くくすぶるロマン酒で嘗め

ドラマ無く特技も無いが幸は有り

藤井寺市 増井ヨシ枝

千匹の羊の群れと夜もすがら

脳天の真ん中あたりで神にあう

お天気が合い言葉になる老いの春

箕面市 寺井柳童

名騎手の鞭も効なしハルウララ  
茶髪にも飽いて今度は金に染め  
自衛隊イラクに居るといふ事実

八尾市 田中トシエ

眉を書き釣合いとれた顔になる  
不出来でも心の顔でもてます  
化粧より素顔で契り五十年

八尾市 中島春江

春うらら水琴窟に耳あずけ  
潮干狩小さき穴の息づいて  
言いたくて言えぬ悔しさ木瓜の花

八尾市 平川幸枝

追いかけて追いかけられた青春譜  
空と地に乾杯さくら満ちてくる  
雨女晴れるおんながいて負ける

八尾市 鷺見章

少年の頃踏破せし信貴生駒  
万葉の世界に還りボケ知らず  
朝のパンおいしく食べて有難き

大阪府 小栢こずえ

足あとが未来へ続く青い空  
つくしにも春風少し寒すぎた  
待つ人があるから元氣風を切る

大阪府 前田ゆい

酒一合茶漬けで今日もつつがなし  
独り居の君も眺めんおぼろ月  
遺言を書く必要のない気楽

尼崎市 桑原東園

筆順をわざと違えた書の魅力  
正攻法しか知らなくていつも負け  
驚きと勝った気で読む訃報欄

尼崎市 古川正子

春風に戯れている雪柳  
盆栽のほけの花咲く朱赤色  
散歩道新芽始め歩が進む

篠山市 谷田多美子

婆ちゃんの胸勘定は草団子  
子や孫に残そう春の和む空  
啓蟄に地蔵浮かれる握りめし

三田市 辻開子

前線の記事見て名所ウォーキング  
占いをどこまで信じ余を生きる  
エイプリル夫と妻とでウフフフ

兵庫県 岩本美緒子

必ずのくぎ煮の届く春の詩  
古樹牡丹妖精のごと新葉炎え  
夜桜の魅力をそがす冷えきびし

兵庫県 黒崎 美紗子

カラオケの同じ曲でも出る個性  
気どらずに今年も開く花の宴  
花咲いて待ってたように競う庭

兵庫県 永井 かほる

ネギ坊主春の息吹をいつせいに  
種蒔きが追っかけてくる畝作り  
さわやかな朝を迎えて青菜摘む

奈良市 成橋 邦柳

ぼちぼちと大器晩成時間切れ  
足腰の痛みを問うて花見酒  
ハルウララ馬より先に入走る

奈良市 矢野 良一

春爛漫これ見よがしに庭桜  
開幕戦縦横無尽虎打線  
不器用な箸の持ち方親譲り

生駒市 小西 稔

文字忘れ書くたび使う電子辞書  
前略と挨拶だけで終りそう  
相談にやっぱり欲しい妻の声

奈良県 南海 美知夫

イラク入り九条アメのように曲げ  
足袋はいて五本の指を確かめる  
煙草やめ酒ほどほどと言うけれど

鳥取市 横田 春名

苦を散らし節から新芽伸びていく  
諦めていた産声に湯が溢れ  
爽やかなお早う今日も好い日だね

鳥取市 西尾 敬之介

新わかめ波おさまりに磯に揺れ  
浜風を受けてイカ乾しゆれている  
どうせならかなわぬ夢も捨て難く

鳥取市 岡田 信恵

定年後趣味に打ち込み許状取る  
花見酒再会できて絆増す  
満開の桜名残を告げている

鳥取市 山口 千代子

恋をして若さ燃やすも人の花  
老木も花を咲かせた過去がある  
青天に咲いているのに霞草

倉吉市 前田 喜美子

絵心が無くて茜の夕日みる  
可愛いと言われ美人と勘ちがい  
散る桜目で追いながら春炬燵

境港市 中井 虎尾

この土はいいと咲いている花の笑み  
わすれ傘安物だったが未練  
山桜散って普通の木にもどる

米子市 池尾保子  
ゴミの日をカラスはちゃんと知っている  
急がない亀が呑気に見えますか

ファンデーション濃い目に塗ってしみ隠す

鳥取県 藤山弘子

朝一番家内安全祈る膳

漬物へ季節の香り送りこむ

井戸端の漬物自慢限りがない

鳥取県 岡村孝明

人生は泣いて笑って過ぎて行く

無職でも晩酌だけは忘れない

財産はないが子宝だけ残し

鳥取県 吉田弘子

口コミの名医にすぎる我が余命

まごころが痒いところへ届く幸

少子化のサムライ様に孫五人

鳥取県 山岡久枝

今年また会えた桜にそつと手を

仏壇に金を預けて留守にする

戸惑いを救ってくれる初夏の風

高藤大雄 札幌川柳社主幹は、平成十六年春の叙勲  
で芸術文化功勞により、旭日双光章を受章された。

## 第28回 全日本川柳2004年埼玉大会

日時 六月十三日(日) 午前十時開場  
会場 埼玉会館 大ホール

〒330-0063 埼玉県さいたま市浦和区高砂

三一一四

宿題

第一部 締切りました

第二部 (当日投句、11時20分締切)

「新鮮」 内田昌波選

「都会」 田頭良子選

「心機一転」 川俣秀夫選

各題2句 当日配布の句箋に記入

第二次選者

吉岡 龍城・今川 乱魚・塩見 草映

磯野いさむ・大野 風柳・竹本颯太郎

会費 4,000円(昼食、記念品含む)

表彰(予定) 文部科学大臣奨励賞

参議院議長賞

川柳大賞

大会賞

ジュニア部門は賞状とメダルを予定

問い合わせ先

〒332-0015 川口市川口一三一一四〇一

松岡葉路方

日川協埼玉大会事務局 宛

TEL・FAX 048(222)8084

(社)全日本川柳協会大会委員長 磯野いさむ

全日本川柳埼玉大会実行委員長 佐藤美文



# 麻生路郎物語

(30)

— 路郎作句語録 (上) —

東野大八

私は常に後進を導くのに没になった句は、いさぎよく捨てよと申しております。今その一句を捨てたところで、その詩想が、その作家から霧の如く消えてなくなるものではない。必ず他の素材をかつて、更に新しい句として生れてくるものである。そして私自身句を捨てるに用捨しないのであります。

しかしその詩想を再び生かすことは随分と苦心をいたします。作っては捨て、作っては捨て、遂に七年間を要した一句さえあるのであります。

— 羊羹のこどもめてる老夫婦 路郎

の句がそれでありませぬ。霞乃の曼珠沙華の句にしても、幾ら作っても私が捨てるので、遂に三年余を費して一句を得たのであります。作家は深く句を捨てることによつて、一歩進歩を来たすのであります。徒らに自己の句

に愛着を持つことは、そこに墮落の一步があることを知らねばなりません。心すべきであります。(昭和21年「川柳雑誌」復刊号)

豆秋君の一番優れたところは飄逸さ、脱俗さであつて四角のものを三角の目で見ているような処に味が出てくる。だが、一つやりそこなうと誠に変哲もない句、駆け出しとあんまり差のない句となつていことが往々にしてある。これは亡くなつた浅井五葉が写生句の名手であつたが、一歩やり損うとまるでゴムを噛む様な句を作つたと同じである。一線を限界に拍手と侮蔑と隣り合つた句を作る作家である。(昭和27年「川柳雑誌」305)

川柳は女人と素人では作句態度が違わなければならぬ。川柳で女人だといえる人は、幾

人もいないかもしれないが、女人のいないところに、その道の發展向上を期待することは木によつて魚を求めよよりも、なおむつかしいことだと私は思つてゐる。川柳に長く携つてゐるからといつても、必ずしも女人だとは云えない。というのは隠居のザル甚に等しい川柳家が、そこらにいないとはいえないからである。といつたからといつて私は決して、女人を尊しとし、素人を卑ししてゐるのではない。女人は女人としての鑠骨彫身の修業をし、素人は素人としての立場にたつて道を楽しむ態度を明らかにすべきではないかと云いたいのである。女人顔をして一向勉強しないのと、素人が女人顔をしてノサバルのとは共に鼻持ちならぬというのである。

名人が将棋の一駒動かす毎に一考又一考することは、川柳の作句においては推敲又推敲に当る。ろくに推敲もしないで名句のできる筈はない。(昭和28年「川柳雑誌」313)

ある寺の黒板に

無常迅速

時不待人

と書いてあるのを思い出した。采根譚に

天地有方古

此身再不得

とある。私は三十年前に「一句を遺せ」と書いたが、もうその一句ができたであらうか。

私は時々碁を打つ。

私はどっちかという勝負には強い方であるが、勝負は問題にしていない。それがツバゼリ合いのような試合であり、どっちかで、非常に妙味のある局面が見られれば、たとえ一敗地にまみれたところで、問題ではないというのである。

川柳においても、同じようなことがいえると思う。私は他人よりもうまく句を作ろうなどという野望を持ったことは一度もない。ただ川柳一筋に溶けこんで、自分の思想にできるだけ忠実であるだけである。従って表現技巧に引きずられて、自分の思想から域外に出ることをむしろ怖れているのである。

私の句は寂しい。しかしムリに派手な句を作ろうとしないのはそこにある。一貫して自分の性格が流れていることを一路目ざしているのである。(昭和29年「川柳雑誌」321)

川柳とはこんなものであるという、ある型にあてはめて作句している作家の作品には、巧拙は別として、文人画で先生のお手本を忠実に模写している作家と大してちがわないと思う。

アマチュアにはアマチュアの世界がある筈

である。徒らに川柳の概念に囚われなくて、自由に、大胆に、個性を生かした作品を創つた方が、作家も愉快ではないかと思う。

先生のお手本と形の上で多少のズレがあつても、自由に、大胆に筆を運んだ絵の方に、アマチュアらしく好感が持てるとしたら、川柳もまたそうだといえないことはないでしょう。イヤ、そうあつて欲しいと思う。そこにこそ真に川柳することの大きなよろこびがあるのだと思う。(昭和29年「川柳雑誌」326)

私のかなりの厳選をものともせず、幾十年の間、句を寄せられている作家のあることは私の大きな喜びである。そういう作家は、もう抜けるとか、抜けぬとかいう境地から脱して、作らずにはいられないから作り、作ったから私のところへ寄せられるのであるらしい。そんな作家の句を見ると、生活環境とその心境の動揺によって、句の水準が高くもなったり低くもなったりしているようである。しかしそうした作家の句には、どっかに筋金が這入っているように思われる。

時には新進作家に押されているように思える時もないことはないが、それは新進よりも時に抜ける句が少いというだけである。たとえ句が少くとも、怠けない限りは、句のデグレリーはある水準は下らない。これは全く年季

の力にほかならないと私は思っている。私はこうした作家と句を透して思想の交流を楽しんでいる。いつまでも健在でいてほしい。(昭和29年「川柳雑誌」322)

川柳を作りはじめた頃には、作句に対して非常に情熱をそそぐものであることは、人によく知るところであるが、初心者の悲しさは力の不足から、なかなか佳吟を生むことが出来ない。しかし、作句に対する情熱さえ失わなければ、力の方は勉強により、歳月と共にグングン加わってゆくものである。ソコでソロソロ佳吟が生れてくる。

他から少し認められるような佳吟が生れると、更に作句に対する情熱が燃える。その情熱が更に佳吟を生む力を培養する。かくして押しも押されぬ作家になるのであるが、ここで多くの作家は中たるみがるものである。中たるみがくればそれでおしまいである。というのは、熱も力も逆コースをたどりはじめるからである。いわゆる大家といわれる人たちでも、作句に情熱を失えば、その句作力が眼にみえて低下することは、大家であるといつても例外ではない。多年の作句技巧で多少胡麻化することはできても、要するにそれは胡麻化しの句で、情熱を喪失した作品に迫る真力があらう筈がない。かくしてカオの大家

のみじめさを味わされるのであつて作家として堪えられることではない。

私が還曆を迎えた時に

—六十一—まだ情熱は燃えに燃え

という句を吐いて自己反省の資としたのも、情熱の涸渇をおそれたのに外ならぬ。

情熱は溶鉱炉の火である。決して消してはならない。イヤ、大いに燃やさねばならない。永遠に燃やしつづけねばならない。そこに短詩型川柳人としての生命があるのである。

(昭和29年「川柳雑誌」339)

茶をたてる人を見てみると、茶席ではしばしば、いかにも茶をたてていますというような手つきにいきあう。だが、至極平易に、ふだん通りの茶をたてて、少しも不自然でない茶のたて方は、みている方も自然である。

川柳でも、川柳らしい川柳をつくらうとする人の川柳は、なんとなく臭味があるが、その人の生活から自然にじみ出たような作品にはイヤ味というものがない。私たちは、特にうまい句を作らうなどと思わず、常に川柳に溶け込むという心がけが必要であらう。そこまでいかねばその道に入つたとはいえないのではないか。(昭和29年「川柳雑誌」339)

全国の柳誌を見渡すと、投句マニアのこき

げん何いに雑誌を出しているようなのを見かけるが、せめて柳誌を出す以上は、出すだけのメリットを持ちたいものである。どこの雑誌か判らぬようなものがあるが、もつと地方色を出して貰いたいし、句の上の主義主張も堅持する必要があるし、文学としての川柳の向上にも意を用いて貰いたいと思う。その点忘れても青童刀君の云い草ではないが、紙とインキのムダ使いをしないこと。(昭和40年「川柳雑誌」452)

○巧い句を作らうとアタマをひねって、ひねりあげた句が、よりによつて拙い句になつている場合がある。その句には作為が幅をきかしているからだ。

○前衛派とか称する人たちの句に消化不良の句が多いのは、狭い部屋の中でナギナタを振り回している感が深い。自分にふさわしい武器を早く発見し、自分らしい句を作ることである。

○中間派と称している人はいないが、他派からそう目されている人たちの怖るべき数はむしろ悠々として型の如き句を作ることである。従来の花の如く、美しくともえてして生氣に欠けるからである。

○本格川柳を自称する人たちの句は、句そのものが本格でなく、昔、葉屋が本家・元祖を唯一の守本尊としたように、本格という文

字に傾倒しているようにしか思えぬ。論議と作品とが一致していない点では、前衛派に劣らない。社会党が一部の労働者を代表するようにならぬか。私などむしろ前衛派の将来性に期待したい。

○没句を気にする人がいる。没にした人ととやかく批判や、非難をする人がいる。何故没になつたかを真つ先に検討してみるべきではなからうか。

○同人雑誌で刊行される自選句集が大変歓迎されるようであるが、それは雑誌経営者が没句の再生にお辞儀するのワザに外ならない。没にならないのを唯一の頼みにワンサと詰めかけるのである。

○作句は趣味であつても選は慰さみにすべきものではなく厳肅に慎重に、真剣にすべきものである。他人の優れた労作をヤミからヤミに葬ることは怖るべき罪悪である。

○選者無用論を唱える人がいる。その意気や大いに壮なりといえよう。そうした人には一人で一冊の刊行をすすめた。ただしハガキ刊行はダメ。

○葎乃の句に

うそうそうそ木魚の音もそう響く

というのがある。葎乃の個性がよく出ている。

(昭和38年「川柳雑誌」428)

# 愛染帖

## 波多野五楽庵選

和歌山市 武本 碧

流れ矢に乗って噂が止まらない  
飽食暖衣 街もわたしも不眠症

西宮市 門谷たず子

つれ舞いは終りひとりの足袋を干す  
風百態おんな一人の窓を打つ

八王子市 播本 充子

日が落ちる名将がいて駄馬がいて  
すっぱりと切れば逞しい新芽

弘前市 一戸 ツネ

模索する葛籠の中が面白い  
浮かれてる今じゃ今じゃと人間味

弘前市 高瀬 霜石

壊れものなのです きみもわたくしも  
聞き耳と聞き流す耳持つている

弘前市 福士 慕情

ひとり飲むお茶に茶柱立つたとて  
あまりにもカラッと晴れて走れない

四條驛市 吉岡 修

福相と言われても附に落ちぬ運  
過去の僕 未来の僕に会う公園

葦屋川市 森 茜

笑うしかない綻びをさらし合う  
からからと笑って今日を閉じておく

美祿市 安平次弘道

花占い笑ってすますことでなし  
どう媚びてみてもヒーローにはなれぬ

大和郡山市 坊農 柳弘

生い立ちを少し飾っている釣り書  
モーニングコーヒー企業戦士の顔になる

和歌山市 古久保和子

オフエーリア流れてくるよ花筏  
半券は記憶の底に落ちたまま

松原市 玉置 重人

めざし焼く背伸びはしないことにする  
万華鏡茶枯盛衰花吹雪

弘前市 高橋 岳水

合掌の形で想う蝶の翅  
自販機からゴロンゴロンとテロリスト

和歌山市 川上 大輪

手を抜くと切取線に背かれる  
一つずつ紡ぐ若さの残りもの

海南市 三宅 保州

少しずつ記憶が漏れている恐ろ怖  
生命線も眉毛も伸びる春の鬱

倉敷市 井上 富子

灰皿であなたへ帰る舟を焼く  
一枚のハガキにぬけ道があつた

東京都 やまぐち珠美

孤独感癒やすメールの失語症  
思い出の箱から虹をたまに出し

大阪市 津守 柳伸

追い風が届かぬ今日の軽い飢え  
書き終えて風の白さになる無心

西宮市 牧渕富喜子

体調のよい日は老春だと思っ  
幸せがつづきよい詩が生れない

八尾市 高杉 千歩

かけひきがよじれうつろな時間帯  
奈落の底でわたしを試す蜘蛛の糸

倉敷市 小野 克枝

悉く言わせてこころ海になる  
毒舌を丸く包んだ母の月

弘前市 斉藤 荔

躓いた石が見つけた座禪草  
父の忌よ父の匂いのする木の芽

下敷は本音を覗く位置にある

寝屋川市 江口 度

掘っても掘ってもこころ見つからぬ

大阪市 神夏磯典子

自分史の原点にある白い紙

富田林市 大橋 鐘造

こぶし咲く頃はいつでも亡母のこと

米子市 青戸 田鶴

誤解したあの刻からのラプソディー

富田林市 中井 アキ

童話本食べて翼が生えてくる

和歌山県 中後 清史

欲しいもの何もなければ死ねますか

西宮市 片山 忠

ほろほろと酔うてひとりの夢芝居

今治市 塩路よしみ

やさしさにはだされてから騙し舟

熊本県 高野 宵草

きつい言葉を吐いて仕舞うた花の風

松原市 小池しげお

能面がかすかに笑う春の宵

京都市 都倉 求芽

じんわりとアデューを告げる抜け殻よ

松江市 安食 友子

迷う日の扉はぎりと半開き

弘前市 宮崎ヒサ子

そのうちに影も一つになるだろう

砂川市 大橋 政良

コンパスの円に入りたい万歩計

姫路市 古川 奮水

切り捨てた尻尾捜しに戻る街

唐津市 久保 正剛

割り切って行こう世の中こんなもの

高槻市 乙倉 武史

良心にびくり動いたのど仏

鳥取県 岩崎みさ江

責任は誰もとらない多数決

三田市 堀 正和

およぎつく先は知らない方がいい

米子市 中井 ゆき

シナリオに無かった帽子飛びたがる

米子市 林 瑞枝

真実の愛は寡黙に耐えたまま

竹原市 正畑 半寛

有頂天どこかが歪みだしてくる

米子市 白根 ふみ

臆病が背中をさらす向かい風

羽曳野市 森下 一知

時刻む音におびえる病み上がり

羽曳野市 酒井 一壺

老いらくの恋出来そうなの赤いシャツ

大阪市 川原 章久

嫉妬心まだ現役の女です

堺市 和田つづや

受胎告知やっぱりそうか そうなのか

橿原市 安土 理恵

渡せないメモがバッグで熱くなる

鳥取県 石谷美恵子

耳鳴りの奥でやさしい鳥の声

鳥取県 田村きみ子

ひとの温さを探し続けてきて疲れ

愛媛県 中居 善信

人間の建てたビルから威圧され

西宮市 西口いわゑ

絵手紙の金魚が恋を囁いた

高槻市 左右田泰雄

沈黙はプライドそつと息をのむ

和歌山県 楠見 章子

アウトロー一茶も俺も痩せ蛙

鳥取県 谷口 次男

自分の名前忘れたらどうしよう

吹田市 太田 昭

ご破算を繰り返しては生きていく

大阪市 星野きらり

桜貝違う明日を夢見てる

岸和田市 雪本 珠子

来年も花見の酒は決めている

弘前市 相馬 銀波

定退でした さわやかな朝でした

弘前市 櫻庭 順風

じよんがらを歌えば胸に雪が降る

高知市 小川てるみ

人の世の話し声聞き目が覚めた

尼崎市 春城武庫坊

朝方の夢で夫の亡母と会う

尼崎市 春城 年代

ノーという答えが出番待っている

八尾市 村上ミツ子

レインコート枝垂桜を取り囲む

京都府 丹後屋 肇

花明りみんな詩人にしてしまひ  
日立市 加藤 権悟

桜の下昨日のうつはふつとんだ  
高知県 赤川 菊野

埒もない話に夕陽海に落ち  
弘前市 岡本 花匠

心にもない強がりを言う自嘲  
香芝市 大内 朝子

清貧も時の流れに押し込まれ  
和歌山市 坂部かずみ

豊穣の海が時々咳をする  
愛媛県 黒田 茂代

悶々と眠れず枕裏返す  
倉吉市 米田 幸子

教科書にヘイタイスメ書かせない  
唐津市 仁部 四郎

あの角を曲がれば明日が見えてくる  
東京都 清原 悦子

手拍子をうってサクラを散り寄せた  
鳥取市 西尾敬之介

焼き捨てて下さい思い出したとき  
藤井寺市 太田扶美代

指先の動きに謎がありそうだ  
鳥取県 土橋 睦子

あの人に会わないような道を選び  
三田市 辻 開子

運命かな母より深い川渡る  
羽曳野市 吉川 寿美

生きるだけ生きてやろうと歯を磨く  
尼崎市 田辺 鹿太

骨抜きにされた魚よ悲しげだ  
池田市 栗田 久子

曼陀羅華見たくて凧になつてみる  
和歌山市 上地登美代

酔い痴れてヒトは悲しいなどと言つ  
豊中市 水野 黒鬼

雨が降る花散る音を消して降る  
鳥取県 竹信 照彦

乙女座で大胆不敵なる男  
東大阪市 谷口 義

進化論人間飼つてみませんか  
大阪市 岩崎 公誠

サクラ咲く国に生れて来た果報  
鳥取市 近藤 秋星

図らずも人間の裏みてしまつ  
鳥取市 録沢 風花

謎からの推理結んだ赤い糸  
和泉市 西岡 洛酔

鬼瓦隣のビルを覗みつけ  
宇部市 平田 実男

年金の託背すじが寒くなる  
倉吉市 松本よしえ

今日もまた友の車に一礼し  
唐津市 田口 虹汀

わが子とは障子一枚ほどの距離  
鳥取県 西原 艶子

鍋ひとつあれば事足りる赴任先  
奈良市 米田 恭昌

モノリザの笑顔内緒を抱いている  
枚方市 海老池 洋

下書きをしない葉書の字が詰まり  
富田林市 片岡智恵子

小袋に分けて薬も旅仕度  
西宮市 緒方美津子

生きていた評価葬儀の長い列  
尼崎市 長浜 美籠

ほんとうの私を捜す鏡  
出雲市 園山多賀子

二次会で俺の素顔を覗かれる  
東かがわ市 木村あきら

憎んでた父の大きさ聞く弔詞  
唐津市 井上 勝視

読めばすぐ焼いてほしいと女文字  
奈良市 乾 春雄

バス停を二つ歩いてみる長閑か  
泉佐野市 稲葉 洋

仏様と心ゆくまで花御堂  
海南市 堂上 泰女

頭脳明晰あなたが姑でない救い  
和歌山市 田中 みね

前列に目だちがりの指定席  
尼崎市 内田美也子

人生の先は読めない開基五段  
堺市 志田 千代

ときめきをあおる開幕ベルが鳴る  
和歌山県 村中 悦男

荒れた手に母の本音が生きている  
八尾市 井尻 民

歳月が許してくれた古い傷  
八尾市 田辺 浩三

### 第5回 生駒市民川柳大会

日時 7月18日(日) 12時30分開場  
 (昼食は済ませて下さい)  
 会場及び 生駒市芸術会館「美楽」  
 投句先 (近鉄生駒駅北西400米)  
 〒630-0246 生駒市西松ヶ丘2-20  
 TEL 0743-74-1101

事前投句 「鞭」 締切6月19日  
 吉川 卓選  
 欠席投句拝辞 ハガキで2句

宿題 各題2句・1時30分出句締切  
 「活」(大会課題) 板野 美子選  
 「当たる」 大内 朝子選  
 「拒む」 黒川正之進選  
 「節目」 杉森 節子選  
 「裁く」 住田英比古選  
 「華やか」 長江 時子選  
 「不得手」 森 東馬選

参加費 1500円(発表誌呈・出席者のみ)  
 賞 生駒市長賞ほか多数  
 主催 生駒市・同教育委員会・生駒番傘

### 第7回 鳥取県川柳文芸大会

日時 7月11日(日) 午前10時開場  
 場所 新日本海新聞社5階大ホール  
 (JR鳥取駅南口から徒歩3分)

兼題と選者 「超」 奥田みつ子選  
 「楽器」 中田たつお選  
 「けじめ」 中平 亜美選  
 「戻る」 野口 節子選  
 「きっかけ」 萩原 美雪選  
 「簡単」 澤 裕子選  
 「淡い」 下田 幸子選  
 「蚊」 田中 一眸選  
 席題なし・出句各題2句まで  
 当日出句締切午前11時30分

会費 当日2000円(軽食・大会誌呈)  
 欠席投句1000円(大会誌呈)  
 表彰 1句1点方式  
 総合成績上位10人まで呈賞

欠席投句  
 締切:7月5日(当日消印有効)用紙自由  
 宛先:〒680-0843 鳥取市南吉方3-364  
 安田方 春木圭一郎  
 (第7回鳥取県川柳文芸実行委員会事務局)  
 主催 鳥取県川柳作家連盟

### 第59回 尼崎市文芸祭

募集作品 雑詠1人1句(未発表作品)  
 応募方法 所定のハガキまたは官製ハガキ  
 官製ハガキの場合は「川柳」と明記の上、  
 右半分に作品、左半分に氏名(ふりがな)、  
 年齢・郵便番号・住所・電話番号を明記。

応募資格 一切問いません  
 応募期間 4月25日～6月10日(必着)  
 応募先 〒660-0881 尼崎市昭和通2-7-16  
 尼崎市総合文化センター文化課  
 「尼崎市文芸祭」係  
 賞 一席・二席・三席・四席・佳作・選者特別賞  
 選者 黒川紫香・萩原金之助・森田栄一  
 長浜美籠・田辺鹿太

### 尼崎市文芸祭大会

日時 9月12日(日) 13:00～  
 尼崎市総合文化センター7階 第2会議室  
 表彰式終了後 作品研究会  
 文芸作品集 700円(消費税込み)  
 9月12日から発売  
 主催 (助)尼崎市総合文化センター・尼崎市  
 協力 尼崎川柳協会

### 第3回 寺尾俊平賞

#### 応募要領

川柳塾塾長 岡田千茶

応募句 雑詠3句1組(1人1組・未発表句)  
 選者 橘高薫風・八坂俊生・土井哲秋  
 山口流木・岡田千茶

入賞 寺尾俊平賞他多数  
 選考方法 各選者の合点による  
 応募要項 郵便番号・住所・氏名・電話。  
 用紙自由

締切 7月10日必着  
 投句料 1,200円(定額小為替、切手可)  
 発表誌呈  
 先着150名 俊平染筆布巾呈

応募先 〒700-0986  
 岡山市新屋敷町3-15-2  
 川柳塾・俊平賞選定事務局  
 TEL 086-241-3358  
 後援 岡山県川柳協会

# 誹風柳多留二四篇研究 67

粕谷長生・小栗清吾  
山田昭夫・伊吹和男  
大野秀二・橋本秀信

清 博美・佐藤要人

518 玉たばこ見せるたんびにゆるくなり

串柿

清 玉煙草は、刻煙草を紙の帯でくくったもの。通常五匁を一束とし、これをまた五匁玉とも言った。

煙草屋の店先での景であらう、客に見せ試飲させる度に玉煙草の束が緩んでしまうというのである。ふわふわした刻煙草を紙の帯でくくつてあるのだから、触ったり一寸摘み切る度に緩くなってしまうのである。

玉に疵つけて一ふくんで見る 三八六  
佐藤 賛。

519 御かこからわんといわれるつばなうり

露舟

清 江戸近郊の少女達が、野掛の連中を相手に茅の花を売りつけたものであった。これを川柳では「つばな売り」と言っている。

句の場合は、御殿女中などが駕籠で野掛けに来た所に、茅を売るべく近づいて、中の女中が抱えている狎に吠えられたというのである。

つばなうりよく〜みれハ女の子 四四

佐藤 賛。

520 新造を平気で遣ふかどみとき 五鳥

清 新造を吉原の新造とすべきか、或いはまた、下級武士、上流町人の妻とすべきか、迷うところであるが、後者の場合は通例「御新造」とするから、ここでは、吉原の新造としておく。

吉原に入つて商売をする鏡研ぎが、その作業の準備や後かたづけの手伝いを新造に頼むのであらう。これを端から見ると、こともあらうに、新造を遠慮なく遣つているように見えるというのである。作業の手伝いの依頼を「平気で遣う」と表現したところが、句の手柄なのであらう。

佐藤 賛。

521 萩はうり物買ものハ女郎花

如雀

清 萩は柳島砂原に在つた俗にいう萩寺で、慈雲山龍眼寺。この寺の境内に萩を植えたのは元禄期、その後途絶えたが明和の頃に復活したという。

吉原とは少々離れているが、かこつけるには申し分ない道筋。売物・買物、萩・女郎花（女郎→吉原）と二つの縁語を使って、かこつけの吉原行きを詠んだ句。

橋本 萩は正灯寺のそれを指す。正灯寺は紅葉とどみに萩も有名だったらしく、萩寺と並んで紹介されている。「萩、柳しま竜眼寺、宝泉寺町正灯寺」（「江戸近在知名名物名産集」）。「萩、亀戸柳島竜眼寺、浅草たんぼ正灯寺」（「増補江戸年中行事」）。「萩、立秋より廿五六日頃、亀戸竜眼寺、萩寺といふ……」



下谷正灯寺」(武江遊観志略)。「八月、景物、萩、亀戸童眼寺(世に萩寺といふ)……下谷正灯寺……」(東都歳事記)等。

吉原へかこつけにするには、亀戸は遠すぎ。正灯寺とすればズバリである。

はぎやもみちか本さんのよふな寺

天二核1

はさもみちしりきつて御座ルそよ

天三札1

佐藤 礎稿贊。

522 皆はゝあづれ五六人あみだかさ 柳雨

清 五六人の婆連れのグループが幾組も、阿弥陀等を被つて出掛けるというのである。言わずと知れた六阿弥陀詣、五六人と阿弥陀笠で六阿弥陀を暗示した句立て。

ばあ様が六人連れてくたひれる 傍五15  
佐藤 贊。

523 本郷を梅やしきにておつふさぎ 夢中

清 梅屋敷は加賀前田家と言つたもの。その由来は勿論、梅鉢の定紋。この加賀前田家の広大な屋敷が、本郷一帯を占有しているとの意。

佐藤 贊。

524 御妾の手がら門外からも見え 百喜

清 お妾が男子出産。端午の節句に幟を高々と揚げて祝う。その幟がはた〜と風に靡いているのが、お屋敷の外からも見え、お妾の誇らしげな顔までも想像出来る、というのである。

お雛様を飾つても、こうは行かない。

へんぼんと妾の手がらひるがへり 三七6

佐藤 贊。

525 八月二日大雪としちやいい 文集

粕谷 八朔(八月一日)の翌日、吉原付近の質屋での光景。

遊女が八朔に着た白無垢を二日には質草に出してしまふ。白無垢が沢山集まつた質屋では、それを大雪と下手な洒落を言つていだけの句である。

二日にハしちやの蔵へつもる雪 宝12梅3  
八朔か済トちら〜雪の質 三三6

橋本 これを「下手な洒落」ときめつけては八朔の句全体がつまらぬ句となる。

清・佐藤 同。

526 寐すこして姫梅ほしを顔へあて 洗車

粕谷 嫁が寝坊してしまい、姑から嫌みを言われる前に、頭痛でもしているかのように梅干を顔へ貼つた。

梅ほしを二云目にはるふじびたる 七九5

梅干で角のはえ場を姫ふさげ 一一〇11

夕べ気の嫁こめかみへふしん梅 一四八4

小栗 同。「夜がお盛んだから目が覚めない」と皮肉をいわれたくないから。

清・佐藤 同。

527 薄氷をみちりくと伽羅でふみ 門柳

粕谷 伊達綱宗の句。吉原の遊女高尾へ通う時、伽羅の下駄を履いたというもの。

寒い日は張っている氷を割りながら通つたという意と、「薄氷を踏む」の俚諺をふまえて、伊達家の殿様が、高尾に入れあげような危ない事をしている、の両意を詠んだ句。

橋本 「史伝」では、この句、浮世渡平に襲われる前兆としてとらえているが、その放埒が伊達家を傾け、遂には隠居贅居の身となることと解するが適當と思つた。

清・佐藤 同。

# 首香のむ

藤田 泰子選

生きるための方程式をといている  
 千人針二度と戦に子はやらぬ  
 善悪は問わぬ自分が誇いた種  
 義理チヨコを後生大事に妻に見せ  
 区切りではあるが終わりとはしない  
 躍る胸抱きしめられし菜の花忌  
 ほお杖は気の済むまでのあれやこれ  
 落丁のあたりに深い海がある  
 もう済んだことを暴くでない風よ  
 葉脈の先まで水を送らねば  
 待ちばうけ踏絵と思う橋渡る  
 まだ夢の途中なんだる昼の月  
 一人住み笑い方まで下手になる  
 化粧してよけい淋しくなるひとり  
 人間の殻を脱ぎたい時もある  
 哀しみに会ったび心肥えてくる  
 試されて時どき苦い水を飲む  
 あやとりの独り箒が手に余る  
 いろいろな過去を背負っている顔よ

米子市 門脇 晶子  
 羽曳野市 吉川 寿美  
 尼崎市 長浜 美籠  
 東大阪市 笠井 欣子  
 池田市 栗田 久子  
 松江市 川本 畔  
 藤井寺市 鴨谷瑠美子  
 藤井寺市 太田扶美代  
 藤井寺市 高田美代子  
 和歌山市 古久保和子  
 鳥取県 土橋 睦子  
 海南市 堂上 泰女  
 橿原市 居谷真理子  
 鳥取県 石谷美恵子  
 倉吉市 野口 節子  
 鳥取市 西原 艶子  
 橿原市 安土 理恵  
 堺市 桜沢 千世  
 香芝市 大内 朝子

生き直そうとまた米櫃を充たすなり  
 不倫願望満たしてくれるメロドラマ  
 出逢いそれから哀のドラマが始まりぬ  
 黄昏れてあの世この世のさくら散る  
 縦はたて横はよこしか嫌な質  
 どの花を見ても微笑み湧いてくる  
 萌えたのはあなたのくれた底力  
 花万染 何を急いで逝き給う  
 桜散る今日の命をいとおしむ  
 忘れな草添えて大輪貰われる  
 桜花見送る涙流すまい  
 それぞれに自己陶醉の花の道  
 さくら前線わたし一人を取り残す  
 摘まないですつくと伸びてみたいから  
 サマワの子らに桜を見せてやりたいな  
 ぬれてはいる牡丹気づかい蛇の目傘  
 さよならを包むと涙零れ落ち  
 包丁が朝の命の音楽で  
 ソプラノで朝の目覚めにホーホケキヨ  
 幸せを小分けし入れる冷凍庫  
 紫をまといふんわり初夏を舞う  
 蝶が舞いわが肩先を離れない  
 野の花に遊ぶひととき子に還る  
 街に出て笑顔のけいこしてかえる  
 髪切つて愛の終りと向かい合う

和歌山市 西山 幸  
 寝屋川市 平松かすみ  
 西宮市 西口いわゑ  
 西宮市 門谷たず子  
 大和高田市 鍛原 千里  
 米子市 足立由美子  
 和歌山市 武本 碧  
 寝屋川市 坂上 高栄  
 吹田市 大谷 篤子  
 和歌山市 福本 英子  
 東京都 後藤 早智  
 大阪市 津守 柳伸  
 三田市 久保田千代  
 寝屋川市 森 茜  
 鳥取県 佐伯 やえ  
 八尾市 田中トシエ  
 富田林市 中井 アキ  
 箕面市 出口セツ子  
 松江市 兼本 政子  
 堺市 西村りつえ  
 奈良県 渡辺 富子  
 米子市 林 瑞枝  
 三田市 石原 歳子  
 米子市 中井 ゆき  
 愛媛県 花岡 順子

マイウェイのつもりも時に脇見する子に送る荷物ビタミン剤も入れCMにうなされそうになる保険原点に戻り何度も眼鏡拭く根回しが効きゆるりと流れ出す歯を磨きながら反省しています入り組んで来たので出口見失う土の香にとつぶりわたしの根をおろす本当の怪我の怖さを知っている椅子二つ揃えて一人暮らしなりいつまでも適齢期ですひとり住む彼座参り心を楽にして帰るデバ地下をきれいに盛って帰り待つ退屈で聞こえてほしいひとり言私の椅子をさがしてきた家具屋十三歳のドアにはあちゃん挟まれる健康の話題が増えた老い二人あの歳になればあんなになってたい避けられぬ運命ならば妥協する賞味期限見えてきました足と腰いつの日か旅の終りの笛が鳴る切り盛りはどうかあれ嫁に花もたす生きねばと布団をたたむ独り言手のひらで転がす愛の消える音切り株の悲話を聴いてる森の風

大阪府	米澤	俣子
東京都	清原	悦子
大阪市	大川	桃花
和歌山市	坂部かずみ	
生駒市	飛永ふりこ	
豊中市	安藤寿美子	
和歌山市	桜井	千秀
大阪市	川久保睦子	
藤井寺市	若松	雅枝
堺市	志田	千代
東大阪市	安永	春
河内長野市	植村	喜代
鳥取市	岸本	孝子
米子市	白根	ふみ
米子市	青戸	田鶴
羽曳野市	徳山みつこ	
三田市	辻	開子
シドニー	坂上のり子	
鳥取県	録沢	風花
米子市	小塩智加恵	
芦屋市	黒田	能子
倉吉市	山中	康子
八尾市	生嶋ますみ	
豊中市	櫻谷	郁子
大阪市	津村志華子	

知らんことばかり情報多すぎて頑固さが取得の母も歳に負けお金の話などしないほんとお金持ち晩年の愛は小振りな皿に盛る細木数子 他人ごとだから面白い模様替え昨日のうつつを引きずらない裁く身も裁かれる身も雨の中母の釘あとからじわーときいてくる傘寿でも心はずむ更衣七坂を越えても迷う紅の彩ストレスを笑い袋が開けにくる酸素欠乏卯月の窓をあけ放つ裏の裏何かいい事ありそうだいつの日か世話になる身と思おう世話ハードルの高さをよおく見きわめる陽春に街行く靴も唄い出す

大阪市	本間満津子
神戸市	山田婦美子
東京都	岸野あやめ
八王子市	播本
八尾市	高杉
神戸市	田中
倉敷市	小野
大阪市	小泉ひさ乃
八尾市	中島
兵庫県	中上千代子
高知市	小川てるみ
尼崎市	春城
大阪市	神夏磯典子
尼崎市	内田美也子
米子市	澤田
大阪市	松尾柳右子

晶子さんの句ー生きるための方程式、人それぞれ持っている未知数。一度しかない人生、方程式を解き終わった時、正解だったと思えるように悔いのない人生にしたいものです。寿美さんの句ーイラク派遣のニュースを見ながら、昭和一術生まれで、戦争を体験した私も同じ思いに駆られています。戦争反対、二度と肉親を戦争で失いたくないと、声を大にして叫びたいものです。美穂さんの句ー人の所為にするに辛いけど、自分が蒔いた種だと思えば救われます。自己責任の強さが潔く響きます。欣子さんの句ーバレンタインデー「今日、女の子からチョココレットもらって」嬉しそうなお主人「あら、良かったわね」そんな会話が聞こえてきそう。男性の心理をうまく掴んでおられ、ほのほのとした愛情を感じました。

愛

門谷たず子選



ハイヒール履いて恋路を突っ走る  
 愛一途あなた任せの舟に乗る  
 目に見えぬ愛たがこんなにも重い  
 きみだけに渡すカードを持つている  
 国境を冬のソナタが越えて来る  
 パチンコ屋愛に乾いた人たちが  
 猫を抱くまわれ右してくれぬ愛  
 愛すこし足さねば枯れる絆かも  
 愛情の過多から出たい竹とんぼ  
 咲く愛も散る愛もあるターミナル  
 愛一途赤信号が目に入らぬ  
 愛をいっばいさよならの花栞  
 竹の葉の滴のような愛もある  
 焼き羊を半分こする嫁姑  
 温もりを愛の形ににぎりめし  
 どん底に梯子をかけてもらう愛  
 燃えあがる胸にしまつて置くも愛  
 価値観のゆらぎ一つの愛終る  
 受けた愛すこし膨らませて渡そ  
 余熱のよう 愛温めている夫婦  
 ジョークなど交わして替えているオムツ  
 地球儀の隅まで愛が届かない

のり子 鐘造 あずま 准一 善信 猿杵 志千代 典子 ますみ 俊子 茂代 伊津志 充子 黒兎 旋風 郁子 あずき みつこ ヒサ子 セツ子 孝一

愛されぬ農に後継者の迷い  
 ライバルに届ける塩を蓄える  
 返せない愛を分子に溜めている  
 自分史に自己陶醉の愛ひとつ  
 他人様で終った愛を抱き続け  
 五十年同じ目盛りで刻む愛  
 愛惜や手を握る手をさするの  
 愛し合った指紋は消えることがない  
 キリストもアラも愛を説いたはず  
 踏みこんだ愛の迷路とも知らず  
 遺されて愛することに飢えており  
 スペアキー返して愛は行方不明  
 にぎりめし母は切ない愛を詰め  
 三分粥一匙すつを運ぶ愛  
 三代で見守る愛の物語

晴翠 清史 柳弘 遠野 順風 保州 勝修 千差子 寿美 彩子 雅枝 早智 徳三 堀正和 強一 霜石 美也子 理恵 北野哲男

いもが好きとは年頃で言いだせぬ  
 焼き芋の匂いへ色気など無用  
 いもを掘る園児の声が天へ抜け  
 芋ばかり食べたトラウマまだ疼く  
 焼きいもがとてもし恋しくなつて秋  
 好きな人の前ではにかむとろろ飯  
 ほかほかの石焼き芋を知らず笛  
 辺り見てソツと焼き芋買っている  
 ひもじさを救ってくれたふかしいも  
 新じゃがの燗く笑い掘り出され  
 じゃが芋とポテトの違い嫁姑  
 古里のじゃが芋詰めて飛脚便  
 枯れた蔓辿つて嬉し山の幸  
 流水につけて小芋の皮を剥き  
 さつまいも皮ごと食べてダイエツト  
 いも飴が昔むかしを語りだす  
 いも植えて余白埋まった農日誌  
 出張の土産に貰う芋羊羹  
 ふるさとのいも焼酎は祖父の友  
 産院の窓が石焼いもを呼び  
 ウエストが気になるけれど芋が好き  
 ポテトチップ止められないと手も動く

雄山 愛論 尚士 岳水 みね 玄也 歳子 活恵 花匠 寿美 雅明 輝明 高明 益子 正劍 ゆきの 俣子 倫子 ますみ いさお かずみ

古川 奮水選



地下足袋も軍手もうれしい芋畑  
産地直送いもが届いた旅土産  
ケーキ屋においも衣裳も名も変えて  
風邪くすりよりも芋粥効いてくる  
意地すてて石やきいもを買うている  
芋粥の飢えを忘れてる平和  
ケーキよりも好きだと言う娘  
お茶にする石焼きいもの声がする  
大袈裟な科白並べて芋を売る  
納豆が長いも朝の食進み  
芋の芽が納屋でふき出す反抗期  
ガキ大将そろそろ運ぶ芋の露  
たかがコロッケこれとコロッケの味  
焼酎に姿を変えたいもが好き  
芋版が父の色紙へ妥協みせ  
戦後史に残る代用食のいも

佳

富子 庸佑 棲世 松煙 たす子 敏子 徳三 公誠 銀波 俊子 美津子 奥五 月子 信子 妻 子

干し芋を噛めば古里の味がする  
麦飯にわたし出番のところが芋  
肉じゃがが決め手となつてプロポーズ  
どの蕎も焼け具合見た箸の穴  
今ごろに食べるとうまい芋のつる

人

土の香もする里いもの礼を書く

しげお

小判でも出たか團児のいも畑

正雄

地

ポテトフライ山ほど盛って誕生日

安土理恵

軸

しばらくはいも粥にする歯の治療

洩れる

津村志華子選



木洩れ日を浴びて聞いている鳥の私語  
念願の笑顔が洩れる天満宮  
ゴミ袋溜息洩らす戦中派  
序列から洩れて人間らしくなる  
思い出を焚けば溜息洩れてくる  
情報が洩れるケイタイの恐ろしさ  
肩書きがとれて欠伸が洩れやすい  
四面楚歌洩れた言葉は繕えず  
木洩れ陽に五感が緑色になる

佳

応えてあげよう漏れてきた噂に  
同僚の医師から洩れる医療事故  
紙コップ内緒話が洩れたいと  
正論を吐いて昇進からこぼれ  
別れには心残りも洩れてくる  
付け爪の指から洩れてゆくお金  
ビーナスの洩らす微笑に感わされ  
洩れぬよう恋のメールはすぐに消す  
物忘れ聞き洩らしたと言える歳  
秘伝は口伝洩れないようになってる  
土壇場になると本音がチラと洩れ  
ビリオドの先に洩れている微笑  
回り椅子部下のため息聞き洩らす

富子 庸佑 雅城 とし子 岳水 孝一 倫子 四郎 美也子 早智 扶美代 一花 克枝 兵八郎 昭子 あやめ 慕情 遠野 哲男 妻 子 尚士 柳弘 富子 年金もイラクも吐息洩れ続け  
内緒から内緒が洩れる人の口  
木洩れ陽に心が和む神の杜  
立ち話洩れる噂の中にいる  
合掌の手から懺悔の言葉洩れ  
余るはずない家計簿の記帳洩れ  
洩れてくる噂見ぬふり聞かぬふり  
裏口に情報洩れている噂  
人事課の壁には穴が空いている  
一言を洩らして疵を深くする  
洩らしても便利な物が出来ている  
手の内が洩れて作戦たてなおす  
ここのだけの話をきいた壁の耳  
家政婦の口から洩れた内輪採め  
充分のつもり洩れてる介護の手

佳

横洩れ縦洩れ赤ちゃんの元氣  
洩れていたのではないのだ消されてた  
欲すこし洩らし人並み生きてる  
溜め息をとどき洩らす生き上手  
貯めている人ほど水も洩らさない  
素顔から洩れるやさしさ嘘はない  
欲ばった分だけ洩れる指の隙  
未消化の夢ポッケから洩れている  
幸せを洩らさぬようにラッピング

# 初歩教室

## 題一 介護

### 三宅保州

**擬人法** 作句の技法の一つに擬人法というのがあります。それは、生物、無生物や物体など例えば動物、植物、自然、道具等を人格化させて人間のように言葉や感情を与え、語らせたりに行動させたりする描写法と言えます。一例を挙げますと

賞状に喋らせている応接間 清史  
 恥ひとつかいて気楽な瘦せ蛙 敏子  
 怖ろしい役割を匙引うける 乱耽  
 何もせずじっとしてたらよいレール 花村  
 いつからかお金に顔を忘れられ 鬼遊  
 労働歌蟻が歌えば凄かろう 薫風  
 擬人法の利点は、句の訴えを強化したり、味わい、軽み、穿ちを効果的に表すことなどですが、技巧に走りすぎると、作りすぎた句にもなり、両刃の剣的な面を持っています。

#### 【同想句】

「介護される身になりたくない旨の句」

原 介護せずある日あの世に逝つてたい のり子

添 できるなら介護受けずに召されたい

原 介護嫌ヒンビンコロリ望みます 忠子

添 世話を掛けないでコロリと逝けるなら

原 ぼつくりと介護いらすずでんびしやり 昇

添 ぼつくりと介護いらすずで召されたい

原 介護なく人生末期のぞむ余生 節子

添 介護などいらぬ余生を望みたい

介護にはなりたくない竹を踏む

要介護無縁願つて鉄 equal 幸

介護の手受けすぼつくり終わりたい

介護ない余生願つて手を合わす 准一

「笑顔のある介護を詠んだ句」

介護して母の笑顔のありがたさ 賢治

笑い声絶やさぬように介護する のり子

介護する人の笑顔に癒される 淳司

介護するナースの笑みに救われる 良一

「老老介護を詠んだ句」

老い二人介護する人される人 栄子

お互いに介護している老夫婦 みね代

原 老老介護ふたりで逝きたいこの命 利子

添 老老介護せめて二人で召されたい

#### 【添削・批評句】

「相手の身になった気持ち詠んだ句」

介護される立場のつらさ知る 章司

介護され看護する身を案じてる 弘子

される身になって介護を考える 准一

される身になった気持ちで介護 こそえ

両句は殆ど同じで、標語的なのが惜しい。

いずれの句も原句に忠実に添削するとやはり同想になります。発想が句の命ですね。

#### 【添削・批評句】

私もいづれ介護を受ける身に 邦柳

長寿国介護を受ける人はかり 邦柳

両句とも説明調。そこからを詠んで下さい。

見送った亡母のひと言ありがとう つよし

「見送った」で亡母とわかるので母でよい。

原 介護受け口だけ達者文句云う 敬之介

添 感謝しているのに文句言う介護

原 頑固者の父も介護を受ける身に 秋星

何か具象を使うと佳い句になります。

添 紙おむつ厭がる父の目に涙

原 介護する妹笑みを持ち続け 志津子

添 妹と作者が混同した言い回しになっている。

添 微笑みをいつも忘れぬよう介護

原 老いてなお達者介護は他人事 美恵子

添 他人事はそれこそ他人事視すべきませんか。

原 介護には縁ない身体感謝する トミノ

中八・下六音字でリズムが悪い。

添 介護とは考えるほど案でない

原 ひとり暮らし施設楽しみデイサービス 綾 乃

添 施設とデイサービスが重複します。

原 添 独り身にデイサービスを待ちかねる

添 介護などされたくないししたくない 時 雄

添 誰しもが介護を望まないもの

原 介護する私も辛い時がある 紀 子

添 辛い、悲しい、嬉しい等直接表さないよう。

添 介護する私も介護してほしい

原 一言の言葉だけで介護する タカ子

添 ありがとうに介護の疲れ癒される

原 息してるだけのお方のお方介護する 清

添 寝たきりのお方の話し相手する

原 脳出血親の介護もせず終い かずみ

添 せめてもは介護をしたかった急死

原 世の流れ介護の仕方身につける 孝 明

添 介護法勉強他人事でない

原 介護度を心得ている介護プロ 千 華

添 介護士の介護さすがだなと思っ

原 介護して親にお返し真心を 稔

添 今やつと孝行できている介護

【少し工夫すると佳くなる句】

原 打撲傷介護度五程に手が掛かり 千代子

添 介護度五ほど夫は手が掛かり

原 ロボットとワイン嗜む傘寿かも 春 代

課題の介護とは言い切れないのが惜しい。

添 ロボットに介護をされる老後かも

原 介護保険みな横文字でわかりかね 満 子

添 横文字を具体的に詠むと効果的です。

原 ショートステイデイサービスと並べ立て

添 行きとどく介護にそつと手を合わせ 政 子

住いのですが、標語的なのが難。

原 介護する指を大事に爪を切る 雅 代

添 爪を切るですから、指は不要です。

添 介護する身だていねいに爪を切る

原 介護する嫁の笑顔にはつとする 信 子

添 介護する嫁の笑顔に救われる

添 介護する娘にどなた様ですか いさお

青春を介護にかけて嫁き遅れ 雅 明

【佳 句】

まだまだとたかをくくっている介護 はじめ

足腰を鍛えて介護やり過ごす 照 彦

介護バス待ちかねているおばあさん 道 子

愛妻は介護請負契約者 智加恵

子備軍のような気持ちですする介護 像 山

抱いて寝た孫に介護をされる日々 トミノ

寄り添って今日も介護の日が暮れる 信 翁

介護して意思の疎通ができた嫁 喜 子

老犬を介護している老夫婦 宏 子

介護士はひよいと身体を移動さす 実千代

シート交換出来る幸せポランティア 幸

長寿への道に介護という関所 好

行きずりの善意で回る車椅子 昇

葉よりやさしい孫の手に触れる イセ

介護する心を今日も晴れにする 映 子

ボケたかなかいこの漢字わからない ポン吉

(メルボルンに在住) 武

掛け捨てが理想の介護保険料

【今月の推せん句】

お互いに介護し合つて高砂や 大崎侑子

尉(じょう)能案の翁の意)と姥(うば)

の祝言物を持つてきたのが効果的です。句意

はよく似た句が同想句にあります。高砂や

がこの句を生かしています。

いつの日か好きにさせたい介護犬 堀 正和

「盲導犬クイール」のテレビドラマや映画

がヒットしましたが、その訓練された従順さ

に感動させられる一面、いつかはその大変な

役割から解放し自由にさせてあげたいと思

いを、実に巧みに詠み上げられました。

わかるわよ私も介護してたから 西村益子

普段の会話をそのまま句にして、経験者の

みが知る介護の大変さを訴えています。

【私の句】

介護とは二十四時間勤務なり

介護度はどうあれ母は母である



# 川柳の味の 一つに毒の味

仁部 四郎

「毒」とはあまり穏やかな言葉ではないが、文芸作品にはなにかの種類や型で期待されているもの一つであると私は考えている。川柳で言えば、『末摘花』に代表されるような艶種と、政治や社会の風潮への批判・諷刺である。

現代の川柳では、江戸の川柳でみるような艶種なり色恋の句は、一部の雑誌等ではお目にかかるが、まっとうな句会や句集ではお目にかからない。「これは、江戸の川柳ですよ」と、いわば逃げ口上の説明付きで、「ばれ句・破礼句」が紹介されることは多い。

『末摘花』は、初篇が安永五年（一七七六）に刊行され四篇までであるが、明治以降は第二次大戦後まで発禁にされていた。公序良俗に背く猥褻な文書という判定であり、毒物扱いをされたのである。

新潮社の新潮選書「川柳のエロティシズム」

（下山弘著）で取り上げられている句を紹介してみよう。

- 1、蛤は初手赤貝は夜中なり
- 2、道鏡が出るまで牛房洗ふよう
- 3、もくぞうの生きてはたらく長つばね
- 4、御妾の疵には一字はつて有
- 5、かけ声がひくひと浅黄がてんせす

1の句の「蛤」は婚礼の宴席での吸物であることは今日ではかなりの人に知られているし、2の句には某女帝が隠されていることも知られている。それぞれの句を詳細に説明すると、どこから叱声か飛んで来るかもしれぬので以下省略ということにするが、4と5の句は、武士階級をイナしている句でもある。

さて、三笠堂から出ている『現代川柳必携』（田口麦彦編）には、目次に「愛情」という項目がある。その中から著名な川柳作家の作品を次に紹介するが、もちろん、『末摘花』の作品と比較するべきものではない。

- 1、愛人は交通事故で知れわたり  
岸本 水府
- 2、子を産まぬ約束で逢う雪しきり  
森中惠美子
- 3、恋成れり四時には四時の汽車が出る

4、青空のいよいよ青し片思ひ  
時実 新子

5、恋人の膝は檸檬のまるさかな  
麻生 路郎

6、第九唄うグループにいる好きな人  
橘高 薫風

磯野いさむ

恋愛が薬になるか毒になるかは、その人の人の人生経験が教えてくれることであろうが、さわつてみたいことであることには異論がないようである。

「役人の子はにぎにぎを能覧」という句は有名な句だが、『柳多留』初篇から削除された句である。いったんは文字化されて世間に出たが、「お上」によって毒物扱いになったわけで、政治権力への批判・諷刺は取り締まりの対象になったのである。岩波文庫の『柳多留名句選』（山澤英雄選）には、この句の代わりではあるまいが、「役人の骨っぽいのは猪牙に乗せ」が入って、快速船に乗せて遊里へ送るという賄賂の方法があったことがわかる。

実は、アレツトと思うぐらゐの政治権力への批判・諷刺の句を活性化されたものとして読むことは少ないのである。將軍や大名が江戸の川柳の材料にならなかつたのではなく、文



字として残すことが押さえられたか、自肅したのではないかと私は考えている。江戸期以前の天皇や公家や高名な武士はいくつも材料にされているが、忠臣蔵に関する川柳も多いのだが、やはり「お上」の圧力は厳しかったと言わなければならない。

恋愛の句における刺激は、先にあげた現代の句では江戸の川柳にくらべればずいぶん洗練されたものになったが、政治や社会に対する発言は、特に戦後になって鮮明なものになったと言える。

近代の川柳の出発点で重要な役割を果たした人に井上剣花坊がある。いくつか句をあげてみるが、念のために言えば、井上剣花坊は「人間としては上（かみ）御一人を除くの外は、決して貴賤の差別はない、という簡単な主義」（坂本幸四郎著『井上剣花坊・鶴彬』リポポート刊）を、平民主義・自由主義と述べた人である。

1、藤膳の主は草むす屍なり（日露戦争）  
2、国難に先立ち生活難がくる

3、飢えたらばぬすめと神よなせ言わぬ（大正初期）  
（昭和初期）

井上剣花坊は昭和九年（一九三四）に六十

五歳で死んだが、長州日報の主筆時代に薩長藩閥政府を攻撃して投獄されたこともある。紹介した句は三句だが、文字化されて残っている江戸の川柳には「毒」があると見えよう。

『蟹工船』の小林多喜二とよく対比される川柳作家に鶴彬がある。昭和十三年（一九三八）に二十九歳で特高犯としていわば獄死した。井上剣花坊とは四十ほど年齢差があり師弟関係にあったと言えるかどうか、私にはよくわからない。しかし、近代の川柳の中でも際立った名句とされている「国境を知らぬ草の実こほれ合い」を遺した井上剣花坊未亡人信子を助けて柳誌の発行を手伝ったとされている。

1、泥棒を選べと推せん状がくる（昭和10年）  
2、修身にない孝行で淫売婦（昭和11年）  
3、タマ除けを産めよ殖やせよ勲章をやらう（昭和12年）

この三句、戦後生まれの人には解説が必要になったようである。

『現代川柳必携』から、政治の句を拾ってみる。

1、一票のばばうちようを研いでおく 矢須岡 信

2、議事堂に国民でない議員たち

3、宰相の帽子は鳩も鷹も出る 野沢 省悟

4、政治家を信じた私同罪か 田口 麦彦

5、選挙カーことばはあるが実がない 武藤 瑞こ  
岩井 三窓

これらの句が毒物として取り扱われる心配はないが、それは戦後だからである。

川柳は日本独特の文芸の一つだが、一億三千万人カケル〇〇〇倍の思想や感情が材料になる。色恋の句、政治や社会の風潮に対する批判や諷刺の句もその重要な部分である。幅広く読む力を更につけたいものである。

「松浦文連報」から転載

### 川柳塔のぞみ6月句会

日時 6月22日（火）午後1時

場所 人形町区民館

宿題 うきうき・大字結び可・薫る（各2句）  
自由吟（1句）

久席投句6月15日まで（80円切手3枚）

投句・連絡先 〒190 八王子市散田町2-31-3

播本充子（0426-65-3172）

# 秀句鑑賞

同人吟 八木千代

— 5月号から

春も爛漫というより爛熟の花々の間から、

柔らかい若葉のうす緑も、常緑樹の冬を越した艶のある濃い緑。「美しいなア」と晴れても降っても、思わず大きな声が出ます。

恥ずかしがる事もないのに、どきまぎして慌てて深呼吸などして、誤魔化すという朝が続いています。

加齢につれて句会に出ることも少なくなりはしましたが、螺旋階段を上ってゆくように、細い足場ながら視界は僅かずつ広くなるとの感触があります。足元を見失わないように、遠くの山々を眺めたりはしても、昨日の景色に酔いすぎると、重心が傾いてたちまち転落する事になります。川柳さんの思召しのままに無理はしないで、ゆっくり踏みしめて思う日々です。何しろ窮めても終わりのない心の階段ですから。

## 留守電に春の息吹を二十秒

夏目一粹

ルス電と書いた方が、春の息吹の初々しい語感にふさわしいかも知れませんね。けれど

最後の二十秒の設定に迫力があります。

ルス電に吹き込むのは難しく、私など軽く咳払いをしたり、妙に改まるのですが、この息吹の方は自然体で柔らかく、ごく短い間に美しい春を届けてくれました。どきっとするほど印象的な二十秒です。

## 拾い主居ぬ人生の落としもの

谷口次男

この歳になるまでに、どれだけの物を失いまた見捨てて来たことか。

もしやもしやと、落としものは待ち続け、発信をしても、落し主は移り気で非情でそれに替わるものを求めてしまえば、簡単に忘れまます。やがて落とし物の方も自嘲のまま風になってゆくのです。

## 前菜で始まる食の物語

川本 晔

どんなストーリーでも、プロローグがありますね。どんな小さな会を持つても主催者の前置きの挨拶があります。自分の家の普通の夕食にさえ、おつまみのひとつひとつの彩り

旬の香り、どれも愉しい食卓の前口上です。食という大切なものの奥深さ、食材の歴史にまで及んで、人も語らいながら味わいながら物語は始まってゆきます。

## 生きざまは奈落の果ての阿弥陀くじ

一戸ツネ

生きざまはそのまま死にざまとなるのだと考えている私ですが、この阿弥陀くじの思想にも、ぐらつと傾きました。誰だって一度や二度は、これが奈落というものかと落ち込むこともあります。その果てに手にする阿弥陀籤の指差す運命のようなものを、まずは受け入れその場その時にいっしょけんめいに考え、なるべくベターな道を選んだら、それはそれなりに、まずまずの生きざまに結びつくかと思えてきました。

## 手の平の豆腐に春がふいに来る

牧 淵 富喜子

目立たない小さな春、けれど今、私ひとりだけに訪れて、手の平から全身に電波の走るほどの春、手にふれた冷たい豆腐の崩れも、右手に持った包丁の柄のかすかな震えさえも、自分一人の春の感触としてはにかみながら、その戦慄を抑え、ここまでで穏やかな静かな姿に仕立てられました。突然の春のノックが地味な句だけに却って深く響きます。

分け隔てない天罰が恐ろしい

大谷 幸次郎

これはまた男性ならでは、切れ味のよい名刀の太刀風に煽られた気分です。天はあらゆる人間に平等に時間を与えて、その大切な機会を生かすのも殺してしまうのもまた人間の心がけだと、今は亡き鬼遊さんが本社句会のあとに話してくださいました。

ところが天罰にも分け隔てがないとは驚きました。そうかも知れません。そうだろうと思います。心当たりもあります。私にしてもどんな事でも手を抜けば、たちまち嫉妬が押し寄せます。「罰が当たったのだ」と思う事がしょっちゅうですもの。恐ろしいけれど我儘なわたくし、少々の不善に、相応の罰を頂きながら暮すことになりました。

風化した時間と馬が合っている

牛尾 緑 良

あの頃は、あの時代は、と懐かしくて涙が出てきたら止まらないのです。それだけ歳を寄せたのでしょうか。戻れないことははっきり判っているのです。風化した月日は美しく自分の中でも消化してるのに、光は消えてはいません。溺れることなどは無いのですが、一生のうちでびつたりと周波数が合って快い時間だと言っただけは確かです。

デジタルに鶏のいのちが処理される

井上 森生

鶏インフルエンザの句は、他にもたくさんありました。それなのに、いちばん哀れだと心に沁みしたのはこのデジタルな作品でした。デジタル、処理、きわめて冷静に書いてある十七音字の奥には、會長夫妻の死への心情も思いやられて、埴輪一つない鶏たちの無念は盛り上がった塚にも残ることでしょう。

せんならんせんならんとてせぬ掃除

安藤 寿美子

ムフフフフ・アハハ・ハハハハどうも今日の私の葛藤を覗かれたみたい。だって、ハウスキーパーにも得手、不得手の分野があります。台所に立つ時間は割りと長い私。それに追剥ぎのように肌着もシャツも毎日に取り替えて洗濯機に、セーターやシルク類は手洗いと、まあ、干し上げたときの快さは、まるで難事業を達成した時の爽快感、つまり炊事と洗濯は好きな家事なのです。掃除機は重くて拭き掃除はしんどい。やつと我が身の生活範囲、玄関と庭先や寝室に浴室、仏間とそれだけを、罪悪感に責め立てられながらの「せんならんせんならん」自分を追いつめて辛うじて済みますです。寿美子さんの作品は大共感。気散しになりました。

人の世の外にも何か起つてる

吉田 あずき

きつと何か思いもかけぬ出来事が起こっているだろうと、誰もがうすうす感じていると気付いているのでしょうか、口に出せば怖いのです。とりあえず我が身、我が家、わが国世界の事も幾分か案じながら、心の眼や耳に蓋をして、生きていくこの世の人たちです。

こんな大きな内容を書いているのには下五の結びが甘いような気がします。私なら「起こっている」と書きたいのですが。

のぞみ号試行錯誤を許されよ

播本 充子

希望と抱負を抱きかかえて、産声を上げた「川柳塔のぞみ」横浜の青葉が志半ばで消えましたけれど、健気にも「のぞみ号」が発車してくれました。各社各流派ひしめいている天下の首都、東京にです。試行錯誤どころか大ゆれに揺れても不思議はないのです。北に「川柳塔みちのく」がすでに大柳社の風格で全国に認められています。苦勞に苦勞を重ね今の位置を確立されたわけです。試行錯誤がたくさんなほど、中身が充実してきます。

情熱をエンジンに運行ないますよう。

一気に同人吟を読みました。川柳塔の力とぶつかった感じです。熱くなりました。

# 夜光虫

高瀬霜石

気がつくくと、髪がめつきり薄くなっている。

あの毛やこの毛にも白髪が増えた。でも何故か髪だけは薄くならないので、やむなく毎朝髭を剃る。週末になると顔中がヒリヒリしてくるのが、髭の濃い者のつらいところだ。

そこで不思議に思って髭に聞いたら「そりやあそうだ。俺はアイツ（髭）より一回り以上若いもの」と言ったそうである。

エツ？ 意味がわからないですか？ つまりですね。髭は赤ん坊の時から生えているが、髭はそれから十数年後によくやくこの世に現われる。だからそれ分若いよつていう、どこかの国の他愛のない笑い話。

県内各地で開催される川柳大会を横目に見ながら、不精髭で映画館の暗闇に溶け込む日曜日。これが僕の幸福なひととき。

今年の冬、「解夏（げげ）」という映画を観た。視力を徐々に失っていく病に冒された若

者と、彼を笑顔で支えようとする恋人。その二人を静かに見守る母親。しつとりと落ち着いた良質の映画であった。でも残念ながら、観客の入りはイマイチ。

午後は一転、売れっ子柴咲コウ主演の「着信アリ」というホラー映画へ。こっちは「解夏」より大きい劇場にもかかわらずほぼ満席。客のほとんどは女子中高生。恐怖の入り口になるのが、誰もが持っている携帯電話からさあ大変。劇場いっぱい津軽乙女（？）の悲鳴がこだましたのであった。

この2本を観て、思った。これが昔のように2本立てだったらなあ。中高生の本命は勿論「着信アリ」。でも2本立てだからついでに「解夏」も観るでしょ。意外や意外、添え物の方がよかった。わたし食わず嫌いだつたなあ、なんてことにもなる。

このことを家人に言ったら「そうそう、そういうことはいつばあった」と続々思い出す。例えば、「夜霧のしのび逢い」（当時、テーマ曲が大ヒットした）が本命だったのが、併映の「草原の輝き」（主演の今は亡きナタリー・ウッドの可愛かったこと。'61アカデミー脚本賞。永遠に不滅の青春映画ですな）に大感激したという。

「ジョニーは何処へ」（当時大人気だった

フランスの歌手シルビー・バルタンの旦那で、こちらも歌手のジョニー・アディ主演の、今でいうアイドル映画を観に行ったら、併映の「西部戦線異常なし」（なせ'30アカデミー作品賞、監督賞です。名画中の名画だもの）に圧倒されて、ジョニーは本当にどこかへすつ飛んじやったそう。これみんな、彼女が中高生の頃観た映画。

昔の2本立てスタイルには思いもかけない「出会い」があったということである。牛井、ハンバーガー一辺倒の食事が身体にいいわけがないと同様、多感な頃にこそ様々なジャンルの映画や本を味わって欲しいと、切に思う。十数年前、思のある高校の先輩にだまされて川柳の句会に拉致された時は、正直「運の尽き」と思ったものだった。ところが、ツキはツキでも実は「運の付き始め」であった。「穿ちの眼」との出会いである。泣き虫、弱虫、臆病虫の三拍子揃った僕が、この眼を授かって以来、人間観察虫にじわじわ変身した（正しくは変態か）からだ。

この虫は最近また進化（？）して、行動半径が広がった。大阪あたりまで飛んで行くこともたまにある。十月にも非行、オット間違ひ、飛行予定である。そうそう、飛行と言っても、夜行列車の旅ですね。再見。

一、応募受付期間 平成十六年四月一日(木)～六月三十日(水)(当日消印有効)  
二、応募規定

(1) 作品 一人各題二句詠(未発表作品に限る)

(2) 応募料 一人につき一、〇〇〇円(但し、海外投稿者及び小・中・高校生は無料とします。)

(3) 応募方法 福岡県実行委員会作成の「募集要項」をご覧の上、所定の応募用紙を使用してご応募ください。

(4) 応募先 〒832-8601 福岡県柳川市大字本町八七一 第19回国民文化祭柳川市実行委員会事務局

三、宿題・選者(事前投句)

一般 選者

蟹||竹本瓢太郎(東京) 冒険||長谷川冬樹(新潟) 帰る||近江あきら(東京)

舟||森中恵美子(大阪)

(事前投句) ジュニア 選者

蟹||北村 泰章(高知) 冒険||津田 暹(千葉) 帰る||西出 楓楽(大阪)

(当日投句) 選者

白||間瀬田紋章(宮崎) 揺れる||大西 泰世(兵庫) 棘||新家 完司(鳥取)

第二次選者

岸本 吟一(東京) 鷹野 青鳥(福岡) 吉岡 龍城(熊本) 今川 乱魚(千葉) 斎藤 大雄(北海道)

四、賞(予定) 文部科学大臣奨励賞・国民文化祭実行委員会会長賞・福岡県知事賞・第19回国民文化祭福岡県実行委員会会長賞

福岡県教育委員会賞・柳川市長賞・第19回国民文化祭柳川市実行委員会会長賞・柳川市教育委員会賞・(社)全日本川柳協会会長賞・福岡県川柳協会賞

五、発表会場 川柳大会(入賞発表、表彰式、当日句、選評)  
平成十六年十一月十三日(土) 10時30分～15時30分 柳川市民会館

合同大会(上位賞の表彰式、記念講演会)  
平成十六年十一月十四日(日) 10時00分～12時10分 大宰府市中央公民館

六、問い合わせ先及び募集要項請求先  
入選作品は作品集として刊行し、応募者全員(小・中・高校生)の部は入賞者に無料で配布します。

第19回国民文化祭柳川市実行委員会事務局 〒832-8601 福岡県柳川市大字本町八七一

TEL 〇九四四一七三一八一一 FAX 〇九四四一七四一五五四五

七、主催者 文化庁・福岡県・福岡県教育委員会・柳川市・柳川市教育委員会・(社)全日本川柳協会・福岡県川柳協会

第19回国民文化祭福岡県実行委員会・第19回国民文化祭柳川市実行委員会

# 葉忌 本社 五月句会

五月七日(金) 午後五時半  
アウイーナ 大阪

ゴールデンウィークも終った五月のこちよい風が吹く七日、葉忌本社句会は百十五名の参加を得てにぎやかに開催された。

はじめに四月に亡くなった同人の梅田宣司氏の冥福を祈り黙祷が捧げられた。

お話は板尾岳人理事長、合同句集の参加者が千人近くあつたとまずうれしいお話。

ユーモア俳句 朝日新聞俳句欄より  
四月馬鹿妻をほめたる微罪かな  
わつと出てわつとなくなる桜餅  
ほろほろになりし辞典や春炬燵

ユーモア川柳 大西文次句集より  
素うどんを食べて黙って金を置く  
神さまに皺のことまで頼み込む  
浮氣した男ひとりで飯を食う

プリントした句を説明しながら、明るいユーモアのある句を作ろうと結んだ。

初出席は小谷集一さん(大阪市)を迎える。

月間賞は黒田能子さん(芦屋市)に輝く。

(司会)一玄也 (記名)月子・真理子  
(受付)弥生・セツ子 (清記)義

## 席題「温泉」 吉岡

## 修選

湯けむりで優しい父を思いだす  
美人湯の里で生まれたのは内緒  
温泉で延びた命と軽い足  
悲願です温泉つきの都市マンション  
温泉ならどこでもよいと言う男  
湯の華よ湯垢だなんて呼ばないで  
温泉の下駄カラコロと風を切る  
妻と来るに湯の旅はおとなしい  
音痴にも効く温泉はならしい  
露天からさこえる下手な浪花節  
ふやけても皺がのびたと自己満足  
温泉へ溶かして流す遠い罪  
温泉でなければならぬ日本人  
美人湯においておいでと誘われる  
足湯なら一緒でよいと妻は言う  
温泉のタマゴ安全ですとい  
美人湯で美人になれずすみません  
リストラの首が浮いてる露天風呂  
湯けむりの向こうぼんやり白い肌  
百八の罪を流しに来た温泉  
出し殻になるほど浸かる湯治の湯  
旅三日温泉疲れして帰り  
美人湯に浸った妻が出てこない  
流し合う背でありがとうフルムーン  
妻でない人で行きたい温泉地  
夢千代に逢える気する温泉郷  
声だけが混浴でした露天風呂

久美子  
かすみ  
幸生  
倫子  
保州  
淳司  
東吉  
重人  
求芽  
天笑  
千恵子  
寿子  
保州  
アキ  
弘風  
一步  
朝子  
雅文  
利昭  
弥生  
洋子  
昭子  
富美子  
直樹  
シマ子  
俣士  
尚士

露天風呂小さな極楽だと思つ  
心まで融けてくつろぐ露天風呂  
ボスターの女と連う露天風呂  
新婚で来た湯の宿に今ひとり  
温泉につかる一つ覚えの唄が出る

洋子  
遠野  
たず子  
度

温泉へ来ててもテレビを見る奴  
混浴の露天は化粧して入り  
温泉の隅で余興の猛精古  
温泉が湧いてるはずよく揺れる  
極楽の入口だろう露天風呂

千莞子  
遠野  
則彦  
昌紀  
千里

ばあさんも子宝の湯でのぼせてる  
効能は浮気封じと書いてある  
壁越しに聞こえる妻のいい湯だな  
温泉に来てまで妻と差向い

耕治  
昌紀  
則彦

兼題「濃い」  
年金のはなしに濃霧注意報  
聴講の中身の濃さに満たされる  
濃いペールかけて本心覗かせぬ  
妻の彩ばかり濃くなり黄昏れる  
もつと濃い色になりたい僕の影  
新茶濃く入れて五月の風の中  
お化粧が濃いすぎないか糖衣粧  
濃淡の墨絵見事な筆さばき

鹿太選  
螢  
照子  
房子  
希久子  
洋子  
かりん  
保州  
千莞子

濃く引いた眉毛が宣戦布告する

濃い森へ腹一杯の葉緑素

珈琲館二人の醸す濃い時間

忍一字濃い墨跡が父らしい

マルクスを濃い血で追った日の若さ

一言に重みがあった濃い眉毛

濃いルージユ引いて女の灯をともす

濃いお茶で妻と明日を語り合う

濃い味が好きで脅える成人病

もう少し日の丸の赤濃く描こう

命名へ幸せあれと濃ゆく書く

誘われる予感濃い目に紅をひく

東京で我が家のうどん懐かしむ

髭の濃い男の情を信じきる

国許に濃い人情を置き忘れ

ジェラシーをかくす女の厚化粧

濃い化粧落しビエロの背な淋し

濃い眉に意志の強さをのぞかせる

喪が明けてすこし濃い目の紅を引く

誕生日少し濃い目にルージユ塗る

純情の僕を惑わす濃いルージユ

血液の濃さが採めさす遺産分け

血の濃さが重荷になってからくれる

詰め寄って聞いた中身の濃い話

佳 緑濃い森に童話が落ちている

濃いお茶を入れてあなたを寝かせない

自信ある日には濃い目の赤を着る

濃厚なりっぱサービスから喜劇

昭

隆盛

富美子

一歩

隆盛

光久

和香

則彦

陸一

弘一

千里

正雄

昌紀

朱夏

雅明

俣子

ひさ乃

能子

たず子

弘一

東吉

たもつ

美代子

美籠

洞庵

鐘造

美代子

修

肩さするひととき母と濃い時間

人 還暦を濃い目の赤で誇張する

地 血縁の濃さが人事の邪魔をする

天 子育てという満ち足りた濃い時間

濃い味が好きで気になる血糖値

軸

兼題「噂」

気まぐれな風に噂が乗りたがる

一滴の噂へ栓をする勇氣

故里の噂なつかし雨やどり

ハルウララ噂の種に困らない

無責任な噂の花粉飛び回る

噂立つ私も捨てたものじゃない

わたくしと浮名流してみませんか

身におぼえないのに噂から噂

よし悪いも噂に乗れば花が咲く

こいしにも恋の噂をひとしずく

味付けをされた噂が飛び回り

七十五日過ぎて噂は風になる

忘れたい人の噂を聞かされる

よく喋る女は噂かき回す

あれこれと噂されてる頃が華

大地震もテロも噂ですまされぬ

噂より先手を打ったウエディング

ダン吉

一風

つづや

楓

吉川

美善

篤子

きりり

たもつ

典子

光久

水昇

つづや

弥生

高栄

希久子

民

とし子

洋

昭

倫子

保州

千尋子

飛び散った噂くしゃみが止まらない

噂話好きな女に踊らされ

噂にはすぐ乗りやすい春の耳

根も葉もない噂が恋のプロローグ

噂話は補聴器外して仲間入り

タイムイズマネー噂がよく弾む

顔を見た途端にビタリ口つぐむ

噂なら大きい方がおもしろい

気まぐれな噂大きくよう育つ

涸れ井戸の深さ噂になっている

補聴器が余計な噂聞いて病む

遮断機が上がると消えていた噂

はくよりもはくを知ってるその噂

噂にのぼるうちが華ですカキツバタ

佳 重箱の隅をつついてる噂

蛇口から漏れる噂はすぐ走る

公園デビュー噂はなしの仲間入り

くしゃみ一つ風邪のせいではないらしい

消垂の中の噂がくすぶりぬ

人 花散って風の噂も遠ざかり

地 華やかな真紅のバラは噂好き

天 流れ星いずれ噂も消えてゆく

軸 聞き捨てに出来ぬ噂へ身構える

直樹

利昭

鹿太

淳司

弘一

雅文

尚士

いわゑ

一風

美代子

はじめ

朱夏

九好

俣子

朱夏

一風

能子

楓

たず子

たず子

たず子

美籠

美籠

いわゑ

いわゑ



兼題「傾く」

宮崎シマ子選

心かたむく口下手からのプロポーズ  
 律しても心傾く一人の夜  
 病窓の月が傾き峠越す  
 ふいに傾いたわたしの水溜り  
 傾いた家計に妻の時間給  
 陽が傾くと電話かけた人がいる  
 順調に老いて傾くものばかり  
 傾いた店を若さの子に賭ける  
 傾いてくれそうにない高い鼻  
 浮き浮きと悪に傾く春の宵  
 年金を寄つてたかつて傾ける  
 おほる月貴方に傾斜する微熱  
 傾いていないか見直すピカソの絵  
 ちよつとした傾斜も重い車椅子  
 傾いているけど住んでくれるボチ  
 傾きがすこし気になる老師の背  
 優しさにコロリあなたに急傾斜  
 面白い男と傾いて暮らす  
 白いバラ傾くころ朱に染まる  
 歴史きざんで傾き出した過疎の家  
 年金が傾く船に乗っている  
 跡継ぎが街に流れ屋根かしぐ  
 傾けた耳母さんは背で聞く  
 咲き切つて牡丹傾く午後三時  
 傾きから目覚め女を強くする  
 傾いても平和が好きなヤジロペエ  
 耳傾け母の話を聞いてあげ

満津子 照子 寿美 睦子 光久 利昭 一洋 朱夏 鹿太 弘一 朝子 見清 幸生 美籠 義 かりん ダン吉 アキ ダン吉 かすみ 弥生 セツ子 たもつ

傾いているとも知らず鬼瓦  
 傾きを変えると花は詩い出す  
 プライドが少し傾く更年期  
 傾きそうな心を庇う胸がある  
 いつときの傾きだろう反抗期

朱夏 孝一 鹿太 寿子 能子

少子化で国傾きそうな不安  
 ピサの斜塔まつすく空を見上げたい  
 訥弁に耳も心も傾ける  
 傾けた耳が嫌つている噂  
 心の底から好き傾いてなぜ悪い  
 傾いて一切答ええない夕陽

深雪 倅子 千莞子 ひさ乃 寿子 雅文

傾かぬよう釘をボンボン打つてある  
 傾いてなおも昂ぶる樹のいのち  
 傾いてなおも昂ぶる樹のいのち  
 故郷の廃家たてなおすべく野に掃る

扶美代 瑠美子

兼題「仕事」

八十田洞庵選

好きな仕事か君を待つてる訳じゃない  
 匠技仕事に妥協の文字はない  
 仕事着にまだ老けるなと叱られる  
 天職を誇る作業着高く十す  
 公園のベンチに座るのが仕事  
 店頭で絶叫してる招き猫  
 眼鏡かけ替えて求人欄を見る

満津子 寿美 昭 楓 朋月 遠野 たず子

リストラの風仕事人間遊ばせる  
 家事も仕事と認めてくれるいい夫  
 消防のホース一筋叙動受け  
 胃薬とコンビで苦情処理係  
 恩給があつて仕事の好き嫌い  
 出世なしリストラもなし鎌を振る  
 割り切つて食べるためにとする仕事  
 妻や子に見せぬ仕事の顔がある  
 仕事着の汚れた跡にある誇り  
 堂々と言えぬ仕事で乗るベンツ  
 職人の列に並んだ無表情  
 バソコンが人間さまと仕事する  
 屋台骨支えた母の時間給  
 エプロンが一番似合う妻がいる  
 どん底へ落ちて天職手にいれる  
 みなさんのお休みの日はボク仕事  
 母さんは洗濯好きと思つてる  
 もう少し仕事のしたい古時計  
 骨を折る仕事か嫌で自滅する  
 納得のいかぬ仕事へ重い靴  
 仕事着に父の意気地が沁みている  
 夫よりよく働いて無報酬  
 もうやめやぐいとネクタイむしり取る  
 跡継ぎを育てた母の背が丸い

和香 弘一 隆盛 富美子 はじめ 保州 たもつ 能子 光久 倅子 玄也 瑠美子 光久 美代子 扶美代 月子 かすみ 睦子 千里 富美子 則彦 耕治 睦子 天笑 ますみ 天笑 鹿太



新しい土地だ栄転だと思つ

利昭

捨て切れぬ思ひの亡父の道具箱

ひさ乃

人

たんたんと仕事続けてコロリ逝く

深雪

地

その昔拾つた部下に拾われる

直樹

天

蟻の列無駄話などしてない

直樹

軸

兼題「座る」

河内 天笑選

座布団をひよいと跨いでいく淑女

文

コンビニの前に青春座り込む

尚士

案内に食事は椅子と書き添える

見清

母さんが座ってるから安心だ

義

座つても立つてもとまらぬ憤り

とし子

譲られた席嬉しさと侘しさと

寿美

カラオケのソファー立つたり座つたり

水昇

胸底に居座る憎い人がいる

寿美

付添いも一緒に席を譲られる

恵子

どつかりと座るおいとにある年季

朝子

もう娘座つてくれぬパパの膝

利昭

座るのも立つのも気合よつこらしょ

月子

生きていてすまななさそうに老母座る

英子

支持率に胡座かいてるライオン丸

真理子

座るなりうちお湯割りというお方

柳弘

押しつけてまで座ろうとするヒツブ

耕治

前列に座つて巻き返しをはかる

求芽

座らずにご覧下さい家具売場  
焼香に正座の足が動かない  
譲られて座つた席の温かさ

弘一  
遠野

ばあちゃんに花びら御飯真座の上  
おでん屋に時事放談の指定席

舞夢

長幼の順わきまえて喪に座る

日出子

警察の許しも得ないジベタリアン

直樹

ばば様が座つたままで指図する

重人

団子鼻家のシンボル鎮座する

則彦

この鼻が鎮座ますから顔になる

公誠

み仏に朝の正座の南無阿弥陀

直樹

御開きの後も居座る飲んだくれ

かりん

座布団を二つに折つて足庇う

玄也

正座した妻にドキツとしてしまう

和香

居座っているのは妻の低気圧

扶美代

佳

瑠美子

幸せにすると正座で言うてくれ

正雄

足の甲首をあげ茶室這つて出る

れんげ

緊張がとれてへなへな座りこみ

かりん

正座からあくぐらになつて出る本音

一歩

末席に座り空気を読んでいる

朱夏

人

遠野

正座して妻の話を聞く深夜

遠野

散髪に座ると空っぽになれる

瑠美子

地

瑠美子

天

瑠美子

どつしりと座つてくれる人を待つ

黒田能子

軸

黒田能子

うわばみに狭まれている花の宴

黒田能子

第九回全日本川柳誌上大会

(太字は本社同人)

平成柳多留賞

山口 長藤 敏子

留守電が嬉しい知らせ繰り返す

川柳大賞

鳥取 岸本 宏章

屋根という大きな傘を子に渡す

NHK会長賞

和歌山 大城 好男

月が出て屋根に童話が満ちてくる

全日本川柳協会会長賞

山形 手塚 白峰

輪に群れるみんな仲間てみな他人

全日本川柳誌上大会賞

和歌山 川上 大輪

ポケットの中で転がす今日のギャラ

埼玉 岡部 美雄

ふるさとの風だ素顔で向き合える

石川 高塚 夏生

無理してる中身に母へ手を合わす

兵庫 安部 美葉

草原に大の字こころ留守にして

愛媛 山本 毅

ノীগヤラのバントマイムに悔いは無い

江原 秀夫

(秀句)(本社同人のみ)

—水煙抄

秀句鑑賞

—5月号から

榎原公子

水煙抄七九二句の中から、私の味覚を通して胃の腑にじつくり落ち着いた句を、いいただきました。

素直にはなれず路傍の石を蹴る

福西茶子

解っているけどどうにもならない依怙地さに、腹を立てているのは自分自身。若い証拠。男気があると言われて走り出す

坂本兵八郎

思わず笑ってしまいました。単純と言われようが調子に乗ってこの時とばかり走り出す。あたふたとしている様子が浮んできます。

丸文字のやさしいメモで和を繋ぎ

吉田幸子

二世代、三世代が和を保つには、忍耐と寛容が必要。丸文字の可愛さはお孫さんのメモでしょうか。しかし、目の中の孫もだんだん大きくなって来るのです。

同じミスしても美人は許される

升成好

こうした句に出会うとむかついてくる。ブスの癖みというなかれ。失礼ながら男とはとかく年齢に関係なく鼻の下を伸ばしたが。風邪ひいてばかり裸のお付き合ひ

吉村久仁雄

親しき仲にも礼を失しない程度の衣服は纏っていたいもの。裸では風邪もひくでしょう。寸法が合わず形見をもてあます

若松雅枝

母娘ではあつても生きる姿勢は違っています。母の生き様へ自分を嵌めようとしても、どこかで無理があります。私は母の着物をスーツに仕立て直して着ています。

枯薄恋は根も葉もない噂

坂上淳司

森繁久弥の歌声が「おれは河原の…」と聞こえて来ました。枯薄と謙遜されていますがきつと素敵な方なのでしょう。みずみずしさや失うと噂も消えて行きます。といつても他人の目は怖いす。

見落とした合図少年戻らない

花岡順子

それまでには何度がシグナルはあつたはず。大人も未熟。戻らない少年を待つて深く

深く傷付いているのです。

畳替え余命逆算して決める

吉田弘子

余命という言葉が次第に身近になつてきた。あれもこれもと希望はまだまだ持つていけるが、「余命」という邪魔者が全てを否定してかかる。「あと十年なのにリフォームなんて勿体ない」と囁く。前進するのも難しいお年頃である。

つじつまが合うと疑問が湧いてくる

大坪天涯

辻褃の合わない話に夜も眠れない。情報を集め回つて話の筋が通つて見れば、またもや疑問の虜になる。

空缶にあたりちらしただけのこと

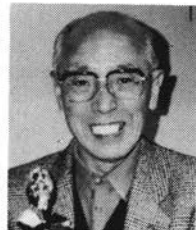
福岡博利

四十年以上連れ添つた夫婦にだつて毎日いさかいの種は尽きない。原因はつまらない事。あたり散らして一巻の終り。しかし足を拘わられてスッテンコロリなんてならないように。

欠点がないから欠けている若さ

喜田准一

用意万端 怠りない人は何となく年寄り臭いのが昔からの定評。神は二物を与えないと言つが、本人は若さに欠けていることに気がついていない。



好紳士

## 梅田 宣司さんを悼む

米田 恭 昌

四月十六日、出先に妻から宣司さんの訃報の連絡が入り驚かされた。ガンを患っておられる奥さんと脑梗塞の宣司さんは、夫々別の病院に入っておられたが、宣司さんの経過良好で、退院して奥さんと同じ病院に入られる予定だった。そのため大阪から息子さんも来られ、久しぶりに自宅に帰られた夜の事だったとか。

三年ほど前脑梗塞で倒れられて以来、奥さんも心労で倒れられ、二人夫々入院を繰り返されていたらしい。昨年末の電話では話し方も正常に近く、奥さんの身体を気遣っておられた。今年の賀状には久しぶりに自筆で伸び過ぎて天狗の鼻で掘る墓穴 宣司の一句が添えてあり、もう大丈夫だろうと思つていた矢先だった。

宣司さんは私より二年遅れて、昭和六十三年四月にNHKの薫風教室に入つて来られた。丁度教室は富雄の長弓寺へ吟行に出て

て、事務所聞いて遅れて現地へ来られた。そのとき口癖だったポツダム少尉そのままの大きな声で、自己紹介されたのが昨日のように思い出される。翠洋会には平成二年一月入会された。

初めてNHK教室から一泊旅行で鳥羽へ吟行に行った時、新しいカメラを提げたベレー帽姿の嬉しそうな宣司さんの姿が目には浮ぶ。以来吟行等の写真は全て宣司さんまかせて、私はビデオに専念出来た。

そんな宣司さんも、平成六年頃人生のエピソードを妻と同郷の九州で送りたいと伊丹から転宅、NHK教室は退会されたが、翠洋会はそのままで、ずっと投句されていた。新年会、吟行には時々九州から出て来られ、拙宅に泊り参加して下さった。翠洋会の互選ではいつも高得点をとっておられ、

片方の靴が昭和を脱ぎきれぬ  
の句で平成九年の各地柳壇賞を受賞された。

寒行の声凛然と闇を切り

玄関に親の袂が脱いである

在阪中から糖尿病も患っておられ、好きな酒も節制されていた。

五臓六腑持ちこたえなぞ喜寿近し

酒止めた俺に言い訳などはない

残念なことに翠洋会への投句も十二年九月から止まった。句報も読めず、作句などとも出来ぬ容態であったが、淋しいからと同人会費、翠洋会会費だけは奥さんを通じて送られてきていた。今回も亡くなられる少し前に、合同句集参加費まで納入されておられた。

いい飯がたけたぞ今日も生きている

癌告知今まで他人ごとだった

二月末に送らせて頂いた私の句集『五色豆』、三月発刊の翠洋会合同句集も、亡くなられる四、五日前に手にされた由。(ご夫妻入院のため局留めになっていたらしい)せめても生前に見て頂けた事が何よりであった。

潮満ちてくる結論を急がねば

風船のゆつくりしほむとは淋し

ベレー帽がよく似合い、いつも丁寧な言葉で話しておられた好紳士宣司さん、心からご冥福をお祈り致します。享年八十四歳

合 掌

ベレー帽カメラを肩に発つ黄泉路 恭 昌

# 冬心集

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

## ローズ川柳会

山崎

君子報

残業かビルの明りに娘を思う  
名騎手にあなたは勝ったハルウララ  
ケセラセラにこに朝の顔つくる  
朝ラッシユ生活戦士つめ込んで  
こだわりは一夜の夢と消えて朝  
夏の夜は星と話そう屋上で  
朝日いま隔たりなしに降り注ぐ  
授かった命に感謝する日の出  
ハルウララ浮世はうららとはいかぬ  
老舗の菓子屋ビルの谷間に和風建て  
肩の荷をおろしてからのだらしなさ  
遠く来て朝湯楽しむひとり旅

## 岸和田川柳会

長谷川呂万報

哲子 トミエ 孝一 美籠  
いね 武庫坊 年代 君子  
和 美 野 添 弘 子  
みつ江 丹 吉

露天風呂月の光を一人占め  
ペラペラの封書に潜む三行半  
電話でも足りるを封書彼らしい  
教え子へ封書で諭す愛の鞭  
長男へもしもの封書かき残す  
談合の果ての封書のうす笑い  
切手代不足の封書払わされ  
色褪せた封書に若い日のロマン  
日向ぼこ孫の守るお年寄り  
平和には耳をかさないブッシユさん  
巢立つ子へ母は平和をただ祈る  
阪神が勝てば平和なわが家族  
ひと時の平和授かる子の昼寝  
犬にまで手厚い介護する平和  
半歩ずつ譲り平和な老夫婦  
自衛隊平和の使者として参加  
靖国へ何と報告する派兵  
既成事実作り報告後直し  
報告は滅多にしない親離れ  
真実を知らせて医師も荷をおろす  
不都合なことは省いた報告書  
要領よくうまく浮かした報告書  
報告はよい先ず一杯と酒する  
そのうちに賄いもするロボが出る  
賄いがすつかり困る妻の留守

## 川柳塔みそくち

小西

さよ子 守 一 脩 仁 緑 みよ子 蛙 城 東 吉 甚 一 東 雲 英 雄 力 子 香 代 ゆり子 ゆい 基 呂 万 洋 珠 子 照 女 房 枝 鍊 太 路 一 穰 一 笑 司 狸 村

## 雄々報

峠道祈る地蔵に春の風  
努力したあとは女神の微笑待つ  
厄年へ祈願お守り身につける  
釈迦の掌に心ゆだねて今日祈る  
折鶴に息吹きをかけて祈願する  
千羽鶴祈りをこめて折りつづけ  
お祈りが通じたらしい事運ぶ  
祈りから朝が始まる今日も晴れ  
祈る訳聞けばベツトが病んでいる

## 高槻川柳サークルの花

田中千莞子報

公美枝 豊 枝 和 代 久 子 智 恵 子 弘 子 静 江 正 光 雄 々 求 芽 宵 草 庸 佑 あやめ 昭 重 人 スミ子 め 女 義 一 宏 章 高 栄 萬 的 泰 雄 尚 士 活 恵 照 子

国税の行方見ている風見鶏

言い寄られ地球も僕も裏返る

驕らない私でいた空の碧

わさび効きすぎて二階と下で寝る

うれしさをひろい集めて花見酒

うふふと笑えるうちは生きられる

風光る親友には春の切手貼る

割り切って行こう世の中こんなもの

無人駅ここから僕は風になる

振られて飲んだ八十路の酒は苦かった

スパイスを少しひかえて輪に入る

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

何処にでもペットボトルが捨ててある

旅帰りの灯りが温かい

今日は農明日は銃持つ屯田兵(北海道)

ボロクソに言っても最後は見て貰う

シナリオに無かった老母の紙オムツ

鍋釜を持たずに暮らす渡り鳥

人生も人それぞれ四季がある

タラの芽が足踏みをする戻り寒

速い子を思う心に添う祈り

貧しくも心豊かな日々過ごす

お四国を巡り極楽視野に置く

三世代輪ゴムのように丸く生き

顔色を賞めて見舞の人帰る

大陸の黄砂が舞って盆の松

何もかも笑いとはして福を待つ

茂

千莖子

比ろ志

美龍

晴美

秀夫

節子

光穂

武史

孝一

砂輝守

諷云児

初恵

文仙

あきら

輝夫

ひかり

吟笑

放任

八重子

勝

寿々女

賢

いさむ

治延

貞月

よしみ

聞き流す事も覚えた処世術

一皮を脱ぐたび竹の自己主張

川柳塔打吹

大森

公園の桜おいでとまねいてる

公園の陽だまりそとと咲くすみれ

公園の猿が目線に興奮し

児童公園に子供が寄りつかぬ

咲いたさい公園の姥さくら

使ってください公園はみな僕の庭

あの方に触られてから蝶になる

尻触り男一生棒に振る

柔肌に触り財布の紐ゆるむ

人も魚も指で触って確かめる

黒光りするほどさすり願をかけ

触られて一緒になって五十年

恋に破れギターかかえてほろほろ

ほろほろになつて浮気の幕下りる

ほろほろになるまで泣いて春を待つ

自信も言う本人がな自信

どの評価されてもこれが自信作

合格の自信あるのかよく食べる

自信ある首から下に感謝する

自信つきスピード出して捕まった

自信ある如く振舞う見栄っぱり

湯上がりになり栄養バック自信つけ

税は納めた自信を持ってバスに乗る

東大を落ちた理由が腑に落ちぬ

かおり

坊太郎

孝惠報

美知江

たけ代

楨元

玲坊

螢

完司

よしえ

清

博文

三津子

泰山

善江

友楽

美美子

幸子

玲子

勝見

京子

龍枝

克枝

富恵

紀美恵

和子

季芳

節子

同窓生全部見送る自信あり

あの世には自信ないからまだ死ぬ

肩書きがつけた自信と気付かない

堂々と自信あるから前になる

七光り自信過剰の座がゆらく

東大阪市川柳同好会

森下

口軽く喋り淋しさだけ残る

先は闇今日の足跡だけ残す

いつまでも手に残したい花を抱く

精一杯生きて残すものが無い

釣り糸の先オレオレの声がある

代議士を釣る札束が置いてある

釣り糸をたれて瞑想日向ぼこ

前後左右人の真似して人になる

前後左右人の真似して人になる

佳句地十選

(5月号から)

岡本花匠

前置きのうまい話にたまされる

裏切った方にもちゃんとある理由

スランプを抜け出した球がよく弾む

下駄の音昭和一けた生きている

原点は母の大きななぎりめし

ひこばえよ命の話しませんか

愛燦々につこり笑う金屏風

躍る気にさせて手をとる憎い人

人並みというが一番難しい

三界に居場所なくなる煙草好き

石花菜

重忠

芳光

セツ子

孝恵

愛論報

萬的

弥生

和子

美弥子

典呼

太郎

宏

シマ子

理村

春蘭

彩子

敏子

森子

楓菜

五菜庵

玲子

朋恵

井竿

ビー玉を透かすと少年の未来  
水族館ガラスを入れた海がある  
ビードロの鳥雪の日は炬が恋し  
ガラス窓コタツで見てるぼたん雪  
生きてゆくためにお猿の真似もする  
哲学があつて出来ぬ人の真似  
茶の手前師とそっくりを笑い合ふ  
折り返し点はまだまだ遠いとこ  
点線でつながる薄いえにしだな  
原点のわたしに戻す竹とんぼ

川柳大阪

高木

信詮報

降る雪に喜ぶ妻は歳なんぼ  
頼られて心に活気沸いてくる  
旧友に会う日の朝に眼科行き  
夕映えを何時も見られる僕の部屋  
どん尻でもゴールで映える玉の汗  
活気湧く恋はビタミンABC  
終るまで女ですもの紅を引く  
うっとしき理田女房のノ一天気  
口紅を替える理由を探してる  
春一つチョコレートより始まりし  
消毒を地球儀回してせにやならぬ  
成人式自覚が足りぬ新成人  
平凡な暮らしの幸が顔に出る  
魚屋の声に鯛が目をさます  
紅生姜井の上で待つている  
孫が来て冬の台風吹き荒れる  
上ばかり見てる落とし穴知らず

初太郎 雅文 三恵子 愛論 信治 幹生 緑 章久 湖風 あや子 隆司 一風 ひろゑ 利昭 ダン吉 朝子 タカ子 東吉 信子 春蘭 章久 兵庫 一步 重人 功 比呂志

うっとしい今日を忘れる仕舞風呂  
梅林に音痴ウグイス居てたのし  
アバウトな恋よ二人の二十五時  
平和への願い託して米を研ぐ  
混戦の脳ミソほくす散歩道  
スツピンはいや百歳紅の艶  
論敵と会釈かわして議場出る  
夕映えのあなたの笑顔美しい  
口紅に女いくさをしていきます  
老い二人想い出ちぐはく笑い声  
靴底が活気を持った朝の駅  
口紅の色も彼氏もよう変わる  
教育法痛さ辛さも悟らせよ

城北川柳会

神夏磯典子報

赤信号無視して送る母危険  
世の中を無駄なく生きるむずかしさ  
天災に馴れて生き抜く知恵が湧く  
充たされた今日を日記にしたためる  
天知る地知るなのに己を知らぬ奴  
充実のくらし邪魔する膝の骨  
この天気持つていきたい旅支度  
ぼろぼろのモラルで平和支えてる  
八十路きて充実の日々まれなこと  
明日何をするかちゃんと決めてある  
衰えも瘦せもみせない老母の愛  
瘦せるほど素敵な恋がしてみたい  
これ以上瘦せてなるかと母の愛  
悪友の話埋もれ火かきたてる

洛醉 柳弘 美花 柳昌 鉄心 本蔭樺 照月 笑風 喜楽 宏 まつお 信醉 美代子 久留美 喜美子 静枝 さとし あやめ はじめ 求芽 あい子 正 セツ子 政子 柳一 重人

昼寝する子の手の中につくしんぼ  
天と地のはざ間に生きて夢を追う  
あやふやな記憶は歳のせいにする  
リハビリに励んだききれいな手が増える  
文化社会きつとモラルがあるだろう  
ひと気なき赤信号が見るモラル  
六畳でわたし一人の天下取り  
充実感寂聴話の一時間  
責任者出てこいモラルひどすぎる  
天網の荒さ時効を見逃さず  
天地無用賞味期限の無い夫婦  
いつもの道歩いて同じこと思い  
繕った端から過去は瘦せていく  
砂漠いく日の丸的にされぬよう  
娘の便り梅のひとひら舞い落ちる

竹原川柳会

時広 一路報

恋一つガラス細工の中にある  
ステンドグラスをこし饒舌すぎないか  
吹きガラスを夢を形にのせる汗  
陽を浴びてああと泣きたす霜の窓  
ガラス張りの政治に死角多すぎる  
髭面の中でやさしい目が笑う  
日本にも定着ヒゲのハンバーグ  
髭たくわえた遺影が並ぶ老舗です  
ねこの髭なくてはならぬものらしい  
粹人と言われ自慢のひげを持ち  
昭和初期生まれで髭に憧れる

春蘭 集一 高栄 ひさ乃 昭野 遠野 志華子 倫子 修 順三 柳弘 とし子 千里 千歩 公一 蘭幸 静風 幸朽 貞子 房子 汎美 輝恵 孝枝 節夫 正宏

共白髪口髭までも友になる

誰だつけ髭もできたクラス会  
髭面で心がほっとするお人

入園入学嬉しい春を孫がくれ  
春色の風に吹かれてる私

桜咲き大きくなれと背中押す

鳩ある日しんどくなった平和主義

鳩の胸ダイエツトなど考えぬ

鳩ぼつばテロも戦も止めてほし

国境も戦争もない鳩の瞳よ

その昔ガンジーという鳩がいた

鳩千羽放てば平和呼べるかな

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

龍宮へゆく舵取りがむずかしい

胸に舵人には言えぬ波がある

参加する事に意義あり蝸牛

舵とりが長期不在の人となり

宝石に負けぬ笑顔にすくわれる

宝石箱いつかは持ってみたいもの

谷の水蒸うて伸びた藤の房

気兼ねなく参加のできる戦友会

老骨に生きる証の参加賞

肩書きを付けぬ名刺にある余韻

川柳塔唐津

久保 正剣報

若さ維持する居酒屋の書生論

早春の土筆わらびが野辺に待つ

長島さん自分をセコムしてますか

現代

厚子

慶子

千枝

史子

青居

節生

淑子

笑子

半覚

一路

トンネルで多読しながら腕いてる  
長生きをしないとと思う年金日

僕だつて好きで叩いた肩じやない

年金はお上の慈悲と拝む祖母

誘われて他流試合も腕磨く

留守番を千円札で請けた渠

錯覚の虹がボトルの中に浮く

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

老いてなお学ぶ気力で明日へ向く

好奇心持つて学んで夢むすぶ

タイガース出たマジックは一回〇

真つ直ぐに帰ればよいのに寄っている

桜さくら長いトンネル抜けました

窓の外マンシヨンの窓ばかり

そいでも形を待たぬ風あわれ

桜散る時涅槃の風がそつと舞う

墓山に登り亡母恋う春彼岸

雑様はないが少し驕つたらしらずし

曲り角ゆるんだひもを締め直す

薄咲く一期のひとり赤きスカート

花冷えへ叱つてくれる娘のかしこ

街中がころつと春になつていた

コーラ立ち呑み雨の匂いのする街へ

川柳ささやま

遠山 可住報

としよりのたわごと聞いてくれた風

かばうてくれた恩義へ咲いた寒牡丹

片身ずつ濡れて外湯へ傘一つ

勝 規

晴 翠

高 明

水 笑

虹 汀

四 郎

正 剣

東 園

幸 子

勝 巳

昭 三

紀 乃

千 恵

久 子

武 庫 坊

純

しづ子

寛 之

光 穂

年 代

芳 子

さあみんな降りて来いよ鍋の湯気

さわやかな靴音立てて新社員

夢誘うピラに招かれ降りる駅

春の風おちおち出来ぬ軍手出す

主役から降りて女を脱いだ春

爽やかに生きて命の灯をまもる

休日のおはようコールさわやかに

降りるのが恐い一歩に足すくむ

字余りをおちおち直す夜のしじま

心経をあげてさわやか朝の膳

おちおちも出来ぬ雑草追つてくる

昨夜より底冷えやはり霜降りる

留守番もおちおち出来ぬ電話口

おちおちと外も歩けぬ花粉症

おちおちとしては居られぬ今日句会

地震テロ卵おちおち生きられぬ

京都塔の会

都倉 求寿報

じつくりとわが歳思う日向ほこ

椅子の向き変えて余生を見直そう

娘の家に来て雛の間に通される

示談書に福相印が泣いてます

勝算はないが火中の栗拾う

知らぬ間に平均寿命越えていた

哀しくて螺旋階段かけ上がる

春風とドレミをハモる池の鯉

心よりほぐれる涙さらさらと

ワンランク落とすととれた肩のこり

ひと冬のしこりほぐれる花だより

美智子

文子

美紗子

靖子

とみ子

多美子

開子

かほる

つや子

八重子

富美

富美

富子

君代

朝子

可住

年代

武庫坊

春蘭

あやめ

諷云尼

正坊

篤子

ふりこ

英子

萬的

弘之



あの人ジョークがいつも場をほくす  
張りつめた空気をほくす花粉症  
花を買うほぐれるものが欲しいから  
振り向くといつものところにある笑顔  
酒たばこ禁止あつさり言う主治医  
禁断の木の実を食べているスリル  
医者からの禁止が解けたうまい酒  
待ちわびた春の訪れ職決まる  
故郷から珍客訛持ってくる  
訪れを待っているのは老いた母  
節々に痛み訪れ老いを知る  
渡り鳥ウイルス運ぶ訪問者  
北窓で春の訪れ待つ造花  
老斑が老いの訪れ告げはじめ  
断れぬ昔の恩義つけが来る  
定年まで保証のつかい棒がない  
年金で保証されてる余命表  
がんごさは保証済みです我が亭主  
そんなもの保証はできぬ人の口

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

満子 宏子 和友 葉子 庸佑 欣之 典子 ルイ子  
メ女 高栄 幸代 ますお 百合子 克治 久留美 啓子 鹿太 益子 求芽 利治 順子 泰女 輝子 朝子 大輪 寿子 あき子

小器用にジョークも混ぜてフライパン  
笑わせる心算のジョーク怒らせる  
葉桜の下に余生の椅子を置く  
帰って来いよ若手を待っている夕陽  
人生の節目節目にある桜  
見納めと毎年思う桜見る  
列島に住んでよかつた花便り  
日本人のDNAは桜好き  
ピカピカのランドセルにも散る桜  
百歳と一期一会の花の下  
老木となつて盛んになる桜  
神の手に絶る迷路の真ん中で  
老いて子に絶る構図は描かれず  
この歳になつても母にまだ絶り  
優しさに絶り再起を期すことに  
常識をズバツと斬つてくる若手  
若手なら昨日をすぐに棄てられる  
若手だと言つて甘えていませんか  
転々と職替え夢を追う若手  
若手には席を譲れと言つておく  
根気よく若手のやる気待つ社長  
農を救う若手へバイオ勇気付け

川柳塔鹿野みか月

土橋

校門は誰の笑顔も迎えない  
紛争もあつた校門は語り部  
校門にもたれ笏を引きよせる  
校門の朝は毎日新しい  
校門に見張りいるなど世の乱れ

克子 東吉 裕美 伶 紀久子 三男 保州 朱夏 稚代 和重 宏 さち子 富美子 三喜夫 ダン吉 夕胡 精子 准一 英子 正博 和香 和子 螢報 宣子 くに子 はお 房子

希望と涙一杯見てきた校門  
筆震う殺傷事件校門記  
白寿だね百寿だね手をつながれる  
ふるさとはいつも心にそつと住む  
颯爽とスカarf巻いて若返る  
学ぶことばかりで転びて若くなる  
団欒はいつも子供目の高さ  
日曜日畑へ家族ピクニック  
こわいから後ろ見ないで急ぐ足  
幸せな時を急行バスが待つ  
急いでも二十四時間はかりなり  
春まつり待たず桜が舞い散つた  
気の急かるところ遺伝子継いでいる  
おばあさん急いで判こ押すでない  
急ぐまい転けたら夢が続かない  
畑から走つたとなりに救急車  
お見舞に行く特急のおそいこと  
強風に花見を急ぐ群れの中  
いくら急いでも私には一馬力  
急ぐなよ今の温度が肌合う  
終盤か拳手も拍手も急かされる  
火の章の弱らぬうちと急いでいる  
仏には済まんが俺は刺身食う  
われ卒寿仏のそばに居るような  
彼岸からこいこいという仏たち

サークル檸檬

西出

溜息をついても女神微笑まぬ  
長所だと思ふ欠点かも知れぬ

彩子 公子 喜与志 武子 睦子 きみ子 弘子 茶子 八重 みどり 永子 菊乃 和子 節子 八重子 野草 かつ乃 久枝 みさ子 富久江 孔美子 諷人 実満 汲香 螢 扶美代



欠点のかたまりそれが魅力かも  
美しいばらにもあつたきついで  
I-Tの世へは譲れぬ知恵袋

欠点を愛がふんわり包み込む  
この世紀指す語は酸鼻かも知れぬ  
にこにこ笑い欠点閉じ込める

欠点が可愛い見えたりもあつた  
欠点を味方につけて切り開く  
平和維持 自分殺して生きていく

日々新たな今日も書きたい日記帳  
見つめると少しも進まない時計  
ロボットが川柳つくるかも知れぬ

西宮北口川柳会 黒田 能子報

肩の凝る席で祝詞の順を待ち  
相席の美人へ煙草我慢する  
実直でタフな夫に賭けている

賭けません鳶の子生めぬから  
助手席の妻に老後をさし図され  
人生の残りを賭ける笹の舟

逆ろうてちよつと拗ねてる目元好き  
好きですと金婚式に言うつもり  
好きな事無理せず過す有難さ

皆さまに好かれる犬と歩く日々  
幸せは友の輪の中好きな趣味  
ゆるやかな流れグミアはパリの空

線香の煙もゆるく七回忌  
ゆるやかに見せて着崩れせぬ浴衣  
ゆるやかな裾にひらひら春の風

房 子  
義 子  
あずき  
いわゑ  
棲 世  
楓 楽  
千 代  
光 久  
遠 野  
たもつ  
正 坊  
希 久子

ゆるやかにすぎている子の羨  
絆にも絞れば滲む礼智信  
気の効いたお辞書も言えぬ花鏡

鉛筆がひとり歩きをして困る  
奥の手をそつと忍ばす袖の下  
閉店に春の光がまはゆすぎ

宝石と見紛う花が畦に咲く  
お互いが受取人になる保険  
どういう事こんなところから

根の浅い運命線がまた変わる  
マジヤンを彼に教わり彼を越す  
来るこない花びら散らす春の雨

家族より和んでいます僕と犬  
空想が好きで時々雲に乗る  
花はいつ時ころやさしい人という

川柳ねやがわ 森

卒業式の涙はきつと虹の色  
合格発表春の音符になる親子  
初めての入れ歯が合わぬはひふへ

卒業のテーマソングに青春語  
卒業後消息知れぬ友になる  
卒業で騒ぎ成人式で荒れ

発表の前にみんなが知っている  
発表は差し控えます代理母  
孫九人あちこちせわし発表会

発表へマイカーで行く三世代  
参観日親を意識の手が上がる  
発表へ人の節目のあれやこれ

能 子  
比 志  
美 龍  
五 月  
江 美  
光 子  
歳 子  
哲 男  
美 代 子  
嘉 彦  
文  
た ず 子  
良 恵  
哲 子  
富 喜 子

発表は母にまかせる受験生  
青天井大阪城の傍に住む  
モナリザの笑みふりそそぐ天井画

ロボットに手を引かれてる散歩道  
ロボットが欠伸している不況風  
ロボットが喋り未来へ夢をくれ

命令を出す俺がロボットより偉い  
毎日が妻の操作で動くロボ  
ロボットの無心信じることにする

何でだろロボット犬に吠えられた  
ロボットになつて因果を背負わされ  
ロボットだと今ごろ気づくロダン像

手間掛けたくぎ煮をくれる友がいる  
花咲けば地酒も欲しい春の旅  
散る美学なんて桜は思わない

来年も来ようと話す花の下  
虐待へ親を選べぬ子が不憫  
古里に太い根がある履歴書に

川柳塔なら 坊農 柳弘報

桜餅一つでころり気が変わる  
酌む酒に男ころのあるドラマ  
桜まつり夜店まだかな高田川

再会の酌み交わす酒じゆずを呼ぶ  
同窓会ニククネームで酌み交わす  
ほどほどの酒酌むことが難しい

花見酒妻をどこか置き忘れ  
地酒酌む旅の出合いが始まるよ  
左遷地のなまり優しく酌む地酒

仁 清  
亜 成  
亜 也 子  
利 昭  
弘 風  
修  
日出子  
かすみ  
三 郎  
朝 子

博 泉  
九 好  
勇 太 朗  
ル イ 子  
栄 二  
一 風  
弘 一  
西 敷

積 子  
敏 子  
桜 竜  
カズ子  
ふりこ  
博 一  
春 雄  
春 蘭  
富 子

度 庸 佑  
一 炊  
忠 央  
さ ち 子  
た も つ  
と し 子  
美 代 子

人生の出船入船桜咲く  
 プロポーズ桜の下で言えました  
 誕生日やっぱり今日も独り酌む  
 人形になれずひと言姑元氣  
 微熱くらいで人形振りむかぬ  
 狂わねば咲けないものとするサクラ  
 竹人形の記憶に雪が降りしきる  
 哀しさは言わぬこけしの細い眉  
 風のままわたしを晒す風の宿  
 実らない恋をいだいて流し難  
 先取りの春の噂と酒を酌む  
 平凡に生きて今年も見る桜  
 花と酌む四季それぞれのうまい酒  
 奔放に生きて独酌という味方  
 人形を脱いだ女の自立心  
 しだれ桜ふわつと戻る亡母の顔  
 朝帰り冷たいメモが置いてある  
 酌み交わしやがて私が逃げてくる  
 出征の兄思い出す花万葉  
 被災地の三日はとでもながかった  
 人形を抱いた日もある虐待死

かわはら川柳会

上田

俊路報

太一 茂雄 弘風 絹子 冬葉 真理子 孝恵 理恵 一風 惠美子 洋子 良一 弥生 朝子 秋雄 國治 丹吉 和夫 道子 美千子

聡 かつ恵 余史子 泰良 雅子 登生

寒隊で心に春の風を呼ぶ  
 空間の絆を壊すテロリスト  
 空間を生かした間取り心地よい  
 割りこめぬ空間を持つ新所帯  
 心地よい空間作る思いやり  
 空間の深さに惑う竹とんぼ

三幸川柳教室

古久保和子報

少子化が未来の夢を打ち砕く  
 新生児未来を秘めた大欠伸  
 神様が鍵を握っている未来  
 どうしてもテロには渡せない未来  
 未来とはビックリ箱のようなもの  
 五線紙に未来の音符まだ未定  
 過去未来さて置き今日は種を蒔く  
 へこたれぬ僕の未来はつづら折り  
 座るならあなたの膝に座りたい  
 座席から歓声あがるハルウララ  
 縁側へ小さい春が来て座る  
 仁王様たまにお座り下さいな  
 正座して孫の釣書に目を通す  
 窓際に座るとコネが見えてくる  
 年金の明日へ座ってなどおれぬ  
 その椅子に座る資格を問うている  
 居座った腰痛友にしてあげる  
 座らせてシグナルを読む目の高さ  
 お喋りもポジションがある次女三女  
 輝いて座ったことがある四月  
 ハイウエーが抜けて素通りされる町

悦子 寿子 道子 好道 静子 俊路 義男 よし子 町子 桂香 靖子 三千子 朱夏 信子 一歩 登美代 さち子 清治 清水 准一 みね 純子 かずみ 次根 武

隧道をぬけて緑と対話する  
 成り行きで風と歩いた田舎道  
 大切に父母より長い道生きる  
 シルクロード果てで出会った仏たち  
 絡んだり絡まれたりの飲み仲間  
 価値観の同じ仲間へ許す  
 仲間から秀才一人浮いている  
 割り勘の仲間へ下戸を誘い込む  
 猫も杓子も仲間に入れて多数決

尼崎尾浜川柳会

田辺 鹿太郎

夫婦鳩パン屋の前を離れない  
 指輪など似合わぬ指に支えられ  
 気の迷い洗い流した花吹雪  
 気まぐれな雨に本気で腹を立て  
 お花見も孫のペースで疲れ果て  
 おシボリが愛をとりもつ喫茶店  
 心地よい春風ぬける白いシャツ  
 ここ此処とわざと手を振るエメラルド  
 薬指こよりで結びちぎる縁  
 ポツばかり私句会のハルウララ  
 汚れてる心法話で洗われる  
 川じゅうを花びらにして春はゆく  
 指輪キラリはずれ馬券が宙に舞う  
 うちの人精一杯の指輪くれ  
 母の手に指ぬき今も生きている  
 火の鳥を口説く指輪がよく光り  
 来年へ期待つないで桜散る

イセ 公子 幸 和子 保州 智三 起世子 嘉平 千秀 鹿太郎 その 秋子 全彦 江美 カズ子 よし子 美代子 信子 亀与子 まさ いサミ 義芳 昭三 孝一 正治 美龍

はたる川柳同好会

水野 黒兔報

南大阪川柳会(前月分) 吉川 寿美報

不況でも空は季節の色となる  
まず母を溶かした妻のどろろ汁  
政治家の事務所清濁併せ飲む  
ふる里はあ的大海と狼も言い  
不況波じわじわ洗う老いの岸  
所長で第一部屋だけの事務所です  
鬼瓦溶かすえびすにさせる孫  
ひとやすみ事務所の番茶うますぎる  
足浴に腕まくりするお客さん  
春の海童宮城に行けそうな  
陽春の桜に溶けている散歩  
事務所にはあまり座らぬ社長さん  
古株がじわじわ見せてくる素顔  
海に來て料理は何と輸入品  
溶けこんだつもりがポロリ国訛り  
気前よく溶ける余生に増す未練

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

きび団子昔の猿は素直です  
付け足しの知識素通りしてしまい  
散歩道かえて団子屋みつけたら  
パパが好き団子になつてぶらさがる  
アメリカのツケを背負った自衛隊  
愛情の足りないつけか娘に噛まれ  
つじつまを合わせたつけが絞る  
修業の僧の無欲な団子汁

直次 黒兔 螢柳 正三郎 緑骨 祥風 見清 よしろう 長一 信男 徹子 桂子 雪子 久子 禮子 春代 勝

ねんごろになる似たような傷抱いて  
赤い血が流れているか雪女  
血の匂うようなニュースのテレビ消す  
遺伝子の故かも知れぬ血のめぐり  
愛された記憶ない子も親の血が  
大阪のおばちゃん血の気多すぎる  
血の巡り錆が出たのかにぶい脳  
志司法試験の物語  
ハードルをあげて闘志を沸き立たす  
たんぼの綿毛飛びたつ志  
志抱いた男の瞳がきれい  
志半ばで酒に溺れて  
志貫くものを持つ頑固  
白い杖風を読んでる曲り角  
癒やされるお琴の曲は春の海  
へそ曲げた妻は兵糧攻めでくる  
人生は紆余曲折で面白い  
題名は知らぬが亡母の好きな曲  
ほころぶる梅が奏でるシンフォニー  
曲芸も見ているだけで肩がこり  
曲がった釘曲がった音で打ち込まれ  
程々にせよと胃からのメッセージ  
重役の椅子から痛む胃の調子  
呑み込んだ言葉が胃の腑に蹲る  
ひと休み七草粥でする胃腸  
胃に溜まるハローワークの待ち時間  
胃カメラを飲むたびストレス溜ります

千梢 シマ子 なぎさ 叡子 楓 章 久 初太郎 直子 たもつ 朝子 柳弘 雅文 三男 日出子 時弘 宏 柳伸 志華子 タカ子 ひさ乃 庸佑 憲太郎 寿美 遠野 萬代 朝代

胃カメラの心配なしにひと安心  
久し振り胃にもたれぬ人が来る  
丸い鼻血のおもしろさ血の怖さ  
お互いに無口になると部屋が冷え  
天地無用と書いて昼寝のダンボール  
歩く歩くまだ振り返りなどしない  
歩みよる若い人ととの輪に入る  
健康法安く上った歩く法  
自分史の歩みに混ざる軽い嘘  
真つ直ぐに歩くと風が味方する  
一歩だけ前にでる日の深呼吸  
歩いて歩いて神の答えにたどりつく  
まだ虹が立つと信じて歩く道  
プロボーズ君を終身縫い付ける  
ばあちゃんが縫うたどてらは暖かい  
アップリケ手さげ嬉し一年生  
噂の中を器用に縫うて行く女  
風まかせ天衣無縫の山頭火  
対立はよそう根雪が解けはじめ  
対策は無いが骨身は惜しまない  
対向車灯火のマナー欠け困る  
先だつた妻恋しがる対茶碗  
対応のまずさ騒ぎはデカクなり  
酸っぱいと言われぬよう酢を使う  
酢蓮根穴か世相みえますか  
菜の花に酢みそで春のおもいやり  
酔いつ滴心の灰汁も晒さねば

頂留子 東雲 重人 度 たもつ ダン吉 タカ子 東雲 章久 三男 美代子 朝子 雅文 弘泰 なぎさ 萬代 憲太郎 千梢 シマ子 叡子 寿美 直子 初太郎 志華子 柳伸 千里

正論を吐く前少し酢に漬ける  
鐘の音酸いも甘いも知りつくす  
無利子では済まない金を子に借りる  
遠野

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

政党内望む好景氣の日本に  
大海を望むメダカの意氣を買う  
やがてやがて望み大きいフリーター  
希望まだたつぶり抱え古稀の杖  
流した汗が幸運をたぐり寄せ  
運のある男と信じ従いてきた  
能力の不足は運のせいにする  
茶柱が立つて嬉しい運がつく  
平凡に來たのも運がいいのかな  
一陣の風が勝負の別れ道  
運勢に頼らず顔の汗を拭く  
運を天にひたすら歩くことにする  
春風にゆくと任せている綿毛  
古い先がおちおちできぬこの氣配  
年金がスリムになると言う噂  
夜桜へおちおち出來ぬ新社員  
九条が揺らぐおちおちしておれぬ  
櫛の齒がまた一つ欠けクラス会  
何もかも放り出したら落ち着ける  
おちおちへ母が背を押すポンと押す  
レポーターに洗い出された裏の顔  
社の浮沈かけて執筆レポーター  
レポーター今朝のコーヒーほろ苦い  
レポーター土足のくせがなおらない

ひさ乃 重人 遠野 敏 いさお りつえ 吐来 重人 喜久子 草司 フジ 一壺 一知 扶美代 ダン吉 みつこ 昭平 桂子 耕策 かすみ 久仁子 美代子 ヨシ枝 志洋 たけし 庸佑 久仁雄

傷口へマイクねじ込むレポーター  
軒先のつばめは春のレポーター  
川柳塔まつえ吟社 津川 紫昇報  
六 点 泰 子

紅さして米寿の席にすわる母  
さくら咲く婆も祝いが二つ三つ  
祝い酒敷の手に受くはこらし  
弾の中死線を越した祝米寿  
裏方は財布と話す祝い事  
大皿に古希の祝いを嫁が盛る  
したたかに騙す覚悟の紅をひく  
ハイチーズ笑つてカメラだます嘘  
口上手だます男の頬かぶり  
騙し疲れ欠伸連発する狐  
影武者がわんざと居つて分らない  
いい人をすんなりだます赤い舌  
若い時鍛えた腕がものをいう  
若いって大きな武器に違いない  
若者に甘い世相の落とし穴  
若い木と同じ空気を吸っている  
ときめいて若さに挑む空元気  
若い氣でいるから鬼が追つて来る  
歳なりに動くアクセル柔らかい  
アクセルを踏まず人生狂いだす  
アクセルをつい上げ過ぎ火の車  
アクセルも白いボディも春のソナタ  
太陽のアクセルで伸び牡丹の芽  
アクセルを踏んで男の知恵を出す  
ネクタイが夫婦げんかの武器になり

喜美子 邦代 義良 幸子 注湖 澄子 たけし 房子 畔 茂美 きみえ 静恵 圭詩朗 浜丘 桂子 多賀子 昭二 ちえこ 政子 蘭水 石花菜 知恵子 叮紅 小生

春色のネクタイ締めて何処へ行く  
ネクタイの人に出会わぬ島の道  
ネクタイに奪い取られていく酸素  
咲いたさいたネクタイすると大人だね  
ネクタイを締めると尻尾邪魔になる  
紫 見

倉吉川柳会 竹信 照彦報

爛漫の今装いを解く桜  
花の雨洩垂らす生き仏  
寒いなあ仏さまでも抱かれたい  
極楽に今着きました桜の絵  
始末した胎児に詫びる花一輪  
花びらが私に話しかけてくる  
しあわせを締める小さな鍵がある  
人間を盗られぬように戸を締める  
乗客はもう締め切った地球号  
戸を締めて酒を飲んでる未成年  
正門は締め裏口で受付ける  
ピカドンの絵から血の色にじみだす  
花の宴後の始末は下戸の役  
何処にどう始末するのか僕の骨  
花の絵が書けなくなつたイラクの子  
絵案はまことによいが尾が出てる  
絵のような子供が僕に住んでる  
八起きめにきのうの首は始末する  
絵に溶けて酒がふるふる二日酔い  
咲けば散る花の輪廻に迷います  
着物着て心のゆるみ引き締める  
締め過ぎたベルトをゆるめ腰据える

螢 悠子 石花菜 きみ子 賀寿恵 (前)喜美子 登美枝 螢 ひろこ 次男 一夫 泰輔 重忠 玲芳 季芳 よしえ (西)喜美子 修 雄人 和歌子 睦子 龍枝 京子

其処彼処見回る母の後始末

ネクタイを締めて左遷の汽車に乗る  
始末いい姑を見習いメモを取る  
落書きと思えば大家のサインあり  
キャンパスに積年の罪白で覆う  
手とばきの切り給見事な白と黒  
絵双紙に過去をゆるした痕がある  
鯉の絵がニヤリと笑う釣れない日

富柳会

池

森子報

康子 和枝 和子 萩江 ゆり子 日出子 日勝 照彦

前後異に嵌らぬジャンプ力  
カルチャーに嵌つてからのいばら道  
手料理と笑顔に落ちていく男  
嵌め込んで見たがはみ出す皮下脂肪  
銀盤の白鳥を生むコスチューム  
残照に押されて丸い輪をつくる  
青い空鉄打ち捨てて仰ぎ見る  
フラインダー覗くと僕の明日が見え  
きつちりと思いの丈を伝え春  
一匹と遊んで白昼夢に嵌る  
まだ青い青いと父の櫂がとぶ  
チヨコレートに嵌ったバレンタイン以後  
空も水も故郷は四温の梅日和  
殺戮がなければもつと青い星  
老齢も頼りにされてちびてくる  
納得はいかぬが一人過疎で老い  
大空を青いと思う身の平和  
ごった煮の鍋ぶつぶつと民の声  
傷心のおんなは長い影を引く

一慧 由一 亮幹 高鷲 政義 宗貞 冬虹 和代 アキ 鐘造 扶美代 紅紫朗 欣之 東雲 順子 信子 ひろこ 鹿太

花の絵にわたしの彩をいくつ溶く  
この空のつづきに母と子の絆  
赤裸々に生きて木の芽の句詠点  
天地無用僕の魂入れてある  
花曇りダイヤどおりに来る電車  
白を白に戻せなかつた日の旅路  
凜として最後の花弁までたたむ  
おれおれに嵌つてしまおうお人よし  
山また山榊葉の里は雲の中  
じわじわと愛の深さに嵌らんか

高知川柳社

川竹

松風報

鬼焼 春蘭 奈保美 巳代一 初太郎 深雪 奏子 美代子 宏至 森子

ねたきりが孫子に語る処世術  
戦争の苦しみ語る人も老い  
晩酌がまたラバウルを語りだす  
老い同士昔を語りうまが合い  
寝物語不粋な話だつてある  
料亭で本音が語られる政治  
黄昏で昔の夢を語り合  
産声へああ母として父として  
やっぱりね写真に老いの声聞き  
おいしいの声を聞きたいママの腕  
合格の声が受話器の中で跳ね  
奈良に来た実感が湧く鹿の声  
ひと声でこの景色変わります  
引き出しの内緒が声を出したがる  
ロボットのやさしい声に癒される  
ほのかなる梅が匂つてカメラとる

佐紀子 功 快風 孝雄 圭二 熊男 圭風 和江 美々 三郎 佳風 まき子 てるみ 京子 竹萌

声かけて欲しくない日のサンクラス  
松風  
きゃらぼく川柳会  
福代 天雀報

きれいごと入れぬ句の没法要  
当つてくだけそれから考えよう  
小鳥雪梅の花びら踊るよう  
無駄口も叩いて島の芽の葉売り  
ふきの藁春のいぶきを食卓に  
退屈な男の話聞き流す  
怖がつているとそこはか縮かまる  
親方の歩幅に背筋伸びてゆく  
折り畳むタオルの角がきまらない  
山菜が出てきましたと荒介さん  
一日に一度は覗くチューリップ  
リサイクルもう駄目かしら粗大ゴミ  
この寒さ路傍の人の身を思い  
春の雪慌てる僕をあざ笑う  
人間も水も解けてこぼす嘘  
礫のようにやがてやがてが飛んでくる  
春の風やがて心も弾み出す  
芽吹くものみな美しき雪の傘  
陽に逢えばさかなビチビチなぞだらう  
玄關の花幸せそうに咲いています  
放浪記みた夜からのストレッチ  
降つて来た晴れて来たぞと春を待つ  
艶出しが塗つても塗つてもさかぬ顔  
富美子

清人 玲子 雪江 紫泉 八重子 春枝 ふみ 瑞枝 千絵 天雀 杏 恵子 日枝子 初枝 やえ 千春 晶子 千代 ゆき 富美子  
川柳ふうもん吟社 杉本 孝男報 洋々

内心は多分の祝い待っている  
極楽と地獄は多分紙一重

ドンはまた罪の死角でよく眠る  
発掘の欠片古代を絵解きする

欠けた歯で残りの命噛みしめる  
村のドンだあれも鈴を付けられぬ

百年後も多分あの世で句を作る  
グルーブのドンと担がれまとも役

柔かい声で欠点突いてくる  
大義なき戦は多分煮くずれる

頭にも休みなさいと欠伸する  
手の内を多分知っての影法師

総理にも機嫌何うドンがいる  
酸欠の街に明日が匂わない

減量に三日欠食役立たず  
政界のドンにもあつた泣きどころ

君の心に多分私は残るまい  
ドン二人居るから丸い輪にならぬ

子の欠点見ては我が身を振り返り  
札束のだしには多分神も酔う

そしてやがて守つた掟破られる  
出遅れぬように信号見つめてる

花の宴よだきいもんが盛りあげる  
八十路坂生きたゆとりの深呼吸

村のドン都会に出れば小さくなり  
それぞれ指が拳になる勇氣

春の恋天衣無縫に鳥歌う  
あのドンの鼻を一度は折つてやる

うるさいが虫も殺さぬ美女ひとり

圭一郎  
金祥

忠良  
美恵子

三津子  
公子

朋恵  
宗明

無限  
秀夫

静生  
義徳

殺  
のり代

はつ江  
美雪

一瑠  
一京

昌鼓  
雅女

保子  
善夫

志げ緒  
春名

蝨  
賢

茂登子  
孝男

川柳塔みちのく  
小寺

わけもなく両手を合わす野の仏  
お百度をしてから運が向いてくる

平和への祈り吹きこみ鶴を折る  
実力に祈りも混ぜた合格日

ほとけさまに子の健康も祈る日々  
世の平和祈る胎児が腹を蹴る

三浪の絵馬になみだの跡がある  
今日の無事神へ祈つて靴を履く

寝ていても母は気持をゆるめない  
軸足を外すと墮ちた蟻地獄

今日も無事だつた祈りを酒に告げ  
マクニテイ着るとお祈りしたくなる

点滴ボトリ神の情けにすがりつく  
川柳クラブわたの花

針に糸わたしの歳を知っている  
カラオケで調子つばずれもご愛嬌

衣がえ傘寿にもある洒落心  
鯉節削りし親爺思い出す

赤とんぼ追つた故里ダムの中  
峠越え見守る医師の目が和む

真実が絡んだ糸を解きほぐす  
寿命まで元気に生きてグッドバイ

初孫に家族の序列変えられる  
友の死に今生きられる幸思ふ

急ぐまい何れそのうち土になる  
肝心の時に調子が落ちてくる

花菱報  
洋子

あすなろ  
きよし

ヒサ子  
順風

慕情  
銀波

花匠  
井蛙

黙人  
花峯

一花  
五楽庵

一風報  
いつみ

義明  
春江

順生  
知佐子

美代子  
民

八寿子  
はじむ

道子  
宏至

ミツ子

湯あがりのうまいビールが喉を越す  
耳にたこ長寿長寿と言われても

いく度の試練を越えて父卒寿  
緩めたりしめたり妻の掌が温い

春うらら無垢になろうよ碧い空  
ゆつくりとトイレで今日の策を練る

春うらら夢の始末が子を思う  
怨むより許しとくほが楽になる

調子よく波間に泳ぐ夫たぐり  
勝つことは勝つたが空し口げんか

よく揚り渡したくない風の糸  
天神崎自然のままに生き残り

監督の策バッターを歩かせる  
検査検査否心なしの承諾書

水ぬるみ釣糸青い空を切る  
平凡に生きて今年も見える桜

長生きも死にたくもなく八十路越ゆ  
頭から駄目と言うから腹が立つ

長柳会  
加島

山桜恥しらい色の自己主張  
弁当も松花つけは格が上

接点はいくらでもそえて母衣草  
妻の留守コンビニ弁当買ひ漁り

弁当に手紙もそえて母衣草  
接点を合わせ何時しか共白髪

一生をかけた恋路に燃えつきる  
シルバーがダンスに燃える赤い靴

きく子  
君江

宏  
一風

きらり  
欣子

幸枝  
晴美

俊一  
恭一

浩三  
正純

一  
道

(本)たえこ  
ますみ

敏男  
まさこ

由一報  
淳司

靖博  
由一

明信  
けい子

史  
ひろし

もこ  
輝子



年齢古希燃える心を何としよう

弁当に感謝のメモの定年日

接点は無かったままのスペアキー

人類の劫火中近東で燃え

接点がみえず議論がまだ続く

美人画を見ての瞳が燃えている

接点を見指す小川の温い旅

接点が見えぬイラクの砂嵐

晩学の辞書繰る指が燃えている

初恋に燃えたきつてるにきび面

残り火を燃やす火種を探してる

愛憎のはざままで燃えるアマリリス

あの人が触れると赤い花が咲く

接点は手話から愛がこぼれ出す

駅弁と地酒楽しいぶらり旅

くろぼこ川柳会

前坂なお美報

土に生き今日もしつかり生きている  
陽と陰、重人格潜んでる  
おもしろいページこっそり独り読む  
新しいページに向かう虹を追う  
わたしから良心奪う憎い人  
安心だ奪われるもの何もなく  
人生の階段汗をかき登る  
浄土への階段一歩ずつ進む  
与野党の攻防日本築きあげ  
野の花はちよっと控え目自己主張  
陽だまりの昔話がよく弾む  
太陽のように眩しい君が好き

敬二 正美 英美 幸雄 靖子 美和子 正一 和代 武男 芳野 和子 一慧 正子 富姜子

一ページ下に潜んでいた宝  
野望書く白いページが狹すぎる  
餌奪う仲間離れて孤立する  
自分史の一ページには君のこと

階段の先に椿が落ちました  
天国へ続く階段なら登る  
野仏に水筒の水さしあげる  
階段の下で大声出して呼ぶ

真夜中は野性に戻るうちの猫  
真つ白なページあなたに染められて  
免疫が落ちて階段登れない  
唇をかんで野に咲く花の意地

略奪のさかな日陰に干してある

郵便受けワイドな夢の住むところ  
屋台骨揃きながらも眠入れる  
人生をワイドに生きた笑顔じわ  
おばあちゃんワイド番組見つ寝る

留守の娘に赤飯を炊いてやる朝  
人に酔い花にときめき通り抜け  
大丈夫ですよと鶏がコケッコー  
ああ桜散ってしずかな春となり

絵手紙を宛先越して局へ出し  
年度末ワイド番組競い合う  
認め合うワイドな心道開く  
職退いて過疎で発土に生く  
広角レンズしばればそこに妻がいる

岬川柳会

八十田洞庵報

静生 久江 孝寿 なお美 小鹿 遊子 はおみ ふうみ みち子 あらた 菜美 幸子 公弘

いつの間に死語になったか義理人情  
人気者周りに和む風送る  
日本晴れワイドに写す富士の山

豊中もくせい川柳会 江見 見清報

お砂糖がすっかり溶けたマニフェスト  
ユニークな八方美人ませ返す  
塩控え砂糖控えてよく食べる  
ユニークに生きたい二十一世紀

別れ上手笑って聞いている胸の淵  
年かさねせてボケずに生きたいな  
花育てせて季節を知る余生  
ユニークに自信満々阿波踊り

満点の嫁と会話がはずまない  
ユニークな企画で左遷の友送る  
おばあちゃん可愛い孫も桜くみ  
人の波桜前線追いかける

この柄がユニークなんだそうなんだ  
血糖値砂糖に罪を着せる妻  
ユニークな板面を捨てて輪に入る  
砂糖きき揺らせ平和が吹くザワワ

ユニークなほめ言葉かなどうだろうか  
はなまるを息子につけた嫁が来た  
お祭がとてユニークお楽しみ  
世話かけたせめてのお礼介護する

ユニークな役者つきつき消えて行く  
れんげ草小さな恋で終ったね  
長寿の水夫、二口妻三口  
親達のせめてせめてが子の重荷

里子 和香 洞庵 啓生 春 英子 則彦 加重子 蛙 慶子 満寿巳 萬的 都代子 巴子 タミ 石舟 重人 尚士 久美子 玲子 郁子 知香子 正坊 紫香 宇乃子 千津子

雑念もともに散りゆく夕桜  
ユニークな案へざわめく会議室  
せめてお茶一杯下さい帰るから  
春惜しむ花びら集い疎水ゆく

川柳塔おとり

西原 艶子報

さまざまな出会いが春の風に乗る  
これも愛苦い言葉を受け止める  
煩惱をまたよいしよして夜又になる  
丸呑みの苦い忠告徐々に効く  
赤紙の苦い思いは子にさせぬ  
試着空気取る鏡が苦笑する  
良薬と思ひ苦言を囁みしめる  
車座の仲間苦言も容赦ない  
筆まめな人から届く花だより  
挨拶がもつれた糸を解きほぐす  
ライバルに今日のコーヒードン入れる  
ほろ苦い思い出糧にして生きる  
えらいわね子供の頭撫でて言う  
おはようの挨拶今日の幕があく  
あつちの水苦いと蛭とんで来た  
追い風のよいしよの波にうまく乗る  
目をつむり苦い葉も飲んでみる  
苦い酒いまは安定剤となる  
ほろ苦い昭和が背なにしがみつく  
空き缶を挨拶がわり蹴つ飛ばす  
名門へ一浪二浪の道苦い  
春うららよいしよと腰も軽くする  
あなたでも僕でも過去の埃でる

求芽 庸佑 寿姜子 見清  
由多香 雄々 登美 以和万津 彩子 幸次郎 宏章 孝子 默光 舍人 美佳 ヒロ子 清子 富貴子 庸二 紀子 和子 風花 一弘 小生 道一 真一

挨拶状いいことはかり書いてある  
艶子  
どじを踏むわたしへぬくい友の傘  
どんどんと家事が片付く低気圧  
むらくも川柳会 毛利 幸報  
ひとり 美恵子

岩美川柳会

石谷美恵子報

笑われてなんば平氣のプロになる  
喜寿なんて笑いとばして若くなる  
ユーモアと笑いの意味を囁みしめる  
笑わない日も結構はある独り者  
春が来てどんどん夢が広がった  
古希の舟どんどん大河流れ着く  
流れ雲どんどん母を乗せて行く  
故郷がどんどん遠くなる錦  
どんどんと前だけをみて気にしない  
油断してどんどん下がる骨密度  
天秤棒染む亡父の汗おれの汗  
棒読みに涙をさそう若い喪主  
棒切れて覚えたいろは花と咲く  
棒読みの祝辞言うより歌うたえ  
棒グラフ不況の波で伸び悩む  
仲間みたいな顔で煙草の火を借りる  
酒呑んだ仲間も漁場教えない  
新しい仲間と跳ねるランドセル  
犬の目がボクも仲間とうったえる  
どん底で踏まれた父のと根性  
踏まないでこれから開くさくら草  
気にかけて貰いたいから足を踏む  
後輩がみんな私を踏んでゆく  
世渡りを踏んでも脳は錆びてくる  
お百度を踏んでも脳は錆びてくる  
二の足を踏む間に運が逃げて行く

賢郎 蟹郎 孝男 克枝 圭一郎 照子 きみ子 節子 葛子 幸枝 重忠 陸子 公子 稔 かつみ 季芳 忠良 公乃 和子 はるお よしえ 一粋 雅女 節子 裕子 たぬ

ほろ酔いの楽しい歌の花見酒  
ほろ酔いが男の口を軽くする  
ほろ酔うた二人の話つきませず  
いい報せはいつのまにやら二日酔い  
ほろ酔いがいつのまにやら二日酔い  
ほろ酔いの客は隣の菓座の上  
ほろ酔いに月がフラフラ付いてくる  
ほろ酔いの出雲訛りが派手になる  
赤ワインほろ酔い匂う頬ほてり  
ほんのりとほほ紅さしてほろ酔いか  
ほろ酔いで帰れば妻は大ジョッキ  
さりげなく生きたいという独り者  
ぼつぼつと畠仕事が待っている  
お花好きじつと見つめるあの姿  
出がらしのお茶でも私は新茶です  
花見客さくら吹雪に肩すほめ  
健やかに花束もらう誕生日

川柳さんだ 北野 哲男報  
人聞を詩人にさせるメダカの譜  
箱入りは水があわねとメダカ達  
メダカでもスクラム組むと手強いぞ  
小さくも五分の魂ある目高  
九十年恋物語塚家歌劇  
姫鏡台のぞけば怖い祖母が居る

朋月 開子 順子 忠 房江  
明朗 彰 秀子 幸 定子 恵美子 義良 安男 英男 信夫 美保子 昭子  
美恵子 幸報 明朗 彰 秀子 幸 定子 恵美子 義良 安男 英男 信夫 美保子 昭子



青空に子供のあくびが響かない  
雑草さけれど私も花は咲く  
いつまでも咲く男が摘みに来る  
古人好んだアセビ今も咲く  
花くもり宇宙飲み干す茶を一杯  
四季咲きの男で夢が実らない  
ためらいも恥じらいもない猫の恋

いずも川柳会

佐藤

治代報

蓋開けて人が集まるマンホール  
関西のうどんの味に溶けた嫁  
いいわけを花を持たせてきてやる  
死角より覗かれていますある予感  
じつくりと煮込んだ鍋の落し蓋  
全国のペットのようなハルウララ  
子の寝顔覗き巢立ちの日を想う  
貧乏神が覗かぬように笑っている  
瘡蓋がとれてぞろぞろ出る内緒  
楽しさを詰めては覗く壺の中  
指切りの明日が心配花曇り  
悲しみに蓋する夜のロゼワイン  
B面は生涯蓋をしたまんま  
一輪のバラをいただく垣根こし  
まだ花が届くわたしの誕生日  
買物にちらりと覗く暮し向き  
すく切れる手の掛けようが不足らしい  
言い訳の手打ちうんと知っている  
花のある家から笑う声がする  
わたくしの心の闇を知るベット

菊子 正行 五月 歳子 章子 哲男 正和

英子 スズコ ミチ子 啓三 和歌子 邦子 多輝子 富恵 テル子 歌子 まこと 寿美 桂子 秀子 昌枝 浜丘 玲子 芙佐子 多喜 久子

ストレスを分解させた覗き穴  
ごまかした心の中を覗かれる  
野の花が咲いて子供は蝶になる  
好奇心いつかあの蓋取つてやる  
一緒に居ても心の中はのぞけない  
正直なベットで主によく似てる  
三分間我慢をしろうといううどん  
昨日よりまたふくらんだ花つほみ  
素うどんで別れ話は素う気ない  
くちびるのまわりを攻めてくるベット

川柳藤井寺

高田美代子報

春風の爽快さには敵わない  
爽やかな顔が並んでランドセル  
爽快に野道を走る春の歌  
雲海は足下朝日に手を合わす  
爽やかな風がうれしい結願寺  
爽快なマーチで弾むマステーム  
爽快な目覚めだ今日も生きている  
再検査気分爽快異常なし  
青かった地球も今は薄汚れ  
青白い炎の中にある嫉妬  
青春の思い出進駐軍と語  
移り気な男に見えぬ青い鳥  
青い瞳の人も混じって禅の寺  
絵手紙の空がはみだす良い知らせ  
青春を辿れば青い殻の中  
蒼沢に青 沖繩の海と空  
聴診器私とどきどきしてますか

蘭水 叮紅 房江 満子 文子 ちかし 茂美 きみえ 多賀子 章峰

扶美代 ヨシ枝 アヤ子 耕策 重人 志洋 いさお 庸佑 井竿 鐘造 栄一 喜代子 雅枝 婦美枝 美代子 かつみ 悦子

どきどきと女医の触診待つベット  
心臓がメッチャ喜ぶ内緒こと  
どきどきと胸の振りの夜も古くなる  
足速に靴音追って来る夜道  
どきどきは単に息切れしてただけ  
合格が結果気になるドツキドキ  
老いらくの恋救心が手放せぬ  
合格が動悸伝える受話器鳴る  
内心はどきどきクルルに見えるだけ  
初仕事どきどきしてる盲導犬  
どきどきに馴れて図太くなつて来た  
リクルートスーツで春の四分音符  
あれもだめこれもだめならなに食べよ

川柳エスボ

山本

三郎報

悔いてます軽い気持で押した印  
先ず軽く笑いを取って本題に  
マッサージ帰りの足が軽くなる  
帯解いてはつとひと息軽い肩  
迷いも覚めて足元軽く桜道  
軽い羽根つけて山なみ越えたいな  
道すがら軽く挨拶知らん人  
二人連れ出れば財布は軽くなり  
冗談が軽い気持の誤解うむ  
財布軽いと子に意見も出来兼ねる  
軽はずみ二つ返事が仇になる  
虐待は軽い刑では済まされぬ  
ライバルの仕掛けた罠を軽く跳ぶ  
軽くとも無二の宝よわが命

龍一 桂子 瑠美子 史郎 六郎 光男 惠勇 絹歌 登志子 武義 昭子 アキ 昌子

とし子 さち子 はつよ 一幸 れい子 星花 ゆき子 政雄 昭一朗 とよ子 高栄 三郎 さとし 団地

むずかしい会話はいらぬ介護の手話してよ心が軽くなるように  
軽はずみいつも後悔するばかり  
訳ありを軽く引き受け荷が重い  
宿命を軽く捉えて強くなり  
軽やかに花愛でながら翔びまわる

堺川柳会

河内

月子報

子は子等の行き先ありぬ良き門出

満月も彼女も臆優しいよ

五丁玉集めどこにも縁がない

賽銭の一円貨にも射す朝日

パン食の呪縛解かれて成田着

食パンも薄切りとなり二人きり

潔い若さに少し嫉妬する

落ちてゐる一円拾う勇気出さず

晩学の門出だ軽いカバン買う

いつてくるいつてらつしやいたのしい日

桜背に撮るアングルも門出の日

人生をまあるく細く長く生き

イケメンの若いあなたにしびれた日

朝食はママの車でパンかじる

職終えてスローライフで行く門出

古里を捨てる門出でありました

ああ門出おもしろしとした幼稚園

旅立ちヘンヤツはブルートと決めてある

アンパンも二つに割って食べた仲

パン作り妻はオーブン買ったまま

友達になつてと鳩へパンの屑

三代  
文好  
一炊  
任有  
みさと  
ルイ子

春蘭  
半銭  
小雪

楓  
文  
かりん  
泰子

さくら  
伽羅  
舞夢  
篤子

日の出  
冬虹  
八千代  
千代

梓  
りつえ  
扶美代  
鐘造

玄也  
恵勇

キッチン

後味の悪さが少しある門出

何ひとつしてやれないが達者でな

胃カメラにわたしの酒量叱られる

絵手紙に円い月かく一人旅

やつとです新たな門出フルムーン  
イラクへの門出重なる兄の影  
いつまでもわたし頼りにして困る  
根回しもイジメも知らぬ新社員

正論を吐いて後へは下がらない  
栄転の後押す母のつつみ紙  
初夏を描く水色を溶く絵の具皿  
一人ずつ児が欠けてゆく夕茜  
毎日のページを埋める愛と憎  
恋をして名前ノートに書きまくる  
よく文句言つた私が厭かく  
絵葉書をかいて御無沙汰詫びてます  
かくだけは書いた発表待つばかり  
一瞥し鬼の攪乱やなどだけ  
独り居に無言の電話夜が怖い  
ほんとうの怖さを知らぬのが怖い  
おとなしい言つては修羅場くつた価値がない  
怖いというの怖さの犬怖い  
王様に生まれ鏡のないくらし  
鶏の首に追いかけられた怖い夢  
怖かった父の遺骨を軽く抱く  
花に実になれよと祖母は孫を抱く

翠洋会  
六吹  
尚士報

志華子  
絹子  
正坊  
尚士  
日の出  
舞夢  
叡子  
会美  
千梢  
蕉子  
照子  
さと美  
春

朋月  
つづや  
時雄  
好  
なきと  
萌  
像山  
甚一  
公誠

お隣と競う車を磨く朝  
ネクタイを外すとおとこ甘くなる  
いつか咲くオンリーワンの花として  
悲しくてたんぽぽを吹く涙ふく  
新緑や口にもみどり草団子  
友たちの家の事情は知つてゐる  
自治会長妻にはただの粗大ゴミ  
少年が今日も集まる秘密基地

正雄  
孝一  
富子  
理恵  
義一  
良  
石舟  
みつ子

蛙

昭

昌

### 川柳あさひ七〇〇号記念

### 全国誌上大会

課題と選者 各各題2句・投句用紙又は便箋

#### 〔買物〕

- 中澤 恵生 (長野)
- 進藤 嬰児 (札幌)
- 大橋 政良 (砂川)
- 米澤 苦郎 (函館)
- 岡崎たけ子 (札幌)
- 播本 充子 (東京)
- 土江田千治 (釧路)
- 葛西 未明 (札幌)
- 三浦 強一 (札幌)
- 大野 信夫 (旭川)

#### 〔公園〕

- 大野 信夫 (旭川)

締切 六月三十日必着

投句料 一〇〇〇円 切手不可 (発表誌呈賞)

投句先〒078 旭川市東光一条十丁目一七

庄司昭志啓方 TEL 0166-3712582

旭川川柳社

# 柳界展望

中から次の通り入選句が決定。本社関係者は次の通り〈人位〉

花守りの丹精があり花の道

高田美代子

〈地位〉

着飾っても桜に勝てぬ通り

西村りつえ

〈天位〉

御衣黄のみどり気品の自己主張

村上直樹

〈秀逸〉松尾柳右子・河内天笑・岩崎公誠・津守柳伸

☆大阪府立健康科学センタ

募集の健康川柳は、333句のうちから10句が選ばれた。

本社関係者は次のとおり。

若い子にまじって僕のレオ

タード(他1句) 前たもつ

☆薫風名誉主幹は、NHK学園発行「川柳春秋」73号

(4月1日発行)に巻頭随想「夕桜」を執筆。

☆木本朱夏常任理事は「黎明」3月号に「時を掠め取るもの」と題して柳論を、

また「人間座」4月号に随筆「言葉の森から」を発表した。

▽叙 勲△

☆堀 良江さん(同人・茨木市)は、教育活動の功績により平成16年度春の叙勲で瑞宝小綬章を受章。

▽同人動向△

☆奥田みつ子副主幹は「川柳塔のぞみ」句会出席のため、4月16日東京行。他に2名同行。

▽御芳志御礼△

□高橋岳水氏(同人・弘前市)から、合同句集発刊記念に金一封を拝受。

▼計 報▲

■梅田宣司氏(同人・北九州市)は、4月16日病氣により逝去。18日門司区のペルコ会館で告別式が行われた。享年84歳(追悼記事は105頁に掲載)

☆第39回中国ブロック川柳大会は4月17日皆生温泉の「ワケ浜荘」で開催。当日の本社関係者秀句は次の通り

幸せな朝だ静かな波がしら

恒松 町紅

男ひとり天守閣から見ろ

小島 蘭幸

桜

太陽と向き合う赤よトマトの句

政岡日枝子

☆ふあうすと川柳社は、4月18日兵庫県民会館で、400名以上の参加を得て75周年記念大会を開催。当日の本社関係受賞者は次の通り

〈全日本川柳協会賞〉

紅白のまんじゅう今年も配ります

石森 利昭

☆平成16年造幣局桜の通り

抜け川柳は、千句の応募の

## 新同人紹介

須磨活恵

— 諷云児・美籠推薦

前田ゆい

— 薫風・呂万・ダン吉推薦

中島寿海

— 薫風・ダン吉・東吉推薦

達磨→達磨 P 69上段25行 業進行状況報告 ②80周年

目、離さない↓放さない P 及び10回まつりについて、

74上段1行目、開放↓解放 あゆみ、懇親宴、チラシ配

P 76下段14行目、煙り↓煙 布、記念品等 ③賞選者

5月号 P 74上段18行目、 準備 ④次期推薦役員検討

真に受けて↓つい真に受け ⑤特別常任理事会の課題に

て P 98上段14行目、詠む ⑥大阪川柳大会選

↓読む 者、新同人3名 H Pの件

常任理事会 P 5月7日 出 次回常任理事会 P 6月7日

席者18名 ①合同句集の作 (月)13時 アウイーナ大坂

句会名	日時と題	会場と投句先
高槻川柳 サークル 卯の花	17日(木)正午から 練る・玄関・味・空模様 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1031 高槻市松ヶ丘2-8-9 上砂真笑
城北会 川柳会	19日(土)午後1時から ぞくぞく・バランス・女 自由吟	神徳会館 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
岸和田会 川柳会	19日(土)午後1時半から 吹く・へそくり・棒立ち まぎれる	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-307 長谷川呂万
川柳会 藤井寺	20日(日)午後1時から 帽子・スライス	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公園1-105 高田美代子
川柳会 ねやがわ	20日(日)午後1時半から 仕事・寝言・研ぐ・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	20日(日)午後1時半から 損・たっぷり・助け船 自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八田洞庵
もくせい 川柳会	21日(月)午後1時から 判決・レストラン・ごつごつ 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
南大阪会 川柳会	23日(水)午後6時から 連敗・温和・混乱・双方	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	25日(金)午前10時から 劇・傾く・機嫌・応える	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳会 同好会	26日(土)午後6時から きつい・突く・続く・耳	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市民会 川柳会	27日(日)午後1時から 核・はらはら・ランニング 「夫婦」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳会 ふうもん 社	27日(日)午後1時から 根・ミサイル・露骨	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京都 塔の会	28日(月)午後1時から 題・配る・間口	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔 みぞくち	28日(月)午後8時から 飛行機・ゆっくり・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

## 6 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎 いくしま	1日(金)午後1時から 吊る・時・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川柳 塔な ら	3日(木)午後1時から 手探り・徳・念願	奈良市立中央公民館4F (近鉄奈良④出口徒歩5分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
富柳会	5日(土)午後1時から ながなが・通る・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉吉 川柳会	5日(土)午後1時から ゴルフ・とんでもない・生きる	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳 塔唐 津	7日(月)午後1時半から 微風・泊・吠える	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
ほたる 川柳 同好会	8日(火)午後1時から トップ・洗濯・絞る	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
尼崎 尾浜 川柳会	8日(火)午後1時半から 心配・拾う・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス④番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
堺川柳会	10日(木)午後1時から 呑気(共選)・もし な・ま・こ(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳 塔打 吹	12日(土)午後1時から 胡座・べとべと・焦る	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博文
川柳 塔ま つえ	12日(土)午後1時半から 時どき・仮面・指・迷う	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島裕丘
川柳 塔み ちのく	12日(土)午後4時から 背中・登る・若い	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
八尾市民 川柳会	13日(日)午後1時から 喉・並ぶ・辛抱・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室(近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川柳 塔わ かやま	13日(日)午後1時から エクス・学・囲む・「獣」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	14日(月)午後1時から 湿る・傾く・紙・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南西出口徒歩3分 プレラにのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわゑ

# 編集後記

☆湯川胃腸病院から広告をいただくようになったのは、昨年1月号(90号)から。その経緯は2月号の当欄に書いたので、記憶して下さる方もあるだろう。以来、掲載誌を病院宛に送らせてもらっている。

☆先日、事務長の山崎裕美さんから次のようなお手紙をいただいた。「いつも『川柳塔』を送って下さり有難うございます。外来ラウンジ、ホスピス病棟に置かせて頂いています。外来ラウンジでは患者の皆さんが読んで下さっています。ホスピス病棟では、読むことのできない患者さんの代りにご家族の方が読んで上げられ、会話が生まれています。本当にありがたいとございませう。」

☆お送りした本誌をどのように扱って下さっているのかなど、考えたことがなかったので大変嬉しいお便りであった。このように利用して川柳の紹介に一役買っただ下さり、また、重篤な方の癒しに少しでも役立つているとすれば望外の幸せだと思ふ。

☆早速、「川柳について、もつと知りたいと言われる方があれば、すぐ飛んで行きますのでよろしくお願いします」と、お礼とお願いをしたためておいた。

☆なお、病院では4月から併設のデイサービスセンターが、オープンしたとの事。居心地のよさそうな食堂・入浴施設・静養室等の写真や、サービス内容を記したパンフレットが同封されていた。じつと眺めていると、歳を取るのもいいなあ、とふと思つた。

## ひとこと

### 「母は」

日本一短い「母」への手紙の本を読んだ。私も母親の一人ではあるが、心打たれる文章の数々に、熱いものが込み上げて来るのを覚えた。暗いニュースが続くこの世の中に、一筋の明るい光のように思え大変うれしくなりました。

私の母は今、脳梗塞で倒れた父のもとへと、毎日病院通いをして

いる。その手助けをしながら最近なぜか、母が一回り小さくなったように感じられ、ドキリとした。毎日じゃなくて、一日置きぐらいにしたら、と言ってはみるのです。が……。やっぱり心配なのでしようね。

こう言う私も昨年「おばあちゃん」になりました。初孫ただ今満一歳。動作、しぐさが一番かわい時です。命の輪廻。(岩本笑子)

○主婦であり、母の介護あり、趣味ありと多忙の日常でありながら、もう一つ仕事を引き受けてしまった。

○毎週月曜日の朝、地元の小学校で、職員朝礼のある15分間、教室で本の読み聞かせ等をして一年生と過すボランティアである。

○呆けない脳の鍛え方、それはしんどいことに首をつっ込むことだそうである。脳リターンは可能だと先日目を迎えたのだが……。

○社会参加をして、できる範囲で役に立つことができればという気持が半分、あとの半分は自分自身のため

日も「試してガッテン」で聞いたばかりである。○月曜日の朝がくると、8時に自転車で家を出る。ゆつくり10分余りかけて小学校へ向かう。

○おとなしく聞いてくれるだろうか。集中させるにはどうすればと不安の第一回目を迎えたのだが……。

○たつた15分とはいえ、未経験の仕事は、最初かなり負担を感じるものであった。

○何よりとても無邪気で可愛い一年生と触れ合えることは幸せ、大いに元氣をも

らっている。

(ふ)

(希)



川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（8月号）地名

市 県  
姓・雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。









## 作品募集

8月号発表(6月15日締切)

川柳塔(8句)	河内天笑選
水煙抄(8句)	板尾岳人選
愛染帖(3句)	波多野五楽庵選
茴香の花(3句)	藤田泰子選
微風	竹治ちかし選
「泊」	春城年代選
「吠える」	近藤春恵選
初歩教室「冷蔵庫」(3句)	三宅保州担当

9月号

課題吟「華やか」「水枕」  
「アルファベット」  
初歩教室「手」

## 本社6月句会

とき 6月7日(月)午後5時半開場・6時半締切  
―開催時間にご注意下さい―  
ところ アウィーナ大坂 4階 金剛東  
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441  
おはなし  
兼題 「メール」  
奥田みつ子  
西内朋月選  
神夏磯典子選  
安藤寿美子選  
「絞る」  
西出楓楽選  
「緑」  
河内天笑選  
「咲く」  
席題 1題 当日発表(各題2句以内)  
会費 1000円 投句料 500円

路郎忌 本社7月句会 7日(水)午後5時半  
兼題 「出る」「縫う」「炎」  
「とろり」「恋」

## 第23年度 夜市川柳募集

第1回「焼酎」 新家完司選  
ハガキに3句 6月末締切  
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3  
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。  
(2)愛染帖・茴香の花・一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限りません。ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。  
(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。  
(4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。  
川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)  
一年分 九千八百円(同)

二〇〇四年(平成十六年)六月一日発行

編集兼 発行人 河内権治

印刷所 美研アート

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町1-1-16

〒545-0005 ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)691-1496

振替 〇〇九八〇一五―三三三六八番

恋も涙も、

五・七・五。

近代川柳に生涯をかけた二〇〇人を  
田辺聖子が精選。もつとも  
人間くさい「文芸」の愉しさを、  
人と作品を通して紹介！



# 川柳の群像

明治・大正・昭和の川柳作家二〇〇人

東野大八 著

田辺聖子 監修・編

田辺聖子

一人一人の作家の生きざま、  
運命と作品が奏でる協和感が美しい。  
芳醇な川柳世界の香気に嗜せかえるばかりだ。  
(中略)こんなにさまざまな質がタイプが  
ゆるされる川柳文学とは何と奔放で  
大胆で自由なものだろう、と思わざるを得ない。

(監修のことはより)

集英社 好評発売中 定価2,625円(税込)

インターネットでも集英社の書籍、コミックスが購入できます。www.shueisha.co.jp

医療法人社団

ISO 9001 : 2000 認証取得

## 湯川胃腸病院

健康保険取扱

消化器科 (内科・外科)

放射線科

ホスピス

診療時間 月～金 9:00～17:00

土 9:00～13:00

電話 大阪 (06) 6771-4861(代)

<http://www.yukawa.or.jp>

〒543-0033

大阪市天王寺区堂ヶ芝2丁目10-2

JR 大阪環状線桃谷駅徒歩3分